# 公教要義

358
26

特18
450

# 公教要義

明治
40 6 14
内交

# 緒言

今此書に其梗概を說かんとする宗教をば、日本と支那に於て之を天主教と呼ぶ、然しながらこは誤謬の名稱である、斯る名稱は二國の他は毫も知らざる所である、此宗教の眞正の名稱は公教である、公教といふの意味は二にして、一は世界開闢に於て造物主の約束に始まり、救主なる耶蘇基督の時に至りて完全に成立し、絶えず傳りつゝあるといふこと、二は世界中悉く隆昌なる譯ではないが、到らぬ隈なく何れの國にも弘布せられて居るといふこと、此二の意味よりして公教と稱するのである、而も日本に於ては概ね皆な此公教の起原、教旨等を知らずして世間に基督教と稱するものと同一のもの同一の宗派であると見做し別に研究せぬものが多い、然れども往々宗教の必要を認て之を研究せむと欲するも幾多の日時と煩勞とを厭ふがゆゑに終に折角の志望を果さゞるに至るもの亦た少くないであらう、此小冊子は斯る志望ある人の爲に刊行したるものである、故に極めて略說に過ぎないけれども、之を讀むで公教は如何なるも

のなるか、其起原其教旨、其目的、其勤行等は略之を知るに足るであらう、此書は素と護教的のものにあらざるがゆゑに深奥なる議論詳密なる立證をなすものでない、唯其教義の大要を極めて簡短に陳べたるに過ぎないといふことを豫め諒せられんことを望む、

書中多少精細に渡りたる箇所は其教の基礎其主義其目的のみである、故に詳論を知らんと欲する人のためには毎章の末尾と必要の所に參考すべき書目を擧げ置きたれば願くはそれ等の書をも與に研究して公教の深義を解せむことを希望する、由來公教は最も質素なる態度を守り、極めて沈着なる步調を取るの道であつて、彼の太鼓を打ち喇叭を吹いて廣告的手段を爲すが如きは最も好ぬ處である、先以て來世の幸福光榮を以て最も緊要なることゝして之に熱衷し、現世の虛榮、夢の如く過去る娛樂に對して全く冷然たる道である、此故に日本の如く未だ隆んに弘布るに至らざる國に於ては多くの人が知らず識らず公教を蔑視するを以て、今玆に公教の教旨を陳ぶるに先ち公教が世界の歷史に如何なる地步を占め居るかといふことの過去と現在に於ける一端を



擧げたい、

書中にも論ずる如く公教は開闢より始まり其完成したるは今を去る約千九百年前である、其より約六百年を降つて泰西諸邦は古來用ひ來れる種々なる曆年の數へ方を廢めて一般に公教の曆年を用ふるに至つた、即ち救世主イエズス、キリストの御誕生の年を以て紀元とし、之より前を降生前何年、後を降生後何年と數へ、歷史までも改刪した、現今歐米各國は皆此紀元を用ひ、アフリカ、オセアニアまでも、開けたる國々は此紀元に從て數へる、世人が今廿世紀と稱するのも此紀元に基いて數へるものである而て此紀元は公教の紀元である、如何となれば希臘教露西教及プロテスタント教（日本に基督新教と呼ぶもの）等は其後に立てられたる教派だからである、即ち紀元千五百三年に至りて希臘教は公教より破門せられた故に同教は約八百五十年前に始まつた離教である、又千七百廿一年一月廿七日露帝ペートル一世が敕令を發して希臘教より分離したるものが露教である、故に之は約百八十五年前より始まつた離教である、又千五百二十年に當て公教の一教師なるルーテルの謀反に因りて公教より破門せられたる

がプロテスタン教である、故に之は約三百八十年前より始つた異教である、されば現今開明諸國に用ひらるゝ紀元は事實公教の紀元といはねばならぬ、尙公平なる眼を以て歷史を觀たならば社會に對して公教の倫理的道義的感化と勢力とは如何に偉大なるものであつたかといふことが識られる、眞實にいへば社會の習慣風儀道德が公教の入り込むだる前後を比較せば如何に非常なる徑庭があるかが解る、例せば奴隷の廢止、婦人の地位、兒女の保育、人命の保護、貧民の救恤、孤兒の撫育、男女子の普通教育、萬國の公法、野蠻的戰爭の廢止等數へ來れば實に夥しき善良なる結果は皆是漸次に公教より出でたる感化である、要するに是れ救主が立てたる他人を己の如く愛すべしてふ規則より生じ來りたるものである、古來の歷史を公明に考へざる人の目より見れば是等多くの善良なる感化は決して公教より出たるものに非ずして單に社會の自然の進歩より出でたる結果に外ならずとする、尙又假りに良効果を與へたりとするも、過去のことである、昔時こそ公教の勢力が然く多大なりしにもせよ、現今の如く益進歩發展の社會に於ては、公教の如き時代遲れの道は愈衰微して世に何の響影を與ふるの勢力はない、否餘りに古に抱泥せる頑固の道德を教ふるがゆゑに却て進歩を沮礙するものであるなど、思ふであらふ、斯る考をなす人は日本なる一國をのみ視て、他の文明諸國一般の狀況に通せざるより起るのである、かゝる人々のためには左に擧ぐる數字上の說明が多少其迷妄を排するであらふ、

千九百一年に出版になりたる界世著名の地圖なる Schrader に揭げたる統計に依るに全世界に於ける公教の信徒數は最も內端に算したるものが二億六千萬である、一統計には二億八千萬と算したるもある、而てプロテスタン教の信徒總數は最も餘計に見積りたるものにて一億九千六百萬である、而もこれは同教の諸多の派を合算したるもので一派にして決して其中に一の異りたる派も交へては居らぬ、今歐洲に於ける公教の信徒數と他教の信徒數とを比較せむ



公教　（中に派ナシ）　一六二、〇〇〇、〇〇〇人

プロテスタン（諸派）　八一、〇〇〇、〇〇〇

希臘敎及露敎
回敎

此表に因て視るときは全歐洲人口の百分の四十六は公敎徒である、
又北亞米利加に於ける各信徒統計は

公敎　二七、二五〇、〇〇〇
プロテスタン敎　三三、三四一、七〇〇
内譯
アングリカン　六、六四六、〇〇〇
メソヂスト　五、四三七、七〇〇
其他の諸派　二一、二五八、〇〇〇

南亞米利加は概ね公敎である、
猶又邦人の考には歐羅巴に於ける獨逸、英國、瑞西の如きは全く新敎國であるとするものが多いであらふ、然れども獨逸國の新敎徒數は三千五百二十三萬一千百四名にし



て之に對する公敎徒數は二千〇三十二萬七千九百十三名である、而もこれは千九百年十二月一日の同國政府の統計である、若しも我邦に獨逸國と同一比例に公敎信徒あるとせば約千七百有餘萬の公敎者ある割合である、尙同國或州に於ける一例を示さむに英國に於ては千九百一年の統計に公敎徒は五百五十二萬八千九百名である、同國は十九世紀の半まで公敎は大なる迫害を受け宣敎の自由がなかつた、其自由を得たるは僅々五六十年前よりである、而て今公敎の布敎上進歩の著きは世界中英國を以て最第一とする、數年前よりは英國監督派より公敎に歸正するもの、英ランド、愛ランド、蘇コツトランドを通じて毎年平均八千乃至九千を以て數へつゝある、而も是等の歸正者が下層の人民のみにあらずして新敎々師と其家族等にも多くある、瑞西國は新敎が百八十萬八千二百七十六名にして公敎が六十七萬七千二百六十四名である、露國は人皆知れる如く黨派心の甚だ强き國柄にして、爲に公敎は酷しき迫害を受けた而も尙千萬乃至千二百萬の公敎徒がある、これは露國民十に對する一の割合である、

殊に千九百五年四月三十日の勅令を以て信教の自由を與へられてより、俄かに公教に歸正するもの至る所に多く例へば Siedlec. Lublin の二州のみに於て二萬六千人あつた其他歐州の小國に至ても是に同じく丁抹國に於ては千八百四十八年に至るまでは總て同國に入る公教徒は死刑に處せらるゝの嚴罰を受けた、斯くまでに黨派心に驅らるゝ國柄であつたから從つて公教者の數は五百に充たなかつた、然るに現今は九千餘の公教徒がある、而も歸正するものは多く上等の階級に在るものである、千九百一年に Magdeburger Zeitung と題する獨逸の一新教新聞は記していふ、丁抹國に於ける貴族の三分の一は公教に改宗せりと、又千九百一年に於ける同國內閣議長 Holstein Ledreb&o伯にして是又公教徒であつた、

右擧げたる數字の說明を視ても尙公教は時代遲れの宗教にして世の進歩を沮碍するものなるが故に今に勢力なき宗教となりしや、英國に高名なる政治家ヂスレリー氏がなせる千八百七十四年の議會に於ける演說の一節を聽け『余は新教徒たるも、隱蔽し能はず餘儀なくせらるゝことは、羅馬の公教が權利と勢力の偉大に存する會なることである、加之現今全世界に在る凡ての會の中最第一に權勢を有するものなること疑ひなし、此顯證を嫌厭して或は認めざることものにあらず』と、眼を日本の一局部に置くならば成程公教徒は未だ微々たるものである、然れども明治に至るまで教師信徒を迫害し殺戮したるのみならず、世界と交通を杜絕して、妄りに入込むことの可能はざりし日本が僅々數十年間に公教の如き超自然的宗教に感化せしむるといふが如きは到底不可能事である、亞細亞各國は概ね斯の如くにして朝鮮支那東京安南暹羅等は何れも四五十年前より漸く自由に出入することを得るに至つた、而も亞細亞各國を合算すれば公教徒の數は既に約千萬に達する、右大體の統計に於て開明國ほど公教徒の數多く、又勢力を有する宗教も公教であることは明晰である、支那西藏蒙古の如く無學にして發明も進歩もなく往古より既に睡眠に陷り、智も情も麻痺したる國々が理由を解せずして公教を嫌ひ之を迫害するといふが如きことを以て公教を輕侮するが如きは最も乳臭き考へである、無智無學なるもの、何千億の人が擧つて反對するとも、眞面目なる論題上に於ては何等の價値を存せぬも

のである我邦民は怜悧なるに於て名あり、又其中眞面目なるものも少くない、願くは日本のみに限らず、亞細亞のみに限らず廣く全世界に目を注けて徐に其狀勢を觀察し廣潤なる心を以て此小冊子を讀過せられんことを希望する所である





# 公教要義目次


第一章　神と人……一頁
第一節　神……一頁
第一項　神の存在……一頁
第二項　神の性質……三頁
第二節　人……六頁
第一項　靈魂の存在……七頁
第二項　靈魂の不滅……九頁
第二章　人道と天啓教……一一頁
第一節　人道……一一頁
第二節　天啓の必要……一三頁

第三節　天啓の有り得らるべきこと……一四頁
第四節　天啓は事實に於て有りたること……一六頁
第二章　聖書と聖傳……一八頁
第一節　聖書の眞實なること……一八頁
第二節　聖書の天啓なること……二〇頁
第三節　豫言……二一頁
第四節　奇蹟……二四頁
第五節　聖傳……二五頁
第六節　天啓の決定……二六頁
○公教の信ずる所……二七頁
第四章　神、其三位一體の玄義……二八頁



第五章　萬物の創造……三三頁
第一節　無形世界、天使……三四頁
第二節　有形世界……三七頁
第三節　人間……三九頁
第六章　超自然教……三九頁
第一節　超自然なる目的……四〇頁
第二節　超自然なる力（恩惠）……四二頁
第三節　超自然なる善德……四三頁
第四節　超自然論の終結……四四頁
第七章　人祖……四六頁
第一節　源罪……四七頁

第二節　源罪の傳來……四九頁
第八章　謀反者なる人類に對する神の聖計……五〇頁
第九章　舊約時代……五三頁
第十章　救主耶蘇基督……五九頁
第一節　其御名……六〇頁
第二節　其御性質……六一頁
第三節　其略歷……六四頁
第四節　豫言より視たる耶蘇の聖歷……六五頁
第五節　事實に於ける耶蘇の聖歷……六八頁
第六節　父なくして生れ給ふ……七〇頁
第七節　耶蘇の聖計……七二頁



第八節　善德の性質……七四頁
第九節　御誕生……七七頁
第十節　耶蘇の宣敎、十二使徒の撰定……七九頁
第十一節　耶蘇の敎訓……八二頁
第一項　傲慢と謙遜……八二頁
第二項　來世の賞罰……八四頁
第三項　愛德……八七頁
第四項　神の憐……八九頁
第十二節　耶蘇の奇蹟……九一頁
第十三節　耶蘇の御苦難御死去……九六頁
第一項　猶太の狀況……九六頁
第二項　御苦難……九九頁

第三項　御死去……一〇二頁
第十四節　御復活……一〇五頁
第十五節　御復活後……一〇九頁
第十六節　御昇天……一一三頁
第十一章　聖靈降臨……一一六頁
第一節　聖靈降臨……一一七頁
第二節　聖靈降臨の結果……一一九頁
第十二章　公教會……一二三頁
第一節　其意義……一二三頁
第二節　其制度……一二四頁



第三節　其頭領……一二六頁
第四節　其存續……一二九頁
第五節　其四の徽號……一三一頁
第十三章　死後の事……一三三頁
第一節　死後の三所……一三三頁
第二節　諸聖人の通功……一三四頁
第三節　私審判……一三九頁
第四節　公審判……一三九頁
○避くべき事守るべき事
第十四章　善と惡……一四四頁

第十五章　十誡……一四六頁
第十六章　聖公會の六誡……一五一頁
第十七章　超自然の恩寵……
第一節　時有の恩寵……一五四頁
第二節　恒有の恩寵……一五七頁
第十八章　秘蹟……一五八頁
第一節　洗禮……一六一頁
第二節　悔悛……一六三頁
第三節　堅信……一六九頁
第四節　聖體……一七〇頁
第一項　聖體の秘蹟……一七二頁
第二項　ミサ聖祭……一七七頁
第五節　婚姻……一七九頁
第六節　終油……一八一頁
第七節　品級……一八二頁
附說　公教と他教との異同……一八五頁

以上





# 目次

終

# 公教要義

佛國 ドルアル、ド、レゼー口述
日本 林 壽太郎筆記

## 第一章 神と人

### 第一節 神



吾人々類の具へたる智識は飽くまでも事物の本原を究めたいといふ性質である、吾人は此本性に因りて物質世界を視るときは直に先づ如何にして生じたるか、如何なる力如何なる法則に因りて存在するかといふことを探究せんことを欲するものである、然れども其原由は眼にざること能はざるものである、然らば如何にして之を研究し得るや、他なし萬物萬象を研究するに同じく無學無識の蠻民までが自然に知つて疑はざる所の定論に因りてするのである、何をか其定論とする、例へば反對なる二物は同一

ならずといふ撞着を許さゞる思想の法、或は結果あれば原因なかるべからずといふ因果の理、或は全體は部分より大なりとか、少數は多數ならずとかいふ則の如きもの、是之を自明の眞理といふ、

## 第一項　神の存在

吾人は此自明の眞理に因りて物質界は有形なるがゆゑに如何にしても有限物である、故に始めなかるべからずと知る、既に始めあるとすれば物質は或原因の結果である、然らば其原因は何なるか、若し或原因の結果なりとすれば其原因の原因は何なるか、斯く原因の原因に溯らば終には原因なき原因即ち第一原因なる始めなきものに到達せねばならぬ、而て原因も始もないといふことは取りも直さず無限絶對であるから物質界は無限物の働きの一結果であると知る、是れ自明の眞理より出でたる結論である、此無限物即之を神と稱するのである、又之に同じく太陽太陰地球惑星等の運轉及び萬物の秩序、地上の生物、人間一般の有



する神の思想即ち人類の公認等に因りて推究するに如何しても吾人は無限なる原因と達せねばならぬ、

## 第二項　神の性質

既に斯く萬物の本原が其性質無限であるならば、同一の論理に因りて其御德の一班は推知し得らるゝ、即二つ以上の無限物の存在てふことは撞着にして自明の眞理が許さぬ、故に無限物は唯一でなければならぬと知る、又形有りとするは限り有りとするに同じで是又撞着である、故に無限ならぬと知る、尙又無限とは絶對にして完全なることである、故に缺點誤謬不完全が無いといふのである、隨て始も終もなく永遠なるものでなければならぬと知る、又其結果なるものに生物がある故に之を出だせる原因も生きるものでなければならぬ、即無限に活きる御者と知る、斯の如く推究すれば神の性質は左の如きものである、

居らざる所なし、之を神の遍在といふ、

知らざる所なし、之を神の全智といふ。
能はざる所なし、之を神の全能といふ。
惡しき所なし、之を神の全善といふ、
不義なる所なし、之を神の完全義といふ
不秩序なる所なし、之を神の完全美といふ、
不幸なる所なし、之を神の完全福といふ、
約めていへば萬物の本原なるもの即ち神は實在者にして活ける無邊の靈である、今の流行語を以ていへば神は人格的活靈である、
（詳論を視んと欲せば眞理の本原に就て看られよ）
彼の凡神論者唯心論者などのいふ如き思想的遍在者ありとするは無神論と相距る遠からざるもので、右の論理上の結論より出る萬物の本原てふことを破壞するに同じである、客觀的實在を疎外して專ら主觀的に偏するものである、斯る說は論理でも學問でもない、





却說萬物の中なる人類も斯く唯一なる無限物によりて生せられたるもの即ち造物主に造られたるものなれば造物主は人類の本原である、故に其間に本末の關係がある、又人類の眞正の主なるがゆゑに、主從の關係がある、又人類の眞正の親なるがゆゑに、親子の關係がある、是等種々の關係に因て神に對して種々なる義務を有する、即ち拜禮、孝行、忠義、感謝、祈願等である、是等多くの義務あるより宗教が生ずる、例へば親子の關係より孝道が生じ主從の關係より忠義の生ずるが如きものである、されば宗教とは畢竟神と人との關係より生ずる義務を守らしむる道である、近くいへば人は結果であるから其原因に對して全く不羈獨立なることは得られぬ、否でも應でも其原因に羈束られて居る、人類は此の道理を自然に曉つたから古來如何なる野蠻國にまでも宗教の存せざる國は一もなかつたのである、單に人智右陳べたる所は理論上の問題で人が自から智力を以て曉り得ることである、
の研究のみを以てしては以上の他萬物の本源なる唯一の神に就て知り得らるゝことはないのである、

## 第二節　人

義務とは人が道理と正義に依りて當然爲すべき行である、然し義務にして制裁が無いならば如何であらふ、之を守るも背くも人の自由である、如何となれば人は義務を守るも守らざるも毫も利害得失を感せぬからである、されば概して制裁なき義務誡命法律は之なきに同じである、制裁なき社會とはいはれぬが、善惡の應報が精而て今吾人の社會を概觀するに、全然制裁なき宗教なきと一般である、確に行はれぬことがある、假しあつても決して適當の應報でない、社會の狀態は多くの識者のいふ如く跛足な制裁が行はれる、如何しても天道は是か非かの嘆あるを免れぬ、此に於てか吾人に最も重要なる問題が一つ生ずる、即現世の制裁が斯く不完全ならば來世に於て全く是等の不等不平を矯すであらふかといふことである、換言れば吾人々類に來世あるか、物質なる身體の他に無形なる靈魂を有する人間は身體の死すると同時に靈魂も死滅するか、將た生存するか、若し生存するとせば不滅なるか否といふことである、



斯る難解な問題は到底人智に及ぶものでないとする先生も隨分多い、又近世社會が物質的文明に進むに從つて斯く考ふる先生が愈多くなるの傾向である、然れども商工業の進歩に因て自明の眞理が變遷し若くは滅亡することはない、然らば吾人は自明の存在と其存在不滅等を知り得られざる筈はない、

### 第一項　靈魂の存在

今之を極めて簡短に陳べんに、人の種々なる働作の中には決して物質的より出ずる結果ならずして其原因が必ず無形的でなければならぬことがある、其中特に優れたるものは概念を作るといふことである、人は概念によりて種々なることを思考し論議し判斷し結論する、斯く概念を作り之に因て以て思考するといふ力を智識といふ、而て總て力といふものは之を有する本體がなければならぬ、若し本體がないならば實在する

ものでない、從つて働作することはない、例へば物質がないならば引力は如何にして有り得られやふか、如何にして作用し得られやうか、物質は其性質に因りて引力といふ珍しき力を具へて居るから作用し運轉するのである、されば引力と物質と離るべからざるが如く智識といふ優れたる力があるならば之を具へたる本體も亦た物質でなく無形的即靈ぬ、而て此力は無形的の力なるがゆゑに之を有する本體も亦た物質でなく無形的即靈性のものでなければならぬと知る、是れ自明の眞理より出る推論である、此靈性物之を吾人は稱してたましゐといひ又靈魂ともいふ、

之に依て見ると人間といふものは身體なる物質とたましゐなる靈體との二者結合より成るものである、之は道理の說であるから、往古より野蠻人さへも自然に知つた所である、哲學者の中に之を疑つたものは少い、近世に於ても之を拒むものは實驗學のみを崇拜する物質的研究のみを事とする先生に限る、然し實驗學が如何程珍しい發明ある學問でも完全なるものではない、其他に形而上の學問即自明の眞理より出る學問も



以上の如く吾人々間に疑ひなく具ふる所の靈體は物質なる肉體と共に滅するや將た生存して滅せざるや、

## 第二項　靈魂の不滅

先づ靈體の滅するといふ論者は何の確證もなく漫然滅するものであると主張するに過ぎぬ、之に反して其不滅なりといふの論證は甚だ多くある、

第一は靈魂の性質上より證明するもの、即靈魂は無形にして單純なるがゆゑに變化破壞し得られざるものである、

第二は理化學上の證明で即ち理化學に於けるエネルギー恒存、物質不滅の法則より見れば、物質に含有せるエネルギーは減ずること滅することがない、物質元素も亦た滅することがない、エネルギーと元素とは其形狀を變化することあるのみである、斯く靈體に劣るものが不滅ならば之に優る靈體が滅するといふは如何にも權衡を失する考である、靈魂不滅と考ふること實に合理の說である、

第三は道義上の證明で、社會の狀態を見れば道義に就て大に混亂不秩序なることを見出す、多くの善人は不幸に遭ひ却て多くの惡人が幸福を得る、善惡の制裁が行はれて居らぬと思はれることも往々ある、又あるとしても甚だ不完全である、完全なる道義に在す神、人の主と親なる神の有ることが疑ひないならば現世の此混亂不秩序は來世に於て矯さるゝこと疑ひない、若し之を疑ふならばそは神がないといふに同じである、第四は性理上の證明で、世界の歷史に因れば何人も其性に遵つて靈魂の不滅を信じて居る、實にシセロンのいひし如く、斯く人性一般に認めたる判定は眞理にして疑ひないゝ、

第五は人の願望に因ての證明で、人類一般は幸福を欲し快樂を望むが其自然の性である、而も現世に於ては一も滿足に其欲望を達したものは開闢以來一人もない、斯る願望を人類に賦へられたる神が一方に限りなき願望を其性に賦へ置きながら一方に於て之を充たしめざるやふにするといふは撞着にして人類を欺くに同じである、神に斯ることのなし得べき筈がない、故に是非とも眞正の滿足すべき幸福を與へらるゝ來世がなければならぬと知るのである、

（詳論は哲學論綱及眞理の本原を看よ）

# 第二章　人道と天啓教

## 第一節　人道

如上の神と人とに就ての說は道理を以て推知し得らるゝのみならず、左まで深く研究せずとも人々自然の性に因りて知り得られ信じ得らるゝことである、此故に昔の哲學者が人は宗教を信ずるの性を有すと定義したのである、

然しながら智力のみを以ては神、人間、來世等に就て右の外何をも知り得られぬ、單に之のみを知るのは道理上の道即性法のみである、斯く性法に因りて人道を知るも造物主か萬物に對する攝理、特に人類に對する聖慮を明瞭に知り得られない、萬物の攝理は無限なる智より出るものなれば之は道理以上のものである、之を研究することは極めて深遠なる智と正直なる心を有つ人でありても甚だ誤り易い、大學者大聖人で

も誤り易いほどならば普通の人間には更に誤り易いであらふ、各國の歴史に就て往古より今に至る社會の狀態を視よ、神に就て誤謬なかつた國は猶太の國民の外はなかつたといふても過言でない、無智文盲なる蠻民のみならず、學者立法家までも撞着を許さぬ思想の法則さへも紊れて多數の神を信ずるに至つた、人畜は勿論金石山海日月星晨等の死物までも拜むやうになつた、或先生のいふた通り一躰なる無限物の他萬物皆神とされた、

道德に就ても同じく大なる誤謬に陷つた、人の生命其自由其良心を貴ばずして多くの同類を奴隷とし或は犧とし、又離緣を以て社會と家庭の根本なる婚姻を汚し、女子を男子の玩弄物とするなどのことが行はれた、要するにこれ等は童幼婦女其他總て弱者に禍ひするの道德であつた、是等のことは詳細に記述したならば彪大なる書冊を以てするも足らないであらふ、

然らば現今の社會は如何に、視よ多數の國々に於ては社會一般の風儀が温柔に成り、學問が非常な進歩をしたといふても、單に人智のみを以て神と人とを研究せんとする



の誤謬は依然として昔時に變る所がない、宗教的理論、道德的理論、社會的理論等は絶えず變轉して學者により意見を異にする、實に混乱紛雜を以て充たされて居る、現今大に流行の傾向ある、無神論、凡神論、主理主義、唯心說、唯物說、主觀主義などは其論じ方は多少異るにもせよ、是皆昔時と同一の誤謬を繰返すものである、彼等論者は昔時の論者と同じく思想の撞着に陷り、自明的眞理に知らず識らず違背し或は故意に違背しつゝあるのである、

公明正直なる心を以て現時の社會を觀察したならば、多數の人は實驗學や商工業等に就ての論じ方考へ方と、神、宗教、來世等に對しての論じ方考へ方は全く反對である、彼等は實驗學商工業に就ては自明の眞理を拒否するが如き愚は決してなさない、而も神とか宗教とかを論ずる塲合には輒ち自明の眞理を排棄して顧みぬ、實に慨嘆に堪えない次第ではあるまいか、

## 第二節　天啓の必要

以上陳べたる所を玆に終結せんに、人は只己の智力のみを以て人道を知ることは出來ない、世界各國の歴史に依て見れば人は事實に於て人道までも明かに知り得なかつたと分る、故に眞正の人道を完全に知り得るためには、特に道理以上の論即ち造物主の人類に對する所作を知り得るためには如何にしても造物主の啓示發表を待たねばならぬ、然らざれば右いふ如く人智は昧み惰は捩れて社會は際限なく同一の迷妄を繰返して居るのであらふ、此故に神は眞の道を人に垂訓せられたのである、之を稱して天啓といふ、若し世に天啓が無いとするならばそは神が世界を棄て人類を棄てたものとせねばならぬ、無限なる神が有り、世界人類が之に因て造られたるものならば天啓のないと考へるは撞着にして自明の眞理に背くものである、されば人類のため社會のため天啓ほど必要にして大切なるものはないのである、

## 第三節　天啓の有り得らるべきこと

凡ての主理主義家唯心論家等は、何の證明もなく天啓はあり得べからざることなるや、先づ之を神の方面より視るに、神は無限物にして全智全能ならば知らざることは無い、有限物なる人さへも自己の思想を他人に表現することは得てなし易い、然るに萬物の本原なる全能なる造物主が御自分の思想を人に表示し得られぬといふが如き考は決して眞面目を以て視るべからざるもので如何にも幼稚な滑稽な理窟である、又之を人間の方面より視るに、人間は智を具へたる動物であつて、自己の思想を他人に表現するのみならず、他人の表現せる思想を知ることも最と容易い、此故に幼童は其親より教へらるゝ語を覺え、成長しては學校教育に因りて種々の學問を知る、斯く同類なる親教師より教を受け得るのに何故神より教を受け得られないか、尚一歩進むで論せむに、人の具へたる良心と性質によりて知る自明の眞理は疑ひなく神より人に賦へられたる性質なるがゆに、是又一種の神の啓示と見做し得らる、斯くいはゝ無宗教家は或はいはん、成程天啓は有り得らるゝものであらふ、然しながら玄義といふが如き人智以上のことの啓示は決して有り得べからざることであると是れ又實に一笑に値せざる論定である、彼の生

來の聖者は色の感覺を有せぬがゆゑに、色に就ては吾人の如く感識することは不可能である、而し此故に彼等に七色の存在を承認せしむるは不可能であるといはゞ如何に、勿論色覺なき彼等に言葉を以て實際の色感を與ふること素より不可能である、然も彼等が信用する人より之を言ひ聽かされたならば感じ得られずとも其有るべきことは承認するであらふ、世間無學の者が信憑せる學者等の說の理解し得られざることをも承認しつゝあるは常である、而て此理解し得られざることは彼等無學者のためには取も直さず一の玄義である、斯く人間にさへ爲し得らるゝことが神に爲し得られざるや、有限物の爲す働きが無限物に爲し得られぬと論ずる先生があらふか、されば神が若し人間に何かを啓示せむとの聖慮があるならず無論啓示せらるべきこと毫も疑ひないのである、

## 第四節　天啓は事實に於て有りたること

世界の歷史を概見すれば、往古に於て天啓は幾種もありたかの如くである、即ち凡ての宗教は天啓より出でたと稱して居る、波羅門教佛教神道回教などは皆是れ天啓教である、是等の宗教は皆神の垂訓に基づけるが如く稱へる、是れ天啓に因らずして人の想像に成れるが如くいはゞ、其宗教は何等の價値勢力を有し得ず、人の信仰を得ることが出來ないといふことを各宗祖自らが知り居るからである、然しながら道理、學問を以て是等の宗教を研究すれば何れも皆眞正の證據なく鬼神談、或は小說的作話の如きものなることは極めて知り易い、此故に史學、年代學、考古學などが、進歩するに從つて是等宗教の天啓たる價値は益す疑はるゝに至る、然しながら斯く多くの天啓教の中に唯一つ最も違つたるものがある、此天啓教をば無神論者無宗教家等が往古より酷く攻擊しつゝあり、又現今の如く諸多の學問が進歩しつゝあつても依然として立つて居る、否却て近世の如く考古學の珍しき發見に因て古代歷史が明かに知らるゝと同時に愈其天啓の詐りならざることが確められる、此の天啓教は二つに分けられて、一を モイゼ天啓教といひ、一を基督天啓教といふ、而て モイゼ天啓教は舊約全書に記されてあり、基督天啓教は新約全書に記されてある、此舊約新約の兩全書を合せて之を聖

書といふ、然れども此二書の目的は大なる差がある、舊約全書は將來天降るべき救主のことを證明したるもので、近くいはゝ後に救主が啓示せらるゝ所の完全なる天啓の準備である、從て舊約全書に記されたるモイゼ教の天啓は不完備の者たるを免れぬ然し其天啓より出でたる道即ちモイゼの律法は救主降生前に於ては眞の道であつた、救主降生後完全なる基督教の天啓が發表せられて玆にモイゼの律法は廢止せられた、

## 第三章　聖書と聖傳

### 第一節　聖書の眞實なること

前章陳べたるモイゼ教の天啓と基督教の天啓は是亦た他宗教の天啓の如く造說作話の如きものであらうか、眞正の天啓であるには其證據がなければならぬ、先づ此天啓であることは歷史上の事實である、故に之を研究するためには一般の歷史を研究する方法を以て其天啓事項の記されたる聖書を精査するを可とする、



數千百年間多數の人々多數の國々に於ても敵味方ともに毫も疑を容れず眞實として來れる書は如何しても之を確實眞正のものとせねばならぬ、而て舊約全書は救主降生より千七百〇五年前に生れたるモイゼといふ猶太民の主長なる人の手に記し始められたるものである、其時より此書を疑ひ此書を認めざりし人はなかつた、モイゼの血腦なる猶太民のみならず、其敵なるサマリア人も拜像教者なる羅馬王ジユリアノ、不信なるセルス、デイオドル、ストラスボー、プリヌ、タシト、ジユブナルなどの多くの著述家、尙又アルコーランといふ回教の經典にも舊約全書の確實なることを認めてある、其他又後章に陳ぶる如くエヂプト國王二世プトレーメは七十二人の博士を以て之を希臘語に飜譯せしめた位である、

眞實にいへば往古より舊約全書ほど名を知られた書は無つた、又斯くまで鄭重にされた書もなかつた、舊約全書を完全に保存するために昔の猶太人は其章節を分ち、一節毎に一線を傍に施して其數を精算した、のみならず其語數までも計算した、斯る有樣に保存された書は何よりも確實とせねばならぬ、此書の記されたときより今日までは、

約二三千年である、然るに彼の無宗教家等が勝手に之を排斥し承認せぬならば、何れの國の古記錄年代記古代史等に排斥せずして可いものがあらふぞ、

新約全書は舊約より餘程新しい書で、凡千八百年前に記されたものである、此書の確實眞正なることは更に認め易い、四福音書と、多くの書翰等は作者の名も其記したる年も明かに知られて居る、此書は最も早く弘つた書で、之を認めたるものは獨り基督敎人のみならず、エピオニトの如き基督を信せざる異端者も、セルス、ポルヒイル、ジユリアンの如き多神敎者なる著述家までも疑はざる所である、

現今に於ても歷史編纂法を知るもの、中に舊新約全書の確實を疑ふものはない、史學的眼識なきもの、聖書學を研究せざるものが、聖書を先天的に排斥するが如きは恰も天文學を知らずして地動說を先天的に排斥するに同じで三文の價値なき考である、

## 第二節　聖書の天啓なること

舊新約全書は確實眞正なるのみならず、神の示現せられたる天啓事項の記しある書で



ある、何を證として之を知るか、先づ天啓とは神の聖爲である、故に人智に及ばざることでなければならぬ、而て人爲と神爲とを鑑別るためには是非とも其特徵がなければならぬ、即ち人智に及ばざる徵證ありて、其神の聖爲なることを明に知り得るものでなければならぬ、其の明らかなる徵證は二つにして、一を豫言といひ一を奇跡といふ、

## 第三節　豫言

豫言といふことは道理學問を以て決して知ること能はざる未來にあるべきことを前以て言ひ現はすことである、而て後にありたることが其言表はしたる所と符節を合したる如く寸毫の差がないならば之は眞正の豫言である、數百年も後に屬することを豫知して之を言表はすといふは決して人智に及ぶべきことでない、故に眞正の豫言を爲さしめたるものは必ず神でなければならぬといふは疑ひない、之を以て眞正の豫言のあるは天啓敎なる最も確實な證據である、斯く確證とならむがために豫言が事蹟の前に

あつたといふことに就ては疑ふべき筈がないのである、而て舊約全書に記されたる救世主に就ての豫言は皆其降誕前であることは明かである、何となれば舊約全書の多くの書は皆猶太人のみが其用ふるヘブレオ語を以て記したるものである、救世主御降誕前に於て最も廣く行はれたる言語は希臘語であつた、希臘語は當時文學的言語と稱せられて羅馬希臘埃及等の如き開明諸國に流行した、故に是等の國々に舊約全書を知らしむるために、埃及國王なる二世プトレーメは猶太民の議會と協商して之を希臘語に飜譯せしめた、即其時埃及國の都なるアレキサンドリアに於て七十二人の博士はプトレーメ王と議會の命に由りて飜譯したのである、而て七十といふ數を彼方の語でセプタントといふ、故に右の希臘語の飜譯をばセプタント譯の聖書と名づけられた、此聖書の譯書は公教の敵なる猶太人の手にも與に依然として現存して居る右の二世プトレーメ王は救世主御降誕前三百九年に生れて二百八十五年に王位に即き二百四十七年に歿した、故に右の七十二人の博士が舊約全書を希臘語に飜譯したのは少くとも救世主御降誕前二百六十年である、此故に救世主に就て舊約全書に記されたる總ての豫言は少くとも二百六十年前に記したものとせねばならぬ、これは確實なる歷史上のことであるから何の批難も加へられぬ、

救世主に關する豫言は如何なるものなるか其大要は後章に之を陳ぶるが、先づ其豫言中最奇なるはダニエルが記したる救世主御降誕の時期に就ての豫言である、始めバビロン王二世ナブコドノゾルが猶太民と戰つて猶太の都なるエルザレムを奪ひ、其壯麗なる聖堂、其城郭等を滅亡し、又猶太人數萬をバビロンに放逐した、其中にダニエルといふ豫言者が居つた、これは御降誕前六百六年のことである、而てダニエル書に記してあるには『エルザレム府を改築するといふ勅命より四百九十年後に當つて聖なるキリストは殺さるべし』（四章廿五節及廿六節）と、然るにペルシア國王一世アルタウゼスが治世の第廿年に當てエルザレム府を改築するを許すの令を發した、其年は全くダニエルの豫言の如く救世主の殺されたる年に先つこと四百九十年であつた、斯く明かなる證據あるを聽ても尙理屈を構へるやうなものは如何なることを聽くも決して之を信ずることは出來ない人であらふ、斯の如き豫言は人智に及ぶべからざることで

書の眞實天啓たることを明證するものではあるまいか、（古事新論、事跡以前以後の歷史を參觀せよ）

## 第四節　奇跡

奇跡とは人力は勿論自然界に含有せる力と一定の現象に及ばざる行爲である、例へば一言を以て癩疾者を即座に癒すとか、或は既に腐爛し始めたるほどな疑ひなき死者を蘇生しめる等のことは人力にも物質力にも及ばぬ、萬物と生死の主なる神の力にあらざれば成し能はぬことである、此の如き行爲を奇跡といふ、斯る奇跡の行はるゝは神の聖意なること決して疑ひない、而て貨幣に眞贋ある如く奇跡にも眞贋がある、されば何か不可思議のことがあるときは、極めて嚴密な調査を遂げ毫も疑ふべき餘地なき確證ありて始めて以て奇跡とすべきである、而て舊新約全書には眞の奇跡の行はれたることが多く記されてある、故に此書は眞の天啓なる明證を有つものである、然るに唯心論者唯物論者等が奇跡の如きことは決してあり得べからざることだと一概に排斥



して、之を研究することも論ずることをも徹頭徹尾拒み、奇跡を目擊したることを證せんがために自己の生命を拋つほどの確固たる證據人が何百何千あるも尙之を否むが如きは決して智慮あるもの學問あるものとはいはれない、眞實にいへば何の妨げありてか奇跡は行はるべからざることなるや、萬物の造者なる無限物は物質と人類の主である、之を司配することは其自由である、されば重要なる理由ありて即ち天啓を證するために其造る時に定め給へる物の通則に異る法を以てするの行爲は如何にしてあるまじきことなるべきか、正直に眞面目に考ふる人は單に自分が嫌ふの故を以て奇跡の如き重要なる論を研究もせずして排斥するが如きことは決して爲さゝる所である、

## 第五節　聖傳

天啓事項が悉く聖書に記載されたるにはあらず、約翰福音書にも『但し耶蘇の爲し給ひしことは他にも夥し、若し一々之を書きなば、想ふに其須らく書るべき書簡は、世界其物も載る能はざるべし』（廿一ノ廿五）と、又使徒保祿が帖撒羅尼迦人に贈れる後書

に『兄弟よ或は吾儕の言或は吾儕の贈れる書に因て教を受けたる傳を堅く守るべし』（二ノ十四）と、錄してある。是等に依りて見るも聖書に記載してあることの他に尙知るべきこと守るべきことの數々あるべきは論なきことである、斯く聖書記載外のことの傳を聖傳といふ、即ち右の保祿が所謂書でなく言を以て承けたる傳である、故に天啓即ち神が人間に對するの聖慮を知り得る根本は聖書と聖傳の二つである、

然らば聖傳は吾人之を如何にして知り得るか、他なし昔時の多くの教父（教父とは教義を明かに說かれたる人の尊稱）神學博士等の著書、多くの公會議々事錄、總ての教皇の勅令布告等に包含せられあるものに因りて知り得らるゝ、

## 第六節　天啓の決定

以上の論證に因て天啓のあつたことは最早寸毫も疑ふ所はない、斯く天啓が疑ひなければ吾人は何うでも神の發表し給ふた凡ての說を皆堅く信仰せねばならぬ、何となれば神は無限物にして過つことも又欺くこともあり得べからざるものだからである、而て





之を信仰するは智を以て神を拜むに同じである、人間の具へたる數多の德の中最も貴い最も高尙なものは智であるから一番貴い一番高尙な拜みである、之に反して天啓を信せず之を排斥し之を拒否することは神が無いとし、神に過失、欺罔ありとする意味で、神の性質を直接に汚辱するものである、總ての罪惡中最も重大なものである、尙又眞正の天啓は人智を障害するものでなく却て大に其進步發展に益あるものである、例へば天啓は望遠鏡の如きもので、肉眼を以て視る能はざる天體が望遠鏡に依りて窺ひ知らるゝ如く、人智を以て究むる能はざる玄妙深奧なることも天啓に依りて始めて知り得らるゝのである、一言以て之を蔽へば天啓は實驗學に反するものにあらずして實驗學に超越するものである、即ち實驗學は有形界のことのみを知り得るに過ぎぬが天啓は無形界のことまでをも多少知らしむるものである、

## ○公教の信ずる所

以上陳べたる通り公教は聖書と聖傳に依りて知りたる天啓のみを以て立てられたる道

であるから神權主義の道である、近くいへば公教は全然天啓の教である、吾人は此天啓に依りて神、萬物、人間、來世に就て知りたる所、又信ずる所は左の如くである、

## 第四章　神、其三位一體の玄義

吾人が單に智力即自明の眞理を以て知り得べき所は第一章に陳べたるだけで誠に其知り得る所は少いが、然し此他に神親らが御自分の性質に關して最も奥妙なることを一つ吾人に啓示たまふた、舊約全書は措いて新約全書に依りて見るに、明かに啓示したまふたことは、無限物の一體でなければならぬことは前に陳べたる如くであるのに、而も此一なる神の本體中に個々に生けるものが三つあるといふことである、而て其第一を聖父といひ、第二を聖子といひ、第三を聖靈といふ、此の三の生けるものを拉丁語に三のペルソナといふ、和語と漢語には此のペルソナといふ言に全く適當なるものがない、故に止むなく暫らく位といふ字を以て之に宛てた、而て此神の三のペルソナ一體の勘理をば之を聖三位一體の玄義といふのである、



元來は位といふ文字はくらゐと訓じ階級の意味を有するが、神の三位には決して上下の差別はない、單に一の性質一の本體を具へたるもので、三者共に全く純一のものに在す、故に聖父も聖子も聖靈も與に永遠、全智、全能、全善なる一體のものである、之に依て吾公教の三位一體の教理は印度の三神、佛教の三體佛などいふのとは全然其意味を異にするもので、聖父と聖子と聖靈は三つの神でなく此三が一體の神なのである、極めて不完全不相當な例であるが人の父と、母と子が相集つて一個の家庭を成すといふが如きものである、斯く同一性質同一本體であるのに此三が別個なものであるといふを以て見れば當然其間には何か差異がなければならぬ、然し其差異は三位相互の關係の差異といふことのみである、解り易きために近き例を以ていへば、人は智慧を有するものなるゆゑ絶えず思想を以て其心内に何かを談話する、吾人は思想に談話のないことは得られぬ、此思想即これ靈魂の言である、靈魂自らが己れに對して談話する此言は靈魂其者が生むのである、神も亦た是に同じく無限なる靈なるがゆゑに無限なる思想を以て己れに談話する、これを拉丁語に神のヴエルブム即言といふ、此ヴ

エルブムを永遠に生ずるものこれを聖父といひ、永遠に生せらる、ヴエルブムそれを聖子といふのである、而て無限に生ける聖父より生せらるゝものならば是亦是非とも聖父と等しく無限に生けるものでなければならぬことである、即人より生ずるものは有限でなければならぬ、此故にヴエルブムなる聖子は聖父と同じく無限にして永遠に生けるものである、

尚又文學者美術家などが何かその心に珍しき考案即言を出したときは心之がために歡喜に充たされる、而て己より出でたる其言を愛するのである、此愛や其心より發出する所の愛である、神も亦たこれに同じく聖父は其永遠に生じ給へるヴエルブム即ち聖子をば其無限愛を以て愛したまふ、又其ヴエルブムも其生じ給へる聖父をば同じく無限愛を以て愛したまふ、此相互の愛や同じくこれ無邊である、故に生けるものである、之を聖靈といふ、聖靈は斯く聖父と聖子とより發するゆゑこれを聖靈の永遠の發出といふ、





之を要するに聖父は聖子を生じ、聖子は父より生せらる、聖靈は聖父と聖子とより發出するといふ此關係のみが即三の差別の點である、之に依て神に別々のもの三つありても其本躰は唯一であるといふことの幾分は理解せられるであらふ、之は公教に於て一番深い玄義である、然しながら後章に於て陳ぶるが如く人性論中にも餘り深玄にして毫も解らぬ玄義がある、人が自己の有限なる性質に就てすら曉り得られぬことがあるならば、況して神の無限なる性質に關して解らぬといふは當然ではあるまいか、然し神が何故斯る玄妙にして解り得られざることを啓示し給ひしかといふに、吾人々間は神の三位と直接の關係がある、之を知らなければ宗教は不完全のものとなる、即ち聖父は吾人を創造し、聖子は吾人を救ひ、聖靈は種々の恩惠を以て吾人を潔め吾人を聖にするなどの關係である、

斯く創造し給ひたる萬物に對して神の總ての聖爲は特別に一位に關るものであるが三位共に關係はある、（神學綱要第一神を看よ）

尚此の他に天啓に依りて神の御德を知り得たることが二つある、一は無邊なる愛即ち

親が其子を愛するが如くに神は萬物萬民を愛し給ひ、此愛に依りて攝理し給ふといふこと、二は無邊なる憐みを以て惡を爲したる人類を棄て給はず、却て救主を降して助け給ふたといふこと、此の愛と憐は吾人の如き惡人の爲には最も嬉い賴母しい神德である、人が己の卑しきこと罪深きことを認識し謙遜を以て神の愛と憐に信賴するならば決して神は棄て給はぬ、これに就て吾人の最も感動する最も慰籍となる話は舊新約全書に澤山ある、

以上總ての神德は吾人之を天啓に依りて明かに知り得たのであるが、然し道理に因ても是等のことは略知り得らるゝのである、

## 第五章　萬物の創造

神は其全智を以て永遠に思想したまふ所の萬物をば全能を以て時間に造つた、即何の材料を要せずして無より造出したまふた、如何にして斯くせられたかは深遠にして吾人の智力に及ばぬ、故に之を創世の玄義といふ、而も道理に由て論ずれば是非然かなければならぬといふは明晰である、何となれば有限といふこと、永遠といふことは反對である、萬物が有限性ならば其存在が永遠であると考へるのは絶對と相對とを同一とし有と無とを混同するもので撞着之より甚しいものはないからである、されば萬物が有限であるとするのは取も直さず始めあるものとするに同じである、既に始めあるものならば其始は偶然に出でたるか或は創造せられたかといふ二つの他は無い、而て偶然とは因なしといふに同じである、因なくして果ありといふは實驗學の定論にも哲學の定則にも背くことであれば偶然といふことは無學者のいふ言である、されば世界萬物は如何しても創造せられたるものであるといふの他其存在を說明する道はないのである、斯く無より造られたる天地萬物は無形物と有形物の兩界にして、無形界を靈界といひ有形界を物質界といふ、此靈界と物界は何時造られたか、之に就て聖書は一言をも語らぬ、神は何の啓示もせられなかつたから何億萬年前なるか吾人は少しも之を知らぬのである、

## 第一節　無形世界、天使

右にいふ無形世界は天使といふものを以て組成せられて居る、天使とは智識と情と自由を具へたる純靈である、即人間の如く肉躰を有せざる完全なる靈である、故に其性質は人間よりもズット勝れて居る、此天使の存在と又彼等に就て知り得た所の多くの說は悉く天啓に依りてゐある、舊新兩約全書には幾度も其說が記されてある、今其多くの說を掻摘でいはむに、先天使の數は何程なるや吾人は得て數へられないほど多い之に就て高名なる神學博士聖トマはいふ『天使の數は總ての物の數よりも猶多し』と、この大多數なる天使は悉く同一ではない、聖書に記してある所に依れば總ての天使は九の階級に分けられる、而て神は其完全義に因りて天使人間の如き智慧と自由を具へたるものに對して故なく賞を與へることは出來ない、即彼等は暫らく試みの時期に在りて自己の善行を以て幸福を得なければならなかつた、而て天使が如何なることを以て試みられたかは聖書に記してないから確實には知り得られぬ、然し其命令が何であつたにせよ、ルシフエル（光を有つといふ意）といふ優れたる大天使が其邀慢心に蔽はれて神の命令に背き、他の多くの天使も此ルシフエルに誘はれて與に謀反し、爲に罰せられて天より逐ひ出されたことは疑ひない、聖ルカ福音書にも『吾サタンが閃電の如く天より落るを見たり』（十章十八節）と記してある、而て彼等は地獄に投せられた、是亦マテオ福音書に『詛はるゝものよ、吾を離れて退け、惡魔と其使共のために備へられたる永遠の火に入れよ』（廿五章四十一節）と記してある、斯く罰されたる多くの天使をば之を惡天使或は惡魔或は魔鬼ともいふて其頭領は右のルシフエルといふ優れた大天使である、彼は今サタンと呼ばれる、サタンとはヘブレア語で謀反するものといふ意である、新約全書には往々之を黑闇の勢（密に隱れて働くもの）或は現世の君（多くの人は惡を爲して彼の奴隸たる意）と呼んである、此多數の惡魔は人間と多くの關係がある、彼等は永遠の幸福を自己の罪に因りて失ふたから人間が善を爲して同一の超性的報賞を得るのを太く嫉むで、成るべく多數の人間が神に背くやふ有らむ限り力を盡して居る、即彼惡魔等は種々の工夫を以て人を惡に陷れるやう誘惑

して居る、これは默示錄に『地と海は禍なる哉、そは惡魔は己が時の幾何もなきを知りて、大なる怒を以て汝等の處に下ればなり』（十二章十二節）と記してある、又ペトロの第一書にも『汝等愼むで警醒せよ、汝等の仇敵なる惡魔は吼ゆる獅子の如く徧行て食ふべきものを尋ぬ』（五章八節）と記してあるを見ても解る、

世の無宗教者なる人々は右の如き說を讀むで或は冷笑せらるゝかも知らぬ、雖然鄉等に問ふべきことが一ある、即如何に往古に溯るも惡魔とか鬼とか天狗などの如き傳說は世界就れの國に往くも文明野蠻に係らず皆無といふことは一國もない、成程惡魔は肉眼に睹ることは出來ぬ、雖然實際存在せぬならば何うして惡魔に關する傳說が世界中至る所にあるであらふか、舊約全書を記し始めたのはモイゼといふ聖人で彼は今を距ること凡三千五百年前の人である、シテ見ると惡魔の傳說が世界中にあるのは舊約全書に載せてあるためではない、何せなれば其以前に於て既に世界の人々が惡魔の話を爲て居つたからである、されば是等は成書以前の太古の天啓が遺つたものといはねばならぬ、然もなければ人が惡魔の如き見るべからざるもの、思想を起すべき所以が



ないのである、

凡そ如何なる奇談珍說にもせよ、己が之を信せざるの故を以て、或は其理由の解せざるといふの故を以て直に之を愚論謬說なりと即斷するのは兒女の如き智識である、徐りに早計に失するもので決して着實なる人の考ではない、物質界に於ても總て己に解し得られざる奇異なる現象は顧みるに足らぬといふて放棄るならば必ずや實驗學の進歩を見ることは出來ないのである、此點は無宗教家等の大に考ふべき所ではあるまいか、

斯く神の命令に遵ひ能く神に奉事した天使は其酬報として大なる幸福と光榮と力とを得た、之を天使或は善天使ともいふ、善天使は惡魔に反して人を守護する即惡を避け善を奬めつゝある、以上善天使惡天使を合せて之れを人の造られざる前の靈界といふ

（天使の詳論は神學綱要神の部及公教釋義等にあり就て看られよ）

## 第二節　有形世界

有形世界とは空間にある凡ての天體即ち太陽惑星恒星星雲と又吾人の接息せる地球である、是等は皆神の全能に因りて無より造られた、而て創世記に依て見るに地球が無より造出された時は混沌たる狀態であつた、此狀態の漸く整頓せられて今日の如く成就するためには六期を要した、即神は一期にせられたでなく順序を以て追々に成就せられたのである、神は何故に斯くせられたか、決して人間の如く能力が不足なるためではない、只其御自由を以てゞあるといふの他はない、

是に就て珍しいことが一つある即ち地質學上に於て地層を研究したる所によれば、草木魚虫陸上動物人間の世に生じたる順序は是亦全く創世記にある所と符節を合すが如くである、而も創世記は今より凡三千四百年前の往昔モイゼといふ人の記した書であつて、當時物理學地質學などいふ名目までも無つた時代である、然るにモイゼが三千數百年後に漸く開けたる學問の而も其深い論に合ふやふ開闢の事を記したといふは何うしてもおらふか、これ全く彼の智識の深つた爲であらふか、決してさうでない、當時斯る論は考へまでもなかつた、故に神の啓示がなかつたならば決して斯る深遠な說を書くことは出來ない、これは舊約全書の天啓が眞正であるといふの學術的一證である、（開闢說の學理的詳論はモイゼス世界開闢の說及萬物本源にあり參看すべし）

## 第三節　人間

前節陳ぶるが如く地球は種々の順序を以て成り、最後に人類が造られた、其故は古來いへるが如く人は萬物の長たるがためである、父母なくして神より直接に造られたるは男女二人で、男をアダムといひ女をエワといふ、神は土を以て人體を造り、而て後御自分に像たる靈即ち神の如く智と自由を具へたる無形物を造りて之を身體と結合せしめて人間となし給ふた、此無形物を靈魂といふ、是時より地球に繁殖したる何百億萬の人間は皆悉く此のアダム、エワの二人より出たものである、



## 第六章　超自然教

公教の旨意を解せむがために茲に極めて重要にして且つ深奥なる問題を陳べなければ

ならぬ、之は即ち神が斯く人間を造り給へる眞正の目的は何であるかといふのである此目的が明かに解らないならば神の聖慮に遵ふことが出來ない、從つて此目的が明かに示された、然しながら無限物の定ることは出來ない、然し天啓に因て此目的は明かに示された、然しながら無限物の定め給ふた目的であるから至て高尚で其意味深く餘程熟考しなければ解し難い、而て吾〳〵人の造られたる目的は自然的のものでなく自然に超ゆるものなることは聖書と聖傳に因りて明かである、然らば其超自然の目的とは何であるか、超自然とは其字義の示すが如く自然の人性に超ゆるといふの意である、故に之を超性ともいふ、詳言は人の智其情其身體の自然性に有する力に及ばざるほどに高尚なるものだといふのである、

## 第一節　超自然なる目的

人類は超自然の目的のために造られたものであることを明かに知らむには、人の性的或は自然的目的と、超性的或は超自然的目的と比較せねばならぬ、人間は有限物にして其性質のみより見れば來世に於ても矢張有限的生命、勢力、幸福等を受くべきものである、詳言は智識が如何に進歩すると雖も筈はない、感情に於ても之に同じく無限に關する幸福快樂は幾分をも知り得べくでない、即心身共に艱難苦痛なくして有限なる人性に相應なる有限的幸福快樂を完全に受くるといふのみでなければならぬ、近くいへば來世に於て神を知り神を感じ神を愛することなどが如何に現世に優るとも決してこれは直接でなく矢張今の如く間接にあるのみである、之が來世に於ける目的の人性的のものである、而て人間は若しも斯る目的のみのために造られたものなれば全く人性の自然に適合するものゆゑ滿足が得らるゝであらふ、從て自然に超ゆる目的が有り得るといふ考までも起さぬであらふ、超性的目的といふのは全然之に反して無限なる神の本體其本德を直接に視、其眞美を直接に感じ、其眞善を直接に愛し、又神からも直接に深く愛されるなどである、近くいへば來世に於て有限なる人間が無限なる神と同意同盟する、完全に逢合するに同じである、故に同一の幸福同一の快樂同一の光榮同一の生命の幾分を受くるのである、これは使徒ヨハネの第一書に記してある『吾儕は神に肖たるものとならんことを知る

そは吾儕は神を其在すまゝに視るべければなり』(三章二節)と、又使徒ポーロがコリント人に贈る前書にも『神が己を愛する人の爲に備へたまひし幸福は目未だ見ず耳未だ聽かず人の心未だ念はざるものなり』(二章九節)と記されたる如きものである、斯く人は神と完全に連合するといふても決して人が神に成るのではない、何となれば物の性質は變ずることの出來ないものである、人間は有限物に生れて何處までも有限物で居らねばならぬ、即永遠に人格を有すべきものだからである、此故に聖ヨハネの書にも吾儕は神に肖たるものに成るべしとある、即神の光榮、幸福の幾分を受くるが ゆゑに神らしきものになるであらふといふ意味に他ならぬ、されば公教にいふ所の人が來世に神と全く連合するといふの意は萬有神教や佛教にいふ所の神に歸る成佛するとは全然異るものである、

## 第二節　超自然なる力(神の恩惠)

以上述るが如く超性の目的は天啓に因るでなければ決して人間は思想までも起されぬ



ほど人性に超ゆるものである、如何となれば實際其目的は無限らしきものだからである、此故に神が親しく人に知せねばならぬ、即天啓でなければならぬ、而も天啓のみでは尚足らない、斯る高尚な目的は人が之を聽くも、又其目的に達すべき道を知るも實際之に達するといふは決して人力のみを以ては及ばぬことである、此目的に達するためには是非とも之に相應なる力、即超性的の力がなければならぬ、これは物質的現象に於て原因は其結果に相當するといふ定則を見るも明かである、要するに神は人間に二の恩惠を與へられねばならぬ、一は人智を照すといふこと、これは天啓である、二は超自然的の力を與へ之に依て人間の薄弱なる意志を助けて堅固ならしむるといふこと、此超自然的の力を與へる方法は第十七章に於て述べむ、

## 第三節　超自然なる善德

超自然の目的を達せむには其他又人の行ふ善が超自然的(或は超性的)でなければならぬ、例へば人情の自然より出でたる博愛心に因りて貧民を救助するが如き、勿論善行

なくに相違ない、雖然これ唯人情的の慈善即性的善行である、從つて此善行のために受くべき報酬も同じく性的のものである、之に反して若しも此慈善が他人を吾如く愛すべしといふ神の命令に從ふの心より出るならば同に善行にして其慈愛の動機が違ふ、即神に對して行ふものなるゆゑ之は超性的善行となるのである、從つて其受くべき報酬も超性的のものである、一切の善德皆此の如くである、忠孝愛國も人情の外に神の命に遵ふの心があるならば高尚なる善行　超性的善　行と成るのである、之に依て見るときは總ての行爲の價値は其心の動機如何に因りて生ずるのである、二者共に同一の善行をなしたりとするも、一は人情より出で一は愛神より出でたとすれば其勞其　働は同じくして其價値は霄壤の差である、

## 第四節　超自然論の終結

人は來世に於て無限なる神と連合する爲に造られたといふことは天啓に因りて知る、而して神と連合するとは即人が智識に由りて神の本體其完美其完善なる諸德を直接に睹る、又之を以て神を深く愛せらるゝといふことである、而て來世に於て神と連合するためには如何にしても現世に於て既に連合の緒に附かねばならぬ、これ果して如何にせば可からうか、他なし人は己の有する智識によりて凡ての神の啓示したまひたる事項を確信するにある、之を信德といふて智識を以て神と連合するに同じである、又人は其具へたる情を以て神が與へんと約束したまひたる超性的目的即神の幸福快樂光榮を受くるものと深く望を懸くるのである、之を望德といふ、猶又人は其情を以て善美の源なる、立派なる目的を與へるほど愛憐深き親なる神を愛するのである、之を愛德といふ、この望德と愛德との發動せる行爲は取りも直さず情を以て神と連合するに同じである、右信望愛の三德は直接に神に對して行ひ得ることだから之を對神德と名づける、此三德は信者たるもの丶靈性的生命の根原である、此三德が何程でも厚い信者は行を以て神の戒命を守るべく心配するやうになる、ヨハヂ福音書に『吾誡命を有して之を守る者は是れ我を愛する也』（十四章廿一節）と記してある又使徒ヤコブの書にも『信仰若し行を幷ねざれは死したる信仰なり』（二章十七節）と

記してある、即何の益なき信仰である、この三德は神の恩惠にして決して人力のみを以て受けられない、人力に超えることだから之を自然德といはずして超自然或は超性德といふ、

之に依て見ると公教は全く超自然教である、即人の造られたる目的も、神より何時も受くる所の力も、又其力を與へらるゝ方法、人の行ふ善德も總て皆超自然的である、超自然といふことは斯く公教の性質であるから總て公教の規則誡命禮拜式祭典祈禱等皆悉く此の超自然主義より出るのである、

此書を讀む人よ、願くは公教の旨意を知らんとならば此の超自然主義（或は超性主義）といふことを腦裡を離れざるやふして末尾まで讀過せられんことを、

## 第七章　人祖

人祖アダムとエワが全善なる親たる神に造られたものであるならば、無論其智は明かに情は正しくして今の如く病難苦死等はないものであつた、然るに毎度いふ如く人間



は決して自然的幸福即此世の物質的幸福の爲に造られたものでなく、超自然の幸福光榮を受けむがために造られたものである、而て神は完全義に在すから所以なく、人が何の苦心もせぬに此幸福を與へるといふ不道理のことはなし得られぬ、これはいふまでもなく彼の軍人が何の勳功も立てなければ勳賞を得ることの出來ないと同じである、近くいへば神は斯る立派なる賞を與へない前に、アダムとエワが善を行ふか惡を爲すか、神の命に遵ふか背くかといふことを試みなければならぬ、

### 第一節　源罪

不幸なる哉此二人は驕慢心に驅られて惡を爲した、即エワは人の超自然の幸福を受くることを太く嫉む所の惡魔に誘はれて之に從ひ神の命に背いた、又アダムは其妻なるエワの勸めに從つて同じく神命に背いた、彼等の此惡爲を源罪といふ、此に於て神は罰を下してエワに對つて宣ふやふ、『汝は夫の嚴しき支配に歸し大なる苦痛を以て產を爲すべし』と、又アダムに宣ふやふ、『地は汝のために詛はる、汝額に汗して大なる勞を

以て糧を得べし、これ汝の出されし土に歸る時までのことなり、何となれば汝は塵土より出て塵土に歸るべければなり』と、吾人に此事を紀念させるため又驕慢心を抑へるために公教に於ては毎年一回灰の式といふことを行ふ、此式は司祭が人々の額に灰を塗りながら、『汝は灰なること又灰に歸ることを紀念せよ』といふ言を唱へるのである、其後神はアダムに對して人間の罪を贖ふて救靈を得さしむために救主を後の世に遣すべしとの約束を微爪になされた、

アダム、エワの源罪によりての罰を細にいへば、先づ彼等の肉軀に性的幸福を失つて病難苦死の禍あるものとなり、靈魂には現世に於て智は昧み情は紊れ傲慢、邪淫、貪婪等の私慾を起し、又知りつゝ惡魔の誘勸に從ひしゆゑ其支配の下に落ち、又救主が無ければ、好し救主があつてもこれに從はなければ來世に於て超性の幸福榮光を受けること能はずして永遠に神に勘當されるといふことなどの罰であつた、これは源罪に因りての直接の結果である、

## 第二節　源罪の傳來

然るに右のことは獨りアダム、エワのみならず吾人々類に大なる關係を有する、アダムとエワの二人は其末裔なる吾人と違つて人類の頭である、人間の根元である、一切の人類は彼等二人より出でた、吾人々類は此源より發したる末流である、故に源濁りて末清き筈はない、吾人は此墮落せる人祖の末裔なるがゆゑに生れながら墮落して居る、神に勘當せられ大なる罰を受けたる親より出でたる子なるがゆゑに同じく勘當せられ罰されて居るものである、即元祖なるアダム、エワが犯したる源罪は其子孫に傳はりて吾人も其肉體と靈魂とに其結果を被むらねばならぬ、これは如何に殘念千萬といふても脫るゝことの出來ない道理である、此理法を連帶法と稱して往昔にも現今にも社會は總て此連帶法に全く從つて居る、例へば一國は其政治外交に因りて發達もし衰退もする、一軍は其將の方略作戰に因りて勝敗を視る、一家は其長の品行に因りて榮もし廢もする、世界のことは總て皆斯の如くである、苟も一類一國を爲すものは皆

此連帶法に制せられぬことは出來ない、されば人々は如何しても斯く自然に服從する所の社會的理法に因りて、元祖の子孫が不幸を受くることのみを疑ひ且つ拒み得られやうか、此源罪と其傳來の說は最も重要のことにして救主の御降誕せらるゝ因由である、若し之を信せぬならば公教の旨義を曉ることは出來ない、（源罪に關する理論的詳說は神學綱要神の部、公教釋義、眞理の本原にあれば就て看るべし）

## 第八章　謀反者なる人類に對する神の聖計

無限なる神が有限なる世界の事物に制せらるゝことは決してない、此世界も自由を以て造りたまふた、同じく自由に之を攝理したまふ、ソコで前に陳べたる如く人類の頭なる元祖が惡に濳れて謀反人と成つた、其元祖より出でたる人類は連帶法に因り同じく濳れて謀反人となつたのである、斯く濳れたる元祖と人類とを棄てるのも或は救ふのも救すも救されぬもそは皆神の御自由である、又若し助けるの聖慮でも如何なる道を以て如何なる方法に依りてせらるゝか、又人は如何なる行爲を以て其罪を贖ふべきかなどを定めることは是亦た神の御自由である、尙又神が人類を助けるといふ聖慮があつても、そは決して義のためにせらるゝのではない、何故なれば單に義のみから見れば助くべき筈がないからである、故に神が人を助けたまふは唯其憐みのみに因るとである、而て天啓に因りて知り得たる所は

一、神は深い憐みを以て萬民を助け給ふの聖慮であつたこと、

二、萬民を助けるために神親ら天降りて人間に成る、これが救世主であるといふこと

三、此救世主はアダム、エワが源罪を犯して後直に天降るでなく謀反人となりてより凡七八千年後であるといふこと、

四、此救世主は唯言のみを以て瞬の道を敎えたまふでなく、一切人間に代つて親しく苦難を受け萬民の罪の爲に十字架に釘けられるといふ恥辱此上なき死を遂げたまふ、これは取りも直さず神が十字架に因りて御自身の聖血に謀反人なる吾等を救給ふものであるといふこと、

五、救世主に遵つて彼と同じく善を行ひ彼が命じたる誡命と贖の道を守る人のみは

其聖血の功力を受けて助かるといふことよ、などである。

然しながら吾人は人間に生れたから自由といふ貴い德を具へて居る、故に救世主といへども強て吾人を救ふといふことは決してなさらぬ、救世主の御苦難、御死去、聖血の效特を受けるのも受けないのもそは吾人の自由である、吾人が需めて之を受けるならば來世超自然の目的を達し、又態々之を棄てるならば其目的を受けられないのみならず永遠に神に勘當されるのである、

斯く救世主に遵て來世超自然の目的を達せむとならば勿論大なる心配を以て己が惡心を制し、惡魔の誘惑を防ぎ、社會の迫害と輕蔑を慨れず、現世の惡き娛樂を棄てるなどに力を勞して始めて得られるのである、之を永遠の救靈主義或は十字架の主義或は救世主義とする、斯る主義は吾人の意に適ふものではない、然るに神は何故斯る困難の道を立てゝ之よりも容易なる道を立てなかつたであらふか、何故又救世主は早く降らずして源罪を犯してより數千年の後に降りたまふたか、そは論ずるまでもない全く神の御自由である、吾人謀反人なる臣民は全能全智全善なる主君の聖慮を愼むで拜承し、之に服從するの他はないのである、吾人は唯其深い御憐みに因て助ることを有難く思ふより他はないのである、斯の如く吾人々間は救世主に依るの外助るべき道はないが、而て救世主御降誕前の人々は後に降誕せらるべき救世主を信仰し、待望し、又彼に對して忠誠なることを以て助けられ、後の人々も既に降誕せられたる救世主を信仰し、彼に願望し、彼に忠誠を盡すといふことを以て助けられるのである、



## 第九章　舊約時代

人祖アダム、エワが造られたる時より救世主御降誕の時に至るまでの數千年間を總稱して舊約時代といふ、此時代のことを略了解せむには、第一舊約全書、第二各國の古代史、及考古學等に因るのである、然れども古代史や考古學等を以て知り得ることは極めて少い、如何となれば往古は活版は愚か印刷のことが無つたから、書籍が少い、其他尙學問の上に甚だ遺憾なりしことは、昔時エヂプト國の地中海に濱せるアレキサンドリア港が人口九十萬を有して、羅馬を除き世界中其壯麗豐裕繁華なりしことは第

一に位した、此都會の珍しき大建築物中世界第一藏書に富める圖書館があつた、此圖書館に藏せられてある卷物は無慮七十餘萬卷であつたといふ、日本や支那でも古代の書物は皆卷物であつた如くエヂプトに於ても此時代は卷物であつて其等の卷物は何れも長い羊皮に書いたものである、この七十餘萬卷の中には必ず各國の古代史に就て珍奇なる事項も多く記してあつたであらふ、然るに救世主御降誕前四十七年即今より千九百五十四年前此のアレキサンドリア府に恐るべき大騷動が起つて、時の羅馬皇帝セザルは之を鎭靜するために同府を攻撃し、ために多くの宮殿堂閣や右の圖書館等は兵燹に罹つて燼滅した、是は恰度暴帝始皇が儒書を悉く焚いた如く有益なる卷物は悉く灰燼となつた、斯く古代史の最も好い參考となるべきものが烏有に歸したのは學問のために甚だ悲むべきことである、扨る次第なるがゆゑに今日舊約時代の事跡を知るには先第一に舊約全書に指を屈せねばならぬことになつた、而て公敎の聖書たる舊新兩約全書を引用するに就ては一の重要なることを知り置かねばならぬ、即世人の多くが誤想る如く聖書は完成せられたる歷史と思ふてはならぬ、單に歷史といふ方面から



聖書を視れば歷史の參考とすべき各家の記錄ともいふべきものである、例へば舊約全書は四十五の書より成り、これ等の書が二十有餘人の手を以て記され、又同年代に記されたものでなく千數百年間といふ長年月を以て成つたものである、而て此四十五書の中には歷史的の書もあり倫理的の書もあり信仰的の書又豫言書もある、然も其歷史的書さへ首尾順序を追て著したものではない、或箇所に就ては詳細に記し、或事に就ては故意に省略したるのもある、又再び記されたることもある、又舊約全書中には逸失したるものも確かにある、舊約全書が完全の歷史でなく只其參考たる記錄に過ぎないといふのは此故である、從つてアダムよりの直系の系譜すら逸脫があつて悉くは記してない、又年代の如きも多くは記してあるが同じく逸脫があるから眞正の年代其順序等は精確に決定することは出來ぬ、之を以てアダム、エワが造られた時より救世主の御降誕まで何年なるかは精確に知り得られぬ、現今の學者は舊約全書の歷史と追日進歩せる考古學とを研究照合してアダム、エワより救世主までを凡七八千年即今日まで凡九千乃至一萬年ならんと考定した、此アダムより御降誕まで七八千年の歷史

は餘り長くして其概要を記すさへも到底此小冊子の堪え得る所でない、要するに此間の歷史を讀むで吾人の最も悲み且つ驚くことは人性の惡虐といふことである、元祖の罪に依りて人類は墮落し、其心情は生れながら惡の傾向を有し、其性の腐敗したることは最も顯著なる事實である、例へばアダム、エワより多數の子女が生れたが長子をカインといひ、次をアベルといふた、長じて後カインは其弟のアベルの善人なるを嫉むで之を殺した、之が人類の殺人罪を犯したる濫觴である、人類の未だ繁殖せざる、いはゞ一家族の他世界に人なき時に於て既に此卑しむべき嫉妬のために其兄弟を殺すほどに邪惡なる人間が出た、斯くもわさましき人類は追々繁殖するに至て忽ち萬物の造主なる無限なる神をまでも忘るゝに至り人々は皆物質的快樂に傾き未來などは考へない、創世記四章三節に錄されたる如く『肉に成つた』、人間の肉を衣ても其心と行とは畜類の如くなり甚しく淫慾に固まつたのである、然しながら廿世紀の始めなる現時の社會を視れば美術、文學、科學、商工業等は驚くべく進歩した世紀であるも、數千年前の昔人の如く唯物主義に傾き物質の他は何物をも感せぬほど邪惡野劣な人が如何



に多いことであらふ、

サテ右舊約時代の人々は年を追て益惡になり遂には全善なる神には赦すことの出來ないほどに世が腐敗した、乃でノエの一家八人を除くの他は大洪水を以て人類を悉く滅したまふた、之をノエの大洪水といふ、(委しくは(リギヨル著)洪水の事を看よ)斯る恐しき罰を以て腐敗せる社會を一洗しても、ノエの子孫が大なる民となるまでに繁殖したならば、矢張洪水前の如く惡に傾いた、然し其中ノエの直系の末裔なるアブラハム聖人の血統のみは祖先より傳て來た敎に遵て一體なる神を信じ、又神の約束に從て後に降誕すべき救世主を待望した、其他は皆傲慢、邪淫、貪婪の惡に引されて一體なる造物主を棄て、種々なる偶像を造つて之を拜むやふになつた、又太陽星月は勿論、死したる人、動物、及石山河海の如き死物までをも神として拜むに至つた、多くの國々は是等の偶像を拜するために人を殺し分けても小兒を殺して犧牲として祭つた、尙是のみならず甚しきは人間の卑しむべき私慾即邪淫、偸盜、他飮などを神として其偶像を建て堂宇を造つて安置するに至つた、之を以て視ると人間の智識が全く其

理性を失ひ、意志は善惡の差を認むる能はざるまでに捩れ人性は想像されぬほど墮落の極に達したものである、若し神が救世主を降して此社會を拯はなかつたならば、人類は疑ひなく殘らず腐敗の底に沈むであつたらふ、斯く社會が自然に腐敗したことは最も悲み且つ驚きに堪えぬ所である、然し玆に一驚喜するほど感ずべきことは善全なる神が此謀反人なる汚穢なる人類社會を棄てたまはぬことである、飽くまで慈悲なる親が不孝な子を何處までも見棄てざる如く造物主は幾んど不可解ほどの憐を以て人類を助けたまふた、此故に前に陳べたる如く神はノエの直系の末裔なるアブラハムといふ聖人を撰むで之より出でたる民をば御自分の民とせられた、それでアブラハム族を、神の民と呼ぶのである、イスラエルの民、ヘブレオの民、猶太の民といふのは此アブラハム種族をいふのである、而て此民から救世主が出ずべしといふことを神がアブラハムに約束せられた、アブラハムより餘程後に至りてモイゼといふ聖人が神に撰まれて此民の首長となつた、此モイゼは神より親しく人々の守るべき十個條の誡と、種々の禮拜式、律法などの御告を受けた、故に此時より救世主御降誕までの神の敎をモイゼの律法といふ、

右のモイゼに御告のあつたは救世主御降誕前千四百九十年である、而て舊約全書を記した眞正の理由は唯一で、千四百九十年後に降誕すべき救世主の豫表と之を立證するためである、



## 第十章　救主耶蘇基督

舊約全書には救世主に關する豫言は澤山あつたから猶太人は其御降誕を切に待つて居たが、然しモイゼ敎を信ぜざる他の國民も何か世の救濟者といふ如きものを待つやふな心を有つて居つた、何せなれば舊約全書は隨分廣く世に知られた書であり又異邦人といふても其祖先から傳つた太古の天啓が遺つたからである、尤も猶太人も異邦人も共に誤想たことは近き將來に出現すべき救濟者は此世に偉大なる勳功を立てる豪傑であるかのやふに思ふたのである、故に謙遜にして貧究の中に艱難を受け終に十字架に釘けらるゝといふ恥辱な死を遂げたを視て、これが救濟者であるなどゝは夢に

も思はなかつたのである（古事新論參看）

## 第一節　其御名

第三章三節に陳べたるダニエルが豫言したる時節に當て果して救世主は降誕したまふた、其御名はイエズ、キリストといふ、イエズ、とは救ふ者、キリストとは聖油を灌がれたるものといふ意味である、昔時は人が王位或は司祭或は豫言者たるときは聖油を塗るの式があつた、斯く塗られたるものは神に献げられたもので至て聖いといふの意味である、而て救世主は萬物の王、諸の司祭及豫言者の頭たるものなれば勿論キリストである、至て聖い御者である、イエズ、といふ御名は支那日本には耶蘇と書く多くの日本人は今に於ても昔の先入に欺かれて耶蘇といふ語を邪惡の意に考へる、さる考をするものは死後イエズ、キリストの全能と其光榮を賭て生前の考と全然異るに驚倒するであらふ、使徒ポーロがピリピ人に送る書に記して『神は甚しく彼を崇めて諸の名に優れたる名を彼に與へ給へり、こは天に在るもの地に在るもの及地獄にあるものをして悉くイエズ、の名に由りて膝を屈ましむべし』（二章九節十節）とあるをも視ても如何に其名の聖きかゝ知らるゝ、

## 第二節　其御性質

救世主なるイエズ、キリストは實際如何なるものであるか、一言を以ていへば神人である、詳言ば一體の神なる聖父と聖子と聖靈の三の御方の中聖子なる方が特別に造られたる靈魂と肉體に自ら合體されて人間に成りたまふたのである、この聖子が眞の神なるを以てイエズ、キリストは神性を有し、又肉體と靈魂とを具へたるを以て人性をも有したまふ、之をヴエルブム即聖子の托身といふ、斯く神が人間に成ることが如何にして成し得らるゝか、それはヴエルブム托身の玄義であつて毫も解らぬ、然し此ことのみが玄義でない、現に人間なる吾人自身が既に玄義である、無形なる靈魂と有形なる肉體とが合併して成つたものが吾人々間である この無形と有形なる全く相反する性質のものが何うして一の人たるまでに合併するこ

とが出來得るか、之を人性の玄義といふて毫も解らぬ、解らぬといふも事實がさうであるから止むを得ない、其他又聖子の托身に就ては玄義なるほど深遠なることが尚一ある、之は哲學にも關係する說で吾人の了解に苦む所である、雖然此說が無いならば救世主の聖爲其御誕生、御苦難、御死去等の價値を知ることが出來ぬ、其は何である か、先人間といふものは性質の全く反する靈と肉との合併に因りて成つたものでも二の人格を有せずして一の人格即一のペルソナのみである、ペルソナ即人格が一であるから其行爲働作は人格の爲さしむるものである、決して靈のみにも肉のみにも屬さない、近くいへば人の行爲の責任は靈のみにも肉のみにもあるでなく全く人格の負ふ所である、救世主なるイエズ、キリストは眞の神眞の人であるならば神性と人性とを有するから、吾人々間に解し得らるゝ卑近な理論より考へれば、イエズ、キリストには何うしてもヴエルブム 即 神の聖子なるペルソナと人間なるペルソナと二あるべく思はれる、換言れば神格と人格とを有せられると考へられる、若し斯く吾人の考へる如くであるならば救世主の總ての聖爲は悉く神格のみより出るでなく或事は人



格より出でたるものもなければならぬ、然るに新約全書に依て考れば全く之に異つて有限なる人格は無限なる神格に因りて消滅されたのである、故に救世主は神性と人性の二を有せらるゝもペルソナは一にして神格を有せらるのみである、依て救世主の一切の聖爲は皆ヴエルブムなる神格より出るもので其聖爲の價値は無限である、又之を以て神は始めなく永遠に在すものといふても人性を有つて生れたまふたから實際神が生れたまふたといひ得られる、又其人性のみが苦難せられ死を遂げ葬られ復活せられ昇天せられたことも事實神がせられたものといはれる、人若し斯る玄義は決して信じられぬと思ふならば暫らく先づ自己を視よ、吾人が飲むも食ふも歩むも總て皆肉體の働作である、雖然これは肉體のみの行爲でなく人格より出るの行爲ではないか、而も之亦た信じられないとするか、凡そ人格といふことが社會の交際にも法律などにも主なる要素である、例へば殺人の惡事に就ては法律は精神の罪肉體の罪と別々に分けぬ、身體を以て犯したる行爲も實は其ものゝ人格の爲したるものと認める、尙一歩を進めて考れば救世主托身の玄義は人性の玄義に頗る類似の點がある、即救世主には其性

を二具へられるからペルソナも二と思はれるに、さはなくて却て一のペルソナのみである、人は其有するペルソナは一なれども性は二つあるべく思はるゝに、さはなく、て人性唯一のみである、人間は靈なる無形徃と肉なる有形性の結合であるから二の性であると思ふは當然なるべきに、如何なる國でも如何なる學者でも古來人性は一のみとして之に就て異論はない、然らば其無形性と有形性とは何うなつたであらふ、是即人性の玄義で之を解し得た學者は一人もない、斯く解らぬといふてもそれに疑ひはないのである、（詳論はリギヨル著神人を看て知るべし）

## 第三節　其略歷

救世主なるイエス、キリストの聖歷を取摘むで陳ぶるに當て、玆に餘程珍奇なる研究の一あることを先づ陳べやふ、イエズ、キリストを信ぜずとも多少研究を好む人ならばこれは隨分興味あることだらふかと思ふ、前にも陳べた通り舊約全書の出來た所以は主に救世主の準備のためである、就中豫言のためである、而てイエズ、の御降誕より數百年前に記されたる豫言のみを視てキリストの聖歷は知り得らるゝ、次には新約全書と聖傳とを以てキリストの實歷を知り之と彼とを比較照合して視たならば、この二は果して一致するや否やといふことが分るこれは實に眞正の研究である、斯る研査は實は公教のために最も危險なる試みである若も一點でも此二に契合せぬ所があるならば舊約全書に記されたる豫言はために好笑柄となるであらふ、隨てイエズ、キリストの神なることも證明し難くなる、されば斯る研究は非耶蘇敎者の最も悅ぶ所であらふ、卒その研究に取り掛らむ。



## 第四節　豫言より視たる耶蘇基督の聖歷

### 第一　其系統に就て

アブラハムの裔なり（創世記廿二章十八節）

十二族中猶太族より出べし（創世記四十九章八節及九節）

ダヴイド王の家系より出べし（耶利米亞記廿三章五節六節）

第二　其稱呼に就て

神の子（詩篇二章七節）

隱れたる神（以賽亞書四十五章十五節）

救主（以賽亞書六十二章十一節）

義の博士（約耳書二章廿三節）

第三　其降誕の時節に就て

猶太族の裔が王位を握るの間（創世記四十九章十節）

滅亡せるエルザレムの改築より四百九十年後（但以理書九章廿五節廿六節）

第四　其出生に就て

童貞女より生るべし（以賽亞書七章十四節）

ベトレム府に生るべし（米迦書五章二節）

東より來れる王等之を拜禮すべし（以賽亞書六十章六節）

第五　其幼時に就て

エヂプト國に逃るべし（臥西阿書十一章一節）

第六　其御受難に就て

驢馬に乘りてエルザレムに入るべし（撒加利亞書九章九節）

三十デナリヨに賣らるべし（撒加利亞書九章十二節十三節）

罪人と共に數へらるべし（以賽亞書五十三章十二節）

磔柱に釘つけらる（詩篇廿一章十七節）

膽と醋を飲ます（詩篇四十九章二十二節）

兵卒等は彼の衣を分ち其襯衣を鬮にす（詩篇廿一章十九節）

彼は其仇敵のために祈らむ（以賽亞書五十三章十二節）

死し給ふ（以賽亞書五十三章十二節）

復活し給ふ（詩篇三章六節及十五章九節十節）

昇天し給ふ（詩篇廿二章七節八節）

此他尙種々の豫言あるも如上にて救世主の如何なるものか其大要は知り得らるゝから

省く、

## 第五節　事實に於ける耶蘇基督の聖歴

豫言は右の如くであるがサテ其實際は如何であつたか、古の高名なる英雄アレキサンドル、ハンニバル、セザル等の歴史を知り得るが如く歴史、年代記、記錄遺物等によりて研究し得られる、されば古の英雄の事跡を信ずることが出來るなれば何故イエズ、キリストの事跡を信じ得られぬか、イエズ、キリストは左まで往古の人ではない、凡千九百年前生れたるものである、而て又其在世中世に知られなかつた人でもない、否々猶太に於ては其名聲嘖々たるものであつた、數千の人が其敎訓を聽かむとて後を慕ひ行くことは屢あつた、尙又時の司祭學者等に嫉まれてエルザレム府に騷擾が起り、ポンシヨピラトといふ羅馬の奉行に不法な審判をされた、是等の事柄は公然行はれたことで猶太國中知らないものは無つたのである、又後にキリスト敎が西洋諸國に弘つて三百年餘の間は酷く迫害を受けた、其時イエズ、キリストの事跡を證するために生命を拋つたものは萬を以て數へる程あつた、古來如何なる英雄豪傑でも在世中こそ赫々たる威名を輝やかして人々に畏服せらるゝが其死するや衆望一時に消失せて僅に史上に其名を存するに過ぎないといふが常である、イエズ、キリストは全く之に反して其死したまふや在世中よりは更に其名聲は隆んに衆望愈歸して弟子は次第に殖え年を經るに從つて益高名になりゆくのである、而て人は高名なるほど世に注目されることが深いから其事跡を飾り虛構を傳へることは最も至難である、故にアレキサンドル、ハンニバル、セザルなどの如き高名なる人の歴史は確實であるが、イエズ、キリストの歴史は更に確實だといはれる、尙又凡五六十年前より獨逸國に始まりて他邦にまで及べるは精密なる聖書の研究である、此學問は分けてもユデア、アラビヤ、ペルシア、エヂプト、ローマ等の國々に年を追ふて頻々發見せられる古代の遺物遺跡古代記錄物等を以て舊新兩約全書を嚴密に探査する學問である、公敎の敵なる學者等は之を以て公敎を破滅せしめんと畚つて力を盡しつゝある、此故に舊新兩約全書ほど嚴格に精密に研鑽せられた書は他には決して無いと斷言し得られる、

處が斯く嚴重に研究せられても歴史上最も確實なりといふ價値を失はぬ事跡は左の所である、即右のダニエルが豫言せる年に際つて、ミケアの豫言せる如くベトレエム府に救世主なるイエズ、キリストが降誕せられた、是は今（即明治四十年）より千九百七年前である、而て其救世主が創世記の豫言の如くアブラハムの末裔にして猶太族であり又ダヴイド王の家系なる童貞女マリアより生れたまふた、

## 第六節　父なくして生れ給ふ

右の如く童貞女より生れ給ふたといふは人間なる父親がないといふ意味である、然し父親が無くて生れるといふことは一の怪談として信じないものがあるであらふ、勿論父なくして母よりのみ生を受けるといふは自然界の通則に外れることである、然しながら自然界の規則といふも素是萬物の創造者なる神の立てたものであれば、此通則に反することの有り得らるゝも創造者の自由で毫も怪むに足らない、萬物を無より創造したまふほどの全能の神が、父なくして母より一人の子を生ましむることが何故不可



能ことならふか、却て怪む人の矛盾の心が怪しまるゝのである、然しながら神が徒らに奇を弄むで常則に外れることをせられたといふ譯ではない、救世主は是非とも父なくして人なる母より生れなければならぬ理由が存するからのことである、前の第四章に詳説したる如く、聖三位一體なる神は超性的目的を以て人類を造り、背いたる人類を棄てず、却て深く之を憐み、之を助けむとの聖慮があつた、然るに無限なる神に對しての罪は有限なる人類自らの力のみを以て贖ふことは神の義に於て許されぬことである、之を以て神のヴエルブム即聖子が降誕せられて人間に成り、其藉りたる人性を以て之を救むと定め給ふたのである、而て此人性を被たヴエルブム即イエズ、キリストは神人にして神性と人性とを合せ具へたるものであることは毎々いふ通りである、それで人性を受けるためには是非ともアダム、エワの系統を引たる子孫でなければならぬ、此故にアダム、エワの末裔なるマリアより生れたまふた、從てイエズ、キリストは眞實人間である、斯くイエズ、キリストに性が二あるも二位のものではない、一位のものである、其人格は消滅して神格のみである、さうして其神格はヴエ

ルブム即聖子である此永遠に在す聖子は聖三位の中第二位にして其永遠の父、聖父なる第一位である、故に人間なる父親を要さぬ、人として二の父のあるべき筈がない是れイエズ、キリストが人間なる父親なくして生れたる理由である、これは聖子の托身の玄義で吾人に明かに曉ることは出來ないが、然し不道理なることは決してない否却て斯くなければならぬことが知られる、尙又神の全能なる性質を多少にても考へるならば斯く自然界の常則に外れる異數の規則を以て降誕したまふたればとて微少も疑ひの種にはならないのである。

## 第七節　耶蘇基督の聖計

イエズ、キリストが斯く降誕したまひ、三十三年間生存せられたとは、救世主の聖意、其御降誕の所以を知らないならば、假し之を知つても能く〳〵これを會得せぬならば其三十三年間の歷史は少しも解らぬであらふ、否却て斯るものを神として拜することを愚とするに至るであらう、イエズ、キリストの降誕せられたる所以は神に對し



謀反し惡に陷れた人類を救ふためである、故に第一には謀反なる恐ひ罪を贖はねばならぬ、それには御自分が人類に代つて聖血と死とを以て贖はむとの感銘すべき聖慮であつた、而て其聖慮の如く御齡三十三に達したまへる時斯くせられたまふた、此故にイエズ、キリストを救世主といふのである、第二は善惡の眞正の別を判ずることの出來ないほど智が昧み、又傲慢邪淫貪婪などの卑むべき汚穢情慾の奴隷たるほど情の濳れたる人類を訓誨し改悟させねばならぬ、一言を以ていへば眞正の道德善行を誨へ又之を守らしめねばならぬ、尤も唯道德を敎えるといふことだけなれば容易である、昔の哲學者ソクラテス、アリストツト、孔子等の如く校舍を建て口を以て或は書を以て人に敎えるのみで足りる、然し其口其書を以て誨へたる道德を實踐せしめるといふが至難である、況んや其の師たる人の在世中のみならず數千數萬年の後までも世の終りに至るまでも人々に其道德を實踐せしめるといふのは是決して人力に及ばざる至難の業である、斯ることは單に口のみ筆のみを以て數千萬言を費したとて何の効もないであらふ、イエズ、キリストは之がために先づ眞正の善德を實踐躬行せられ、人々

の聖い龜鑑となられたのである、これこそ如何なる雄辨卓說よりも巧妙なる文章よりも書籍よりも肝要である、而てイエズ、キリストが斯く完全なる善行を躬ら實踐せられたるは其御誕生より御死去に至るまで御生涯を以てせられ、口を以て善を說き道を誨へたまふたのは僅々三年間のみである即三十歲より三十三歲までの間のみであつた、（福音の門參看）

## 第八節　善德の性質

イエズ、キリストが人々に訓へ守らしめんとせられた善は何であるか、眞實にいへば善とは心と行を以て眞を守ることである、詳言は一は人間が無より造られたもので其智も情も肉も總ての德も能力も悉く萬物の創造者なる一體の無限物より賦へられたので是皆神の恩である、吾人々々類が貴いのも、自ら貴きものになつたでなく神の恩に因て貴くせられたものであると深く自覺することが謙遜といふ眞である、之に反して賦へられたる能力、德、美等を己自ら致せるものとなし自負し自慢するのは傲慢



といふ恐るべき僞である、使徒ポーロがコリント人に贈れる第一書にも『汝は何の受領ざる物を有つか、若しこれを受領ば何ぞ受領ざる如く誇るや』（四章七節）と記してある、實に傲慢は凡ての僞と惡と罪の源で吾人の骨髓まで染み込むだ最も抑へ難い惡である、故に其反對なる謙遜といふ善は一番守り難い善である、二は人は靈魂を以て靈界に屬し超然的目的のために造られたものならば決して物質界の金錢財寶を以て生命の目的とせず、之等のものは單に生活の方法に用ひるのみなるが寡慾といふ眞である、イエズ、キリストの聖言に『心の貧きものは福なる哉天國は彼等のものなるべければなり』（瑪竇傳五章三節）と宣ふてある、之に反して物質に抑制せられ金錢の奴隸となりて現世の財寶を貪るといふは貪婪といふ僞である、使徒ポーロの言に『金錢を貪ることは偶像を拜むに同じ』（與以弗所人書五章五節）とある、然るに世の狀態を見れば心の貪きもの即金錢財寶を貪らないといふ人は純潔に在す神に造られたものであれば其心をも肉をも濱さずして潔白に持たねばならぬ、人類の主なる神の聖慮に從つて、定まりたる婚姻に因り子孫を繁殖するため

の他其生殖の動作を妄りにしてはならぬ、之は貞潔といふ眞である、之に反して孳殖の目的ならざる夫婦の倫道以外に卑き娯樂をなすは邪淫といふ最も恥づべき僞である使徒ポーロの言に『凡て姦通するものはキリストと神の國を繼ぐを得ざることを汝等知ればなり』（與以弗所人書五章五節）とある、邪淫といふことは貪婪よりも制し難い惡だと思はれる、此の誡遵守慾潔淨といふ完全なる善を訓へ守らしむるためにイエズ、キリストは現世の榮譽や財寶や淫樂を捨てゝ三十三年間驚くほど完全に實踐躬行したまふた、此故に昔も今も自慢くさい人好色家、强慾家はイエズ、の高潔なる敎を嫌ふのである、昔者猶太の敎師學者等がイエズ、キリストを磔刑にするほど嫌ひ、今は又國に由りて無道なる法律を設けて其敎を迫害し或は其敎師信者を殺し或は又妄信として輕蔑するなどのことあるは當然である、これ一にイエズ、キリストの立て給へる宗敎が常に傲慢邪淫貪婪を敵視し之と奮鬪する宗敎だからである此書を讀む人は願くは右の趣意を考へつゝ左に記す所のイエズ、キリストの歷史を讀まむことを、

## 第九節　耶蘇基督の御誕生

耶蘇キリストは猶太國ベトレエム府に生れた、其聖母なる童貞女マリアは當時ナザレツトに住まれたが何のためにベトレエム府に往つたかといふに、猶太國は當時羅馬の屬國であつたから凡て羅馬の制度に從はねばならぬのであつた、それで今より千九百六年前キリノといふ羅馬の奉行が猶太を支配した時、羅馬王セザル、オギユストは猶太國民の戶籍調查を命じた、而て其調查は各人民自ら其本籍地の役所に出頭して受けねばならぬ規則であつた、然るにマリヤはダヴイド王の嫡系であるからダヴイド王の屬地たるベトレエム府へ往たのである、處がこれと同樣に矢張戶籍調查のためにベトレエムへ四方から集つたものはなか〳〵多く、爲に旅亭は客が充ちた、乃で止むを得ず市街を出て、其近傍の牧園で雨の時に羊を追入れる洞穴に入りて一夜を凌いだのである、時は恰も「二月廿四日のことで其夜半に急に出產せられたのである、其生兒が即救世主イエズ、キリストであつた、嗚呼イエズ、キリストは厩の如き牧畜を

收容する穢い所に言語にも盡せぬ貧しい御誕生をなされ、世に呱々の聲を擧げらるゝや否最早吾々の傲慢貪慾を制するやふ驚くべき謙遜を以て貧苦に處せられ給ふた。然しイエズゝは如何に謙遜に貧苦であられても神であるから人より拜せらるべきもので ある、故にイザイアの豫言（六十章六節）の如く東方より三人の王が來た、彼等は皆博學のもので豫言に記されたる如く（民數記廿四章十七節）彼を拜禮した、斯く三人の王がベトレエムに生れた一の貧兒を禮拜したといふことはエルザレム京城まで其評判が聞えた、然るに時の猶太王ヘロデは彼兒が成長の後は猶太王に成るであらふと懼れて彼を殺さうと工夫した、マリアは之を知つて其子を伴ひ近國エヂプトへ逃れた、これはオゼエ書十一章一節に記してある豫言に適應して居る、其後ヘロデ王は死んだからエヂプトより歸つてイエズゝが三十歳に至るまでナザレットに住みたまふたのである、イエズゝは斯く長年月間神の全智全能を現はさず貧しき工人の如く手にて働き將來言を以て敎えらるゝ善德、即信心、孝道、謙遜、寡慾、忍耐、溫和、柔順あらゆる諸德を先づ行ひに示された、神なるイエズゝ、キリストが幼時より壯年に至るまで



貧究の中に勞働せられたといふことが不思議と謂ふならば請ふ世間を視よ、此社會には富裕にして安穩に生を送るものは極めて少く其大多數は日々額に汗し辛苦勞働して悲みの中に日を送るものである、イエズゝ、キリストが降誕せらた譯は決して少數の例外者即富裕にして幸福なるものゝためでなく一般人類のためである、八分勞働者の如き貧困不幸なるものゝためである、キリストは斯る不幸なものに忍耐を示し其慰藉者となり、扶助者となるため、一言を以ていへば彼等の模範となるため不幸な生活をなされたのである、世の總ての先導者たりし人々の中に斯くまで一生を艱難に忍び辛苦に堪えたものは他に決してない、

## 第十節　耶蘇の宣敎、十二使徒の撰定

耶蘇キリストは愈三十歳に達し宣敎の時期に至れば人々に訓える前先十二人の弟子を撰むた、之を公敎に使徒といふ、此使徒を撰むの方法を見れば吾人は實に感に堪えない、概して救世主の歷史其聖爲人類を救ふの方法等は全く豫言者イザイアの書に記さ

れたる通り『神の思は人の思と異り、又其道は人の方法と異る』（五十五章八節）ものである、

凡そ如何なる人でも常識を以て考れば大事を爲すに人を撰むは一大要件である、例せば他國と戰端を開かんとするとき、或はソクラテス孔子の如き哲學者が其道を弘めんとするとき、或は會社を創立せむとするとき、斯る塲合には誰しも聰明な濶潑な剛毅な敏捷な與に大事を爲すに足るものを撰むで其事の成功に努めるのが普通である、決して愚昧無學臆病優柔な人を任用するが如き沒常識のことはせぬ、然るに眞の宗教を立て之を世界に弘め人類を助けるといふ一大事業、殊に世間的事業でない超性的事業に向つて、如何に聰明敏濶でも啻に人間の苦心經營に因つて成功するものではない、全く神爲に因らざれば能はざることである、此故に後日公教が弘まり世界に惡人の助かることの多いを視て人爲として傲らざるためにキリストは特に憶病な優柔な卑賤なのを撰むで使徒となしたまふた、故に十二使徒中一人を除くの外は皆勞働者であつた而て其一人も名をレヴイ或はマテオと呼ばる、最下級の稅吏である、これ等の十二人は三年間始終もイエズ、キリストに附隨して其敎訓說話を聽いたといふても、未だ其智は啓けず救世主の聖意を曉らずして、吾主は必ず戰ひを以て猶太國を羅馬の羈絆より救ふ英雄かの如く信じ居るほど頑冥であつた、殊に又彼等はキリストの驚くべき奇跡を親しく睹ても尙彼を降誕したまひし神だといふ信仰は至て薄弱であつた、故に彼等は主が不法なる裁判を受けたとき危み懼れて逃げるほどに憶病であつた、然るにイエズ、キリストが御死去なされ御昇天なされて後、聖靈降臨があつて（聖靈降臨のことは後章に陳ぶ）其大なる効力を受けるや、彼等は遽然前と變り其智は啓けて公敎の旨意に通じ、其口は雄辯となり且つ西洋小亞細亞印度までも聊か懼危することなく宣敎し、終には彼等悉く敎のために甘じて其生命を棄てるほど勇邁なる人間となつた、これはイエズ、キリストの神なることゝ、其敎の天啓たることゝを最も明確に證據するものである、



元來イエズ、キリストの聖計は自ら宣敎して多數の信徒を得るのではなく、使徒等をして神慮のある所を知らしめ、人々が救世主の聖血に因りて助かるといふ道なるこ

とを教えしめ、而て天に歸られて後は彼等と彼等の後繼者を以て世界に其道を弘めさせるといふにある、故に此聖計に從つて彼等使徒等は三年間イエズ、に附隨して猶太國内を徑行り其御說教を聽き其奇跡を視て、一言を以ていへば主が他人に對しての道方交りを結ぶの方法を教えられたのである、

## 第十一節　耶蘇の教訓

### 第一項　傲慢と謙遜

イエズ、キリストは如何やふに人々を遇せしや、概していへば傲慢なるもの、安り に威を振ふもの、輕薄なるもの等に對しては最も嚴しくせられた、例へばモイゼ教の司祭等に對して『ア、蝮の裔よ汝等如何で地獄の罪を遁れんや、(瑪竇傳二十四章三十三節)と宣ひたるが如きである、イエズ、が司祭等を蛇蝮に比べたるも其口に謙遜と信仰を裝ひて心は傲慢なる僞善なることを指したのである、イエズ、キリストが傲慢なものに對して温和なことは新約全書中一所もない之に反して如何なる罪惡を犯し



ても己が罰さるべき汚れたる人間たることを本心より自認する謙遜な人に對しては飽までも柔和を以て接し憐みを懸けたまふた、これは舊約全書に屢記されて『神は傲るものを挫き、謙るものを高む』とあるが如くであつた、尙これに就ては新約全書に記しある話を一つ陳べやふ、路加傳十八章に『九自ら恃みて義となし、他を侮るが如き人々にむかひてイエズ、はまた此の譬喩を語りたまへり。十二個の人祈禱んとて聖殿に登りけるが、一はファリゼオ徒、他はプブリカノなりし(フワリゼオとは其頃最も威を振ひ人々に贊め敬はれたる教派、プブリカノは稅吏にして猶太人に最も忌み嫌はれたるもの)十一ファリゼオ徒立ちて、心中に斯く祈れり、神よ、我は餘人のごとくならず、即ち勒索者、不義なる者、姦淫するものにして亦此の收稅吏にも似ざるを禰に感謝したてまつる。十二我は一週に二回禁食す、凡て有る物の什一を献ず と。十三收稅吏は遠く下り立ち、目を天に擧るだも敢てせず、其胸を打て、曰く、神よ、我が此罪人を憫みたまへと。十四我なんぢらに告ぐ、此人は彼の人よりも義とせられて、其家に降りゆけり、如何となれば、凡そ自ら高くする者は卑くせられ、自ら低くする

者は高くせらる可ければ也。」と、神のこの誡めより考へれば世の終りに當て人は其本心と行とに適當な賞罰を與へられ來世には全くイエズ、の聖言の如く『先なる多くのものは後になり、後なるものは先になる』（瑪竇傳十九章三十節）であらふ、即現世と來世とは全く反對して、世の終りは人類の完全な變遷であらふ、

## 第二項　來世の賞罰

イエズ、キリストは其御說敎中屢宣ふたのは來世の賞罰といふことであつた、諄もいふが超性的目的即神と合併するために人は造られたのである、此の高尙な目的を達することをイエズ、キリストは神の國、或は天國、或は父の國、或は終りなき國、に入ると宣ふた、瑪竇傳に『汝等若し悛めて幼兒の如くならずば天國に入るを得ず』（十八章三節）といふ聖言が記してある、其意は幼兒の如く正直に謙遜に潔淨にあらざれば天國に入ることを得ぬといふのである、又瑪竇傳に『其時正義ものは其父國にて日の如く耀かん』と記してある（十三章四十三節）其意は善人等は來世神と合併



して大なる光榮を得べしといふのである、又同傳に『但し汝もし生命に入んと欲せば誡を守れ。』（十九章十七節）と記してある此等は皆超性的目的を達するに就てである之に反して人が超性的目的に外れて永遠に神に勘當せらるゝことをイエズ、キリストは地獄或は外の闇、或は終りなき火、或は永遠の苦痛などと仰せられた。例せば路加傳に『富る人もまた死して地獄に葬られき』（十六章二十二節）と記してあり、又瑪竇傳には『されど彼等は外の幽暗に投げいだされん、彼處には哭くこと及切齒することあらん』（八章十二節）と同じく廿五章四十一節には『斯くて左に在る者にも言はん、詛るゝ者よ、我を離れて退け、惡魔と其使衆の爲に備へられたる永遠の火に入れよ』と、同章四十六節に『彼等は永遠の苦に入り、義き人は永遠の生命に入らん』など記してある、斯る聖言は曖昧に比喩たものではない、極めて明確に宣はれたことである然しながら無宗敎家の耳には天國地獄の如き言は近世の科學に合はぬ愚言と聽えるであらふ、勿論靈界とか、人間以上に存在せる權威などを故らに放棄して自分勝手に己の智識の他崇むべきものはないとするやふな人ならば、最も氣に合はぬ言であらふ、

成程愚説と嘲り妄信と侮ることは容易いが、然し天啓教を信せずとも一般の人情に戻ることは決して道理でも學問でもない、古往今來萬國萬民の百中九十九までは天國地獄の信仰があつた、シテ見ると此信仰は人情の自然より出たか、或は太古の天啓の傳來したものといはねばならぬ、若しも之が人情のみより出たとしても、シセロが凡そ人性一般に認むることは眞理なること疑ひなしといへるが如く眞實である多くの國が天國と地獄の狀態に就て種々なる愚なる想像もあり、又其細かな説に就ては差つた所もあるが、畢竟人類一般が來世の賞罰を信じたといふことは一致して居る、現世を理想的に觀察すれば若も道德が無い善惡の差別がないと思ふほどに智と情の腐らぬ人ならば何うしても現世の不義不合理なる狀態を矯正する來世があるべきだといふ考が起らねばならぬ、實は吾人も天國地獄といふ言は餘り意に適せぬ、何となれば此言は佛敎説に因て如何にも迷信妄想の如く聽えるやふになつたからである、さりながら此他に適切な言がないから暫らく襲用して居るのである、然し其意は人が造られた超性の目的を達して無限物に深く愛され、永遠に之と合併するといふのが天國で、之に反する超性の目的を外し無限物に深く嫌はれ、永遠に勘當せられるといふが地獄である、

## 第三項　愛德

イエズ、キリストが三年間御示しなされた敎訓を詳細に擧げることは此冊子の堪える所でないが、要するに左の二誡に包含されて居る、イエズ、の聖言に『三十七汝の心を盡くし、汝の靈を盡し、汝の意を盡して、主なる汝の神を愛すべし。三十八是最も大にして、第一の誡命なり。三十九第二も之に同じ、汝の倫近者を己の如く愛すべし。四十全律法および衆豫言者は、斯の二則の誡命に基けり』（馬竇傳二十二章）とある、此意は先づ無限なる御一體の神を確信しても之を拜禮しても其のみでは未だ足らぬ、其上に力の及ぶだけ萬事に超えて愛さねばならぬ、吾人の眞正の親であるから愛を以て孝を盡し、其命を守り其聖意に適はぬことを避けるやふにせねばならぬ、又倫近者といふても親類朋友のみならず總て直接間接に交はる人々は悪くいふのである、故に己を嫌ふものでも己に害を加ふるものでも愛さねばならぬといふのである、是に

就てイエズ、は尚斯く仰せられた『汝等は凡て人々の汝等に爲さんと欲する所のことを又人々に爲せ、是即律法なり』と（同七章十二節）然し敵までをも愛すること惡に報ふるに善を以てするの至難に思ふものはイエズ、の左の聖言を聽け『四十四されど我なんぢらに告ぐ汝等の仇を愛し、汝等を憎む者を善し、汝等を迫害かつ譏誚る者のために祈禱れ、四十五然らば汝等天に在す汝等の父の子となるを得ん、彼は善人と惡人の上に齊しく其日を昇し義者と不義者の上に齊しく雨降したまふ也、四十六汝等もし惟己を愛する者を愛せば、何の報賞があらん收稅官も然するに非ずや、四十七己の兄弟にのみ挨拶せば何の超たる所かあらん、異邦人も然するに非ずや、四十八故に汝等の天父の完全が如く汝等も完全かれ、』（同五章）と、尚イエズ、の聖意を知りたいならば世に最も高名御敎訓の始めの聖言を聽け、これは山上に於て多衆のものに對してなされたもので山上の垂訓と稱せらるゝ『心の貧き者は福なる哉、天國は彼等の有なれば也、柔和なる者は福なる哉、彼等は地を獲べければ也、哀むものは福なる哉、彼等は慰籍らるべければ也、義を飢渴きて慕ふ者は福なる哉、彼等は飽くことを得べければ也、哀憐む者は福なる哉、彼等は神を視るべければ也、講和者は福なる哉、彼等は神の子と稱へらるべければ也、義のために迫害を懼むる者は福なる哉、天國は彼等の有なれば也、我爲に人々なんぢらを訴詈り、汝等を迫害、汝等を誣て各種の惡き事を言ん時には、汝等福なる哉、喜べ、樂め天において、汝等の報賞大なれば也』と、此意を約めていへば私慾を抑へ惡を避け善を行ふものは來世に於て言に能はざる深い報賞を賜はるから幸福である、又神の命を奉するために其光榮を保つために、其敎を弘めるために無宗敎なる世間より大なる辱めや難儀を受くるほど幸福である、何せなれば現世に神に對して苦むほど來世永遠に廣大なる榮福を受けられるからといふのである、

## 第四項　神の憐

右の如き善こそ最も完全に最も高尚なものである、然しながら來世の助りを得るためには何人も斯る完全な善を行はねばならぬといふの意ではない、若しさうならば眞に

救靈を得たものは古來極めて少い、大聖人といはれる人の他はないであらふ詩篇百三章にも『神は吾等の罪の量に因りて吾等を罰せず、神を畏敬するものに對して其憐は天の地より高さほど高し、東の西より遠きほど吾等の爲したる惡を吾等より遠ざけしめたまへり、神は彼を畏敬したるものを親の其子を憐むが如く憐みたまふそは、神は吾儕のあさましきを知りたまへると、吾等の塵土なることも覺えたまへばなり、人の生命は野の草の如し、其さかえは花の如し、忽ち消えて跡なし』と（十節より十五節に至る）と記してある、これは舊約全書も新約全書も同じで、人が神を確く信じて其義怒と罰とを恐れ、惡をなす毎に深き謙遜を以て罪を謝すれば必ず神の憫みを受けるのである、之に依て見ると私慾に負け罪を犯しても又右の如き完全な善を行はずとも信仰と謙遜と謝罪といふ善のみを以て救靈ることが出來る、尤も救靈るためには罪を犯すまじといふことゝ眞の善を行ひたいといふことゝの本心よりの決心と希望が無ければならぬといふは必要の條件である、己が爲したる惡を悔ます、謝罪もせずして己が負むやふな傲慢な人間のためには神の憫みは毫もない、斯るものは既に現世から天上へ棄てられた人間である、



## 第十二節　耶蘇の奇蹟

右に陳べたる所はイエズ、キリストの敎えたまへる道德善行の概略に過ぎないが而も開闢より如何なる大學者も未だ曾て考へたことのないほど高尚なものである、それのみを視ても正直に考へる人ならば、彼は單に人間のみでなく神であるといふことは優に證明し得られる、此他にも前に陳べた豫言といふ證據と此二を以てイエズ、キリストを信仰するには充分であるが、尙信ずることの出來ないといひ得られぬために一の證據を擧げやふ、それは即奇蹟である、（三章四節に陳べたる所を看よ）而てイエズ、キリストは人性の他に神性を有せらるゝ、人間に成り給へる神であるといふことを證するために親しく種々なる奇跡を行ひたまふた、

前にも擧げたがヨハネは『此書に記せることの他イエズ、の爲せしことは尙數多ある』（約翰傳廿一章廿五節）といふた通り新約全書は決してイエズ、キリストの完全な歷

史ではない、唯其言行の一班を記した記錄斷片ともいふものである、故にイエズ、の爲し給へる奇跡も亦た新約全書には其一部を記したのみである、が然し其中最も明かな證據となるべき奇跡は、自らの力を以て復活したまふたことである、けれども復活のことは後章に陳べるから爰には新約全書に記されたる奇跡の中の二だけを擧げやふ、而て此奇跡は多衆の目前に行したまひたるものれなば人目を瞞かす僞奇跡といふことは出來ぬ、一は瑪竇傳十五章に記してあるもので『二十九イエズ、がガリレアの海邊に來り、山に上りて其處に座つた、三十大群衆はやがて啞者、瞽者、跛者、殘疾其他多くのものを伴ひて彼に就き、其足下に此等を置しに、皆之を醫したまひたれば、三十一群衆は啞者の言ひ、跛者の步み、瞽者の視るを觀て、深く奇み、且イスラエルの神を崇めた。三十二時にイエズ、其弟子たちを召て曰たまはく、我この群衆を憐む、彼等われと共に既に三日續いて居り、今や食ふべき物なし、空腹にて彼等を去らしむるを欲せず、恐くは途上にて弱らんか、三十三弟子たち彼にいふ、然らば我等かゝる群衆を飽しむべきパンを野にて何處より獲んか、三十四イエズ、彼等にいふパン幾頭有るや、彼等いふ七頭のパンと些少の小魚のみ、三十五イエズ、群衆に命じて地に坐せしめ、三十六七頭のパンと其魚を取り、謝して擘き、其弟子たちに與へ、三十七弟子たち、之を民に與ふ、皆食ひて飽き、殘餘の屑を拾ひしに、七の筐に盈り、三十八食ひし者は婦女と幼童の外、四千人でありし、三十九彼群衆を去らしめ、小舟に登りてマゲダンの境に至る、』と



斯く婦女幼童を除く外尙四千人の人が食べて飽くほどに七のパンと些少の魚とを言で殖すといふは如何に科學が進歩したとて出來ない、これは物質界の性質、其固有の力、其自然現象に合はない行爲たることは明晰である、又此ことは數千の人の目前に於て而も白晝公然行はれたる不思議であるから、其風評はなか〳〵大きく到底も之を隱すことも、又虛僞を以て此事跡を毀傷ることも出來ない、斯やふなことは一度二度でなく數多度あつたから猶太國はいふに及ばず隣國にまでイエズ、の評判が高くなつて知らぬものは一人もなかつた、さればイエズ、御死去後間もなく未だ其風評の嘖々たる時に記されたる福音書は決して虛撰や揑造說を加へることは出來ない、例へば彼

の一世ナポレオンの事跡を百年後の今日虚構揑造して甘く世人を欺き果せやふかといふことを考へれば灼焉であらふ、況んや右馬鬻福音書は百年所ではない紀元三十六年の著でキリスト死去後僅々三年の後である。吾人は茲にナポレオンがイエズ、に就て論じた一言を擧げて讀者に示したい。即イエズ、は右の奇跡の外尚一度五のパンと二の魚とを以て凡そ五千人の腹に飽かしめたことがある、これはヨハネ福音書の六章に記してあるが其十四節より左の如くある、

『十四斯りしかば是等の人々はイエズ、の行したまひし異徴を見て、曰く、眞に世に來るべき夫豫言者なりと。十五是を以てイエズ、は、彼等が將に來りて、己を奪ひて王となさんとするを曉るや、再び己獨にて山に遁れたまひき』と、ナポレオンは之を以て或無信なる一將官に向ひて、鄕よ須らく予を信用せよ、予は人心を能く解せり、若しもイエズ、が神に非ずして唯人のみならば、王とせられざるがために逃るゝが如きことは決しておらざるべしと、如何にも左うではあるまいか、尚イエズ、の行ひたまへる奇跡の中に唯言を懸けて死者を甦らせたことも屢あつた、今其一を擧げむに、



路加傳七章に記していふ『十一其後イエズ、ナイムと云ふ邑に往けり、其弟子および大群衆かれと共に行く。十二イエズ、邑の門に近づける時、視よ死人ありて昇出さる、是は其母の獨子にして、母は既に嫠なりき、其邑の人々はなはだ夥しく之に伴ふ。十三主かれを見るや憫みて彼に言たまはく、哭く勿れと、十四やがて進み寄りて柩をおさへ、之を舁る者はたちどまれり、言たまはく、少者、我なんぢに言ふ興きよ。十五死者おきかへり、且言ひ始めたり、イエズ、之を其母に還し與ふ。十六衆みな畏怖をいだき、神を崇めて、曰く、我等の中に一大豫言者おこれり、神は其民に臨みたまへり。十七イエズ、の此風聲ひろがりてユデアに徧く、且その周圍の地に洽かり』と、猶太國内は勿論其四圍の國々にまで徧く知れ渡つた話は如何に巧みに筆を曲げても上手に虚僞を揃へても事實と違はせることは決して爲し得られぬ、殊に遠き時代を隔つでなく事跡のありたる僅かの後に於て猶更出來ぬことである、

吾人は右に引用したる新約全書を讀むで最も目に觸ることは其事實の全く有りの儘なることである、言辭に何の修飾も色彩もなく率直な質朴な筆を以て露骨に記したるも

のなることを感ずる、吾人は之を讀む毎に倏りに筋書的で實況の有樣を想像するに不足かと思はる、ほどである、世の文士小説家の筆とは雲壌の差である。（事跡以前後の歷史を參看せよ）

## 第十三節　耶蘇の御苦難と御死去

イエズ、キリストは斯く三年間多くの說敎と奇跡を以て猶太國を巡回したまひ、其三十三歲に達せらるゝと、一切人間を救ふために惡人なる吾人に代て態々聖血を流し給ふた、神なるイエズ、キリストが、言を以て感ずべき道德善行を敎え行を以て之を示し給ふたにも係らず、罪人の如く磔刑に處せられたといふことを解るには猶太國の當時の情況を少しく知らなければならぬ、

### 第一項　猶太の狀況

當時猶太國に行れた宗敎はモイゼ敎のみであつて、其中にも種々なる黨派があつて、



就中權力の隆んなるはファリゼオ派である、ファリゼオ派の敎師學者の黨は極めて輕薄で、人々の尊敬を受けんがために外貌に敎規を能く守り、內々には隨分、懈怠者であつた、猶太人は彼等の誤謬つた指導に依てモイゼ敎の眞の趣旨をさへ解し得なくなつたのである、例へば食前には必ず手を洗ふべしといふが如き輕微な規則をば嚴しく守り却て他人を我如く愛すべしなどいふ重要な戒を守らず、又彼等は口に敎の大切なることを稱へ、心には大傲慢大自負心を有つて神の聖旨には全く相反するが如きものであつた、此故にイエズ、キリストは最も嚴重な言を以て常に彼等を面責された例へば瑪竇傳廿三章に『一爾時イエズ、群衆と弟子たちに語りて、二曰たまはく、……十四僞善なる學士およびファリゼオ徒よ、嗟汝等は禍なる哉、長き祈禱をとなへて寡婦の家を呑滅ぼせば也、是に由て汝等最も嚴き審判を受けん。……十七愚にして瞽なる者よ、金が金を聖する聖殿か、孰れ大なるぞ、……廿七僞善なる學士およびファリゼオ徒よ、嗟汝等は禍なる哉、汝等は白く塗たる墓に似たり、其外部は人に美しく見ゆれども、內は死者の骨と諸〻の汚穢にて充てり、廿八斯の如く汝等も外は人に美

しく見ゆれども、內は僞善と不義にて充り』と記されたるが如き類である、斯く多衆の面前に於て嚴しく叱責されたから、傲慢自尊の彼等學士とアアリゼオ徒は大に恥ぢ且つ怒りてイエズ、を嫌ひ惡むこと甚しく、爲に何かイエズ、の缺點を探して訴へやふとの心底で始終其後に尾いて探偵した、而て彼れフワリゼオ徒學士の輩は種々に惡計を回らしたが到底も罪に陷る手段が無いと見たから此に於て終に彼を殺すの他道がないと考へて其相談をした、それは約翰傳十一章に記してある、『四十七司祭長等とファリゼオ徒ども議會を開きて、曰く、斯人許多の異徴を成せば、我等如何に爲すべきや。四十八若し彼を此まゝに怒しおかば、皆彼を信せん、而して遂には羅馬人來りて我等の處と、此國民とを殄滅さんと。……五十三是を以て彼の日よりして彼等はイエズ、を殺さんと議りぬ』と、又馬賽傳廿六章五節には『云らく、祝日には爲すべからず、恐くは民の中に亂おこらんと』と記してある、これ等を見てイエズ、キリストの殺されたのは全く僞善者なる學士ファリゼオ徒どもの念怒と嫉妬のためであることは略了解が出來るであらふ、





## 第二項 御苦難

イエズ、キリストは如何にして惡黨どもに捕へらるゝに至りしかといふに、そは十二の使徒の一人なるイスカリオテのユダといふが『四司祭長等及評議官等と共に議りて、如何にイエズ、を彼等に賣らむかと相議り、五彼等悅びて、彼に金を與へんと契約した、六ユダ承諾て、群集の居らざるに乘じてイエズ、を附さんことを窺ふた、』(路加傳廿二章)のである、吾主を敵に賣附さんとするほどな謀叛人ユダは三年間イエズ、に從つて居つた十二使徒の一人である、始め彼はイエズ、が所々巡敎したまふ間總ての會計を預つて居つた、それで約翰傳十二章六節に期く記してある『財嚢を司どりて其中に入りたるものを竊把るものなるに因りて也。』と、彼が主を賣るの重罪を犯すに至つたのは全く金錢に目が眩むだためである、シテ見ると吾人々間は傲慢、姦淫、貪婪などの私慾に捕虜とせられたならば如何なる汚穢い恥かしいことをも敢てするやふになるものである、實に恐れて愼まなければならぬ、故に人は己の私慾の深いこと

が多少にても解つたならば聖ポーロの言ふ如く『恐懼戰慄て己の救靈を需むべき』である（腓立比人に贈る書二章十二節）、ユダが斯る相談をしたる頃イエズ、は恰も『聖はエルザレムの聖殿にて誨へ、夜は出て橄欖といふ山に宿り』（路加傳廿一章卅七節）たまふて居られた、この橄欖山はエルザレムの近傍でヨザフワトといふ谿谷の向にあつて最も寂しい所故人民が知つて騒動するやふなことは無いと思ひ、乃で或木曜日の夜右のユダが劍と棒を携へたる兵卒等を引率てイエズ、を拿捕た、然しイエズ、が神であり乍ら人間の如く之を豫知することが出來なかつたかと不審するものは宜しく其時のイエズ、の聖言に留意ねばならぬ、曰く、然れども今は汝等の時なり、黒闇の勢なり』（路加傳廿二章五十三節）と、即イエズ、は一切人類を救ふために態々神の威光と全能を隱して、只弱い人性のみを現はすといふの意である、主が斯く捕へられたを睹て其夜卽に居りたる使徒等は怯懦にも皆逃げた、イエズ、は捕はれて直に大司祭の家に曳かれ、其處に居つた兵卒下僕どもより受けたる種々の恥辱打擲を堪えたまふた、而て其木曜日の晩『六十六民の長老等、司祭長等及學者等相集りて、イエズ、



を其會議所に曳きていふ、汝若しキリストならば吾等に告げよ、六十七イエズ、彼等に言たまはく、縱ひ吾汝等に告ぐとも、汝等は吾を信せざるべし、……六十九然れども今より人子は神の權能の右に坐せん、七十此に於て皆いひけるは然ば汝は神の子なるか、イエズ、言たまはく、汝等自らいふ如く吾は是なり、七十一彼等いひけるは何ぞ他に證據を要せんや、吾等自ら之を彼が口より聽けり』と路加傳廿三章に記してある、イエズ、が斯く自ら神の子であるといふた爲に猶太人は彼を死刑に處すべきものと思ふたのである、然しながら猶太は羅馬の屬國であつて、猶太の議會には民を死刑に處するの權利がない、それでイエズ、を羅馬の奉行なるポンショピラトの裁判所に曳きて彼を訴へたのである、然るにピラトは彼等の種々な訴を聽いて審いていふ『十四吾之を汝等の前に鞫べたれども、汝等が訴ふる所の件々に付ては毫も此人に罪案あるを視ず、……十六此故に吾は彼を宥さむ、と之を聽いた猶太人と敎師たちは騒いで、……廿一叫びていふ、彼を十字架に釘けよと、廿二ピラト三度目に又彼等にいひけるは、此人果して何の惡を行ひしや、吾は彼の死の罪案あるを絶えて視ず、故に彼を懲罰し

て釋さむと、廿三然れとも彼等大聲もて迫りて、彼が十字架に釘けらるゝことを求め彼等の聲愈高くなりし、廿四此に於てピラトは彼等の求むる所をして爲らしむべき裁斷を下し……』と路加傳に記してある、之を以て見るとポンショピラトは人民の騷擾して叛亂せむとを怖るゝ餘り無辜なことを知りつゝ義人を罪に處したのである、故に千九百年後の今に於ても權威を恐れ勢力を憚つて不義なる裁判をする事を稱してピラトの罪といふ、これとユダの二の名は開明諸國に於て最も破廉耻な罪名の如くなつた、

## 第三項　御死去

斯くイエズゝガ無法なる裁斷を下さるゝや、司祭、學士、兵卒の徒は彼に重い十字架を負はせて、同時に死刑に處せられた二人の盜賊をも彼と共に曳いてエルザレムの近所なるカルワリオといふ小山の頂上にまで往き、此處にイエズゝを十字架に釘け、彼の盜賊の一人を右に一人を左に十字架に架けた、之はイザイア書に記した豫言の通り『神なるイエズゝキリストが罪人と與に數へられたまふ』（五十三章十二節）たのである、尙又前揭豫言の如く兵卒がイエズゝの衣を籤にて頒け、膽と醋とを彼に飮ましめるなど精細なことまで豫言は悉く成就せられた、イエズゝが、斯く十字架に釘けられたは金曜日の晝の十二時頃であつたが此時彼は嘗て汝等を追害且誹謗ものゝために祈れ」と人々に誨へたまへる聖言の如く此至難なる善行を自ら行して吾人に示したまふた、即十字架に釘けられて、『言たまはく、父よ、彼等は其なす所の何たるを知らざれば、彼等を赦したまへ』（路加傳廿三章三十四節）と、仇敵なるものに對して斯く憐み爲に祈ることまでするといふものは開闢以來イエズゝの他一人もあるまい、然るに彼猶太人等は之を聽いて其心に如何なる感動を起したらふ、惡に固つたる彼等は毫も神みの情はない、『三十五衆民は起ちて觀居れり、長たる彼等と共にイエズゝを嘲りて曰く、彼は他人を救へり、若し果してキリストにて神の選びたるものならば、自を救へ、三十六兵卒も亦た彼を嘲り、進むで彼に醋を呈せり』（同章）とある、さて右の如く吾人の大なる罪を償ふて吾人を救ふためにイエズゝは其神性を態々隱し

て人性を以て苦難と死去を爲したまふた、然しながら世界を造りたまふた主なるイエズ、であるから、其御死去に際つては恐しい異徴が現はれた、即イエズ、が十字架に釘けられたは晝の十二時頃で其時までは日が常の如く耀いたが、奇なる哉空に一點の雲翳だに無いのに、次第に日の光は薄れて終に世界は暗くなつた、勿論これは日蝕のためでないことも明かである、何せなれば此時は滿月の時節であつたから、而て此闇黑はエルザレムのみでもなかつた、遠方なる國々までも及むだのである、此事は希臘のオリムピアデといふ年代記に錄されてあり、又同國アテナ府の有名なるアレオパゲといふ會議院の議員なるデイオニジオといふ人が之を見て、こは物質界の亂れかさなくば物質界の神の苦しみならむといふたのを觀ても分る、この議員は後に聖ボーロがアテナに來て宣敎したとき其說敎を聽いて古來希臘に行はれた僞神敎を棄て、翻然イエズ、キリスト敎に歸し、キリスト御死去後九十五年敎のために遂に焚殺された人である、而て此暗は午後の三後頃まで續いた、其頃になるとイエズ、は『四十六大聲に叫びて言ひたまはく、父よ、吾靈を汝の手に託すと、斯くいふて氣



は絕えた』(同章)其時地は震ふてカルワリオ山の頂上に巖隙が出來た、十字架の傍に居りたる兵卒の主長は『四十七其起りしことを視、神を崇して曰く、誠に此人は義者なり、四十八此光景をながめんとて集りをり、其起りし事どもを睹たる群集は皆その膺を拆て歸つた』(前同章)其夜議員なるアリマテアのヨゼフは何の畏るゝ所もなくポンシヨピラトにイエズ、の屍を請ふて、之を十字架より下し、布にて之を包みカルワリオ山の麓にある、洞穴の未だ曾て人を葬つたことのない塋に愼むで葬り大石を轉ばして其洞の入口を蓋ふて歸つた、

## 第十四節　御復活

『六十二翌日司祭長等及ファリゼオ徒等俱にピラトに詣りて、六十三申しけらく、閣下よ、憶起せば彼の敎唆者生けるときいへらく、吾三日の後に復活むと、六十四是故に三日めまで、命じて墳塋を守らしめよ、恐くは彼が弟子等來りて彼を竊み、民にむかひて言ん、彼死者の中より復活りたりと、然らば後の惑謬は前よりも更に惡からん

六十五ピラト彼等に言けるは、汝等に番兵あれば、往て知まゝに守れと、六十六彼等ずなはち去りて、番兵に墳塋を固守しめ、石に封印したり』（馬竇傳二十七章）と記してある、之に依て見ると彼仇なるファリゼオ徒どもが斯く心配するほどに死後三日めに復活るべしといふイエズ、自身の豫言が知れ渡つて居つたのである、而て彼ファリゼヲ徒及司祭等が墳塋には番兵を置き、其入口の石には封印するほどに注意したからイエズ、の屍は決して窃まれなかつた、若しイエズ、が其後果して復活たならば敵なる彼等の斯くまで氣を附けたることは却て立派にキリストの復活の事實なることを證明するのである、金曜日の夜から三日の、日曜日の朝までイエズ、の遺屍は此の如くに墳塋の中に葬られてあつた、其間十一人の使徒と他の弟子等はイエズ、が大豪傑で猶太國を再興して民を救ふであらふといふ誤まてる信賴の網が截れて落膽し、且は司祭等や、ファリゼヲ徒たちを大に畏れてエルザレム京城に潜むで居つたが、『七日の首の黎明にマリアマグダレナおよび、他のマリア墳塋を觀んとて來りしに、視よ大なる地震あり、主の使天より降りて近より、石を轉ばして其上に坐した、三其面容は電光の如く、其衣は雪の如し、四番兵之に怖れ慄きて死したる者の如くなりし。五神の使婦人等に答へて曰ふ汝等怖るゝなかれ、我なんぢらが十字架に釘けられたるイエズ、を尋るを知る。七彼は茲にあらず、其みづから言たる如く復活れり、汝等來りて主の置れし處を觀よ、八疾く往て、彼の弟子たちに其復活し事を告よ、八彼等畏れつゝも大に喜びて、速かに墳塋より出で、弟子等に告んとて、走り往ぬ』（馬竇傳二十八章）、これで見ると婦人等が墳塋に往かない中、天の使が現はれない前既に已にイエズ、、キリストは復活りたまふたのである、彼の天使が石を轉ばして墳塋を開けたのは最早イエズ、の屍は此處に無く全く復活たといふことを示す爲であつた、而て前に附けられた番兵共は何うしたかといふに『十一婦人等の去りし後、番兵の中或者は京城に至り、凡ての有りたることを司祭長等に告げた、十二彼等長老等と與に集りて相議り多分の金を兵卒に與へて、十三曰ふ、汝等いへ、彼が弟子等夜來りて、吾等の眠れる間に、彼を竊めりと。十四此事もし方伯に聞えなば、我等かれを勸めて、汝等を安全ならしめん、十五彼等金をとりて、其敎へられたる如くなしたり。是言ユデヤ人の

中に流布りて、今日に至る』(前同章)、と記してある、之を讀むで見ると吾等の驚くべきことが二つある、一は司祭等の工夫の俗に所謂首かくして尾かくさぬことである、彼等は番兵の眠れる間に弟子が來りて其屍を竊むだといはせたが竊まれるほどに前後不覺に睡りにおるものが何うして弟子等の竊むだといふことを知り得たか、己が睡眠中にありたる知り得べからざることを證據するといふ愚なことが何れの國にあらふぞ、如何に笑ふべきことではあるまいか、二は司祭長等の惡心が何處まで固陋であるかといふことである。番兵の明白なる事實の報告を聽いて彼等はイエズ、の復活を疑ふことは出來なかつたにも係らず、首尾合はぬやふな虛僞を造つてまでも其事實を揉消さむことにのみ心配して、毫も悔悛の情がなかつたといふことである、これは實にイエズ、がファリゼヌ徒を指して、『彼等若しモイゼと豫言者に聽かずば死者の中より復活るものありとも信せざるべし』(路加傳十六章三十一節)、と仰せられたる通りである、無宗教に固つたものは如何なる確證を聽くも、如何なる事を視るも、尚又死者の復活を親しく見るも、頑として感ずることも信仰することもなく、却て彼は未だ





眞に死に至らざりしものならむなど考へるであらふ、然しながら復活といふことは一時的、假死者が正氣に復るといふことゝは全然差ふ、先づ人の死といふことは靈魂と肉體の分れることであれば、復活とは離れたる靈魂が再び元の肉體に合することである斯く離れたる靈と肉を復び合するといふことは人力にも自然界の物力にも及ばないことなるは無論である、自然界を創造したまへる全能の神の他は不可能事である故に若しイエズ、キリストが御自分の力で復活たことが事實ならば、其神なることも事實である。

## 第十五節　御復活後

耶蘇の活復を疑ふことの出來ないやふ、イエズ、は　御復活後も直には昇天し給はずして其證據を益〻明かに確かにするやふ四十日の間此世に留まりて屢〻弟子達に現はれ給ふたのである、然し茲に吾人をして實に驚くほど訝からしむることは、兎角人々が靈界的天啓的のことに就て特に頑固に剛情であるといふことである、右にもいふ如

く司祭とファリゼオ徒等が案ずるほどキリストは自ら死後三日めに復活るべきことを屢々明言せられた、故に始終附從して居つた使徒等は猶更之を知つて居つた、されば其聖言の如く果して三日めに復活つたと聽いたならば之を信じて狂する斗りに歡ばなければならぬ筈ではあるまいか、然るに彼使徒等は却て反對であつたといふことは新人情を以てすれば、新約全書の著者が多少にても小說的筆を有つならば必ず事實を修飾して實況を裸體には記さなかつたであらふ、が使徒等は全く之と反して、自分等の何うして斯くまで頑冥に強情であつたかといふ事實を隱さず包まず全く明々地に記した、今其顚末の大略を陳べむに、彼の婦人等は墳塋を出て急ぎエルザレムに歸り十一人の使徒等の隱家に往き、今朝己等の親しく睹た る地の震ひたること、天使の現はれたること、番兵が懼れ慄いたること、墳塋にイエズ、の屍の失つたこと、これらを逐一告げたのである。然るに使徒等は愚昧なる婦人の臆語として毫も信じなかつた、然しペトロとヨハヂの二人は餘りに奇異な話であるから兎も角も墳塋に觀に往つた、他の九人の使徒は與に視に往かむとの心さへ起さぬほど冷淡に不信仰であつた、而て彼の二人は墳塋に到れば果せる哉婦人等のいふ如くイエズ、の屍は失つて只包みたる布のみが遺されてあるを視たけれども、未だ復活たとは信じない、唯其出來事を心に異むで歸つた。其後イエズ、がマリア、マダレナといふ聖女と又エルザレムの近傍にあるエンマオといふ邑に往きたる二人の弟子に現はれたまふた、彼等が斯く復活たるイエズ、を親しく其肉眼で視たことを聽いても尙使徒等は之を信じなかつた、然るに其日の夜使徒のトマは不在で他の十人の使徒等は猶太人を懼るゝまゝに窓戸を堅く鎖して一室に集つて居つた、其時忽然イエズ、は來りて其中に起ち『彼等の信なきと心の頑硬なるとを責めたまふた、こは彼等イエズ、を其復活りたる後に睹たてまつりし者どもの言ふ所を信せざりしゆえである』（馬谷傳十六章十四節）『廿四但し十二の一にてデイデモといふトマはイエズ、の來りたまへるときに、彼等と與に在らざりき、廿五依て他の弟子等彼に言けるは、吾等は主を睹たり、彼然しながら之に言けるは、吾は彼の手に釘の痕を視て、其釘の處に吾が指を入れ、且つ彼の脇に吾手を入るゝにあらざれば、肯て信せじ、廿六八日の後弟

子等再度内に會しトマも、彼等と與にありしが、戸の閉てあるにイエズ、來りて、中に立ちて曰く、汝等平安と、廿七節)くてトマにいひたまひけるは、汝の指を此にさしこみて、我手を視よ、汝の手を伸て我脇に入れよ、信ずるに吝なる勿れ、能く信せよトマ答て彼にいひけるは。我主よ、我神よ、廿九イエズ、彼にいひたまはく。トマよ、汝は吾を目睹たるに依りて信せり、視ずして信じたるものどもは幸ひなる哉』と(約翰傳二十章)イエズ、が斯く四十日の間現はれたまふたことは幾回もであつた、而も唯使徒に限つてのみでなく他の弟子に對してもあつた、例へば使徒ポーロがコリント人に贈る第一の書にイエズ、は、五百余人の弟子の僧にあるとき彼等に現はれたまへり。其弟子の中多くは今世に生きて居れり、されども既に死したるものもあり』(十五章六節)と記されたるが如きである、斯く屢現はれたまひし所以は二にして、一は前にもいへる復活を證するためと、一は後に陳ぶる如く漸く其智の啓けはじめた、信仰の固りかけた使徒等に種々のことを告げむがためである、(ラグ師著基督の復活參看)





## 第十六節　御昇天

イエズ、嘗て『吾は我が父汝等の父に、我が神汝等の神に昇る』(約翰傳二十章十七節)と仰せられたる通り、御復活より四十日めに凡百二十人の弟子等に現はれ、彼等を伴ふてオリベト山に行き『十八彼等にいひたまはく、天にても地にても一切の權は我に賜はれり。　故に汝等往きて萬國民を訓へ、父と子と聖靈の名を以て彼等を洗せよ。十九凡て我が汝等に命せし事を悉く守ることを彼等に訓へよ、視よ、我は世の終末まで日々に汝等と偕に在るなり』(馬竇傳廿八章)『十六信じて洗せらるゝものは救れん、信せざる者は罪に定められん』(馬爾谷傳十六章)』八されども聖靈汝等に臨に固りて後汝等能力を受け、エルザレム、ユデア全國、サマリア及地の極にまで、我證人となるべし』(使徒行傳一章)『五十斯くてイエズ、は其手を上げて、彼等を祝せしが、五十一彼等を祝する間に、彼等を離れて、天に昇られたりき、五十二彼等は拜し奉りつ、大なる歡喜を以てエルザレムに歸りぬ』(路加傳廿四章)、斯く新約全書に記さ

れてある、猶又馬爾谷傳十六章には『十九主イエズ、は彼等を諭して後、天に上げられ、神の右に坐したまふ』と記してある、此神の右に坐すといふは勿論比喩であつて、神には左右の差別はない、其意はイエズ、キリストの人性即其靈魂と肉體が神の榮光と又萬物萬民を宰る權威を得たまふたといふのである、日本に於ても近頃まで天子を補佐して、天下を司るものに左右大臣と名けたと同じである、依之見るとイエズ、キリストは神人であつて萬物、即靈界にも物界にも其頭である、萬物を宰る權あるものはイエズ、キリストの他にない、又イエズ、キリストは靈界の樞軸にして二者の連鎖である、其人性を以て物質界とも靈性界とも無限なる神とも立派に連合せられたのである、此故に聖書にはイエズ、キリストを工師の据えたる建築の首石に比べてある、『凡そ斯石の上に墜つるものは壞れん、また誰の上にも此石陷れば之を碎かん』（馬窶傳廿一章四十四）と、現世に於ては萬民が試みらるゝために自由の權を與へられ、斯の首石に從ふことも背くことも出來るとは毎度いふ所である、然し世渡りの試驗場に於て背いたものは嫌でも應でも死するや否惡魔の如く全能



なる彼の石によりて碎かれるであらふ、（基督眞蹟考參看）

以上の如くイエズ、キリストは御昇天を以て此世を去りたまふた、遺されたるものは十一人の使徒等である、ユダは主を賣渡したものなれば、己が罪の餘りに重大にして到底赦されないと思ひ失望して神の惑みを考へず、自ら縊首て死んだ、イエズ、の弟子は使徒の他に幾人あつたかは聖書に記してないから確かに分らぬ、雖然餘り多くはなかつたと思はれる、が然し假りに如何ほど多くあつたとしても既に前に明かに見らるゝ如く使徒も他の弟子等も皆蠢愚に頑硬にして其上怯懦にして敎を弘めるためにはならぬ、唯彼等はイエズ、を殺した猶太人を怖れて隱れるといふことのほか何も出來なかつた、故にイエズ、キリストが吾人と同じく只人間であるならば、間もなく弟子は亡なつて僅に弘め始まつた道も忽ち廢絕し、イエズ、キリストといふ話までも次第に消えて歷史上にも其名を見るは稀れなるに至るであらふと思はれる、往昔のソクラテス、アリストツト、プラトンなどは立派な校舍を設け其門弟も多つたが既に二千數百年前に其弟子は一人もない、之に反してイエズ、キリストは其御在世の時には

弟子は少かつたが御死去後に却て多數になつた、其道は公教と名けらるゝほど世界何れの國にも弘布せられて居る、これは決して常にあり得べきことでない、人力に及ぶべきことでない、何か奇なる理由の存すべきことである、其理由は何なるか、二つあ

る、曰く聖靈降臨と聖公會である、

## 第十一章　聖靈降臨

前章聖三位一體の玄義を陳べたる所にある如く、創造せられたる萬物に對して神の聖爲は三位倶に關係を有するものではあるが、然し特に一位に關係する聖爲がある、例へば萬物人間を創造せられたるは三位共に關係あること、だか創造は特に聖父の聖爲である、又吾人々間を救ひたまふも三位共に關係あるが特に聖子の聖爲である、又吾等を赦し、吾等を清め、吾等を聖にしたまふも三位共に關係あるが特に聖靈の聖爲である、何せなれば公教の目的或は善の根元は神に愛さるゝといふことである、而して聖靈は聖父と聖子より永遠に發出せらるゝ愛であるから、神の此愛を吾人に與へると



いふ聖爲は特別に聖靈に關はらなければならぬ、神の此愛が凡ての靈魂的の恩惠と善の根元であるから己の惡心に負けず善を行はむかためには左の如き祈禱を以て助力を願ふを常とする、曰く聖靈來り給へ、天より御光の輝燿を發ち給へ。……希くは汚れたるを清め、乾けるを潤し、傷けられたるを癒し給へ。硬きを融せ冷えたるを暖め、曲れるを直くし給へ。……と、

### 第一節　聖靈降臨

聖靈は斯く味みたる智の光、憶れたる情の熱、善の源であるから、イエズ、キリストは御昇天の前に聖靈を降すべき御約束を屢使徒等になされた、それは約翰傳に記してある『我名にて父の遣したまはんずる慰籍主すなはち聖靈はすべてのことを汝等に敎え且吾が汝等にいひたらむ凡てのことを汝等に悟らしめむ』（十四章廿六節）と又同傳に『七吾は汝等に眞を告ぐ、我の往くは汝等に益す、如何となれば我若し去り往かずば聖靈汝等に臨まじ、されど若し去り往かば我これを汝等に送らん。……

十三彼來るときは一切の眞理を汝等に敎えむ』(十六章)と記してある、斯く明かに約束せられたから使徒等はイエズ、の御昇天後聖靈の恩惠を只管に待つて居つた、處が果せる哉御復活後五十日めすなはち御昇天より十日めの朝使徒等が同じ室に集まつた時、『二俄に天より迅風の如き響あつて、彼等が居る所の室に充ちた、三焰の如きもの現はれ、岐れて彼等各人の上に止る、四此に於て彼等は皆聖靈に滿された』(使徒行傳二章)然るに彼の迅き音を聽いて衆多の人々は所々より來て彼の室の傍に集つた、其時ペトロは他の使徒等と出て彼等に對つて說敎していふ、五十日前猶太人の惡によりて十字架に釘けられたるイエズ、キリストは眞の救世主である、豫言者ダビデは『三十一豫め此事を曉るがゆゑにキリストの復活ることに就いて語りて、彼は陰府に遺ておかれず、又其肉體も朽果すといふた、三十二既に神はイエズ、を復活せたまふた、吾等は皆內證人である、三十三此故に彼は既に神の右に擧げられ、約束の聖靈を父より受けて、今汝等が覩る所、聽く所のものを吾等に充たし給へり』(同章)云々と恐れもなく陳べた、然るに『三十七彼等は之を聽いて太く後悔し、ペトロと他の使徒等に問ふていふ、兄弟よ、吾等は何をなすべきかと、三十八ペトロ彼等にいふ、汝等各〻悔改め、罪の赦を得んがために、イエズ、キリストの名に依りて洗禮を受けよ、然らば汝等も聖靈の恩惠を受くべし、四十尙多くの言を以て證して勸めていふ、汝等此の邪なる世より救出されよ、四十一其時この言を聽納しものは洗禮を受けた、是日弟子に加はるもの凡三千人であつた』(前同章)所がイエズ、キリストを信仰する人の斯く益〻殖えるのを視て、其後司祭等は使徒等を捕へてイエズ、の敎を弘めることを禁じた、時に『ペトロと使徒等答へていふ、人に從ふより神に從ふこそ爲すべきことである』(同傳五章廿九節)と乃で司祭長は彼等を苦刑に處して縱した、然るに『使徒等はイエズ、の名の爲に辱めを受けたことを歡むで、議員の前を去つた』(前同章四十一節)。

## 第二節　聖靈降臨の結果

視よ、二ケ月半若くは三ケ月前には司祭等ファリゼオ徒などを非常に懼れて主なるイ

エズ、キリストが捕へられたとき棄てゝ逃げるほど怯懦であつた使徒等が、今は何の懼れも憚りもなく而もエルザレム京城に白晝公々然と敎を宣べ、其捕へらるゝや司祭議員等に對して、汝等が無法に殺したるイエズ、キリストは復活た、彼は眞の救世主であると斷然答へて動せぬほど強くなつたといふは何故であらふか、尙其のみならず彼議員に對して苦れたる辱めを却て榮譽として歡ぶほどに其信仰の確固不拔なるに至つたのは抑も何の爲であらうか、讀者よ斯く僅かの間に全然別人の如く豹變たのは他でない、聖靈が彼等に與へたる大なる恩惠のためである、智の光、情の勢などの恩惠に因りてゞある、人間の智と情が斯くまで俄然變化するといふは死者の復活よりも更に奇異なることではあるまいか、無宗敎なるひとは之を讀むで事の餘りに奇なるを信じないであらふ、イエズ、の聖言に『彼の聖靈 即 眞理の靈、世は彼を見ず、彼を知らず、彼を受くること能はず』（約翰傳十四ノ十七）とある、ボーロが其意を解いていふ『聖靈の凡てのことを辯へるために靈的の光を有つべし、此故に物質的精神のものは決して聖靈のことを曉り得られず』（コリント人に送る前書二ノ十四）



と、

右に說く通り性來無智にして怯懦なる弟子どもを以て宣敎してキリスト敎が弘つたといふは天啓敎なる明證である、かゝる確證のある宗敎は公敎の他に一つもない、而て聖靈が其恩惠を以て弟子等を助けたまふことは初代布敎のときのみであつたかといふに決してさうでない、約翰傳十四章に『十六父は聖靈を汝等に與へ之を汝等と俱に永遠に留まらしめたまはんとす』と記してある、又イエズ、キリストは御昇天の時宣ふやふ『二十視よ我は世の終末まで日々に汝等と偕に在るなり』（馬資傳廿八章）と、其意は聖靈の恩惠すなはち其光と勢とを以て汝等と偕に居るといふ御約束である、公敎會が司祭フアリゼオ徒等の妨害あつたにも係らず立て始められたのは實に此聖靈の恩惠に因るのである、又公敎會の初代凡そ三百年間に十回の大迫害を受けたるにも係らず益〳〵其敎の流布つたのも聖靈の恩惠に因るのである、尙又公敎會の信仰と道德が固く維持されて毫も變動せぬのも聖靈の恩惠に因つてゞある、公敎會が若しも普通人間に因りて立てられたものならば千敷百年前に於て疾に破滅に歸すべき筈で

ある、然るに絶えず迫害られ妨害せられても斯くの如く確然として屹立し來つたといふことは是疑ひもなく神の聖爲であるといふの明證である、

さて右の如く公教は古に於て神の全智を顯はし、或は奇跡を以て全能を顯はしたことが屢あつた、然らば何故今日に於て神は斯る奇しきことを爲さらぬであらふかこれ教外者の常に口にする所である、然しながら今日に於ても奇跡は絶無といふ所では無い、唯古の如く頻々とないといふまでゝある、（現在奇跡の行はれつゝあることは實驗界迷信界に就て其一端を讀まれよ）而て古に多く今に少いといふには理由がある、何となれば公教を立て始めるときには何うしても之が眞正の天啓教であるといふ證據を示さねばならぬ、それには何か普通以上の所爲すなはち奇跡を以てせねばならぬ、然し今日に於ては既に千九百年の長年月を經過して其間には千種萬樣の證據とすべきものが澤山に累つて來て、之を以て優に天啓教たることを立證するに足るやうになつた、これ神は今日に於て特に奇跡を以て立證とせしめたまはざる所以である、恰も彼の苗木を樹るに際で初めには支木や灌水の保護が必要であるが既に成長せると



きは斯る配慮を止めるといふに同じである、然らば其奇跡以外の證據は何か今其最も優れたるもの一を擧ぐれば公教會の存立なる歷史である、心の正直にして慮の淺薄らざる人のためには此證據を以て充分である、殊に公會の旨義を能く辨へるためには公教會のことを知るは最大必要なことである、

# 第十二章　公教會

## 第一節　其意義

社會の狀態を以て考へれば、同一の目的を有する同心のものは必ず團結して一の會を設ける、而て其會の隆盛を期するためには堅固な規約規律を定め、且は之を統一する長を置く、而て其長たるものには重大なる權利を有せしむるが普通である、此規律規約と長たるもの、權利の確固なるほど其會も確固たるを得るものである、社會には農商工より銀行官衙等に至るまで團體をなすものは實に夥しい、が是等百般の團體中最も強固なる團體は何かといはば陸海軍といふ團體である、何がゆゑに強固で

か、他なし軍規の嚴肅なると、其將たるもの、權利の重大なるがゆゑである、人は斯く道理人情に從つて社會的物質的目的の爲にすら會を設け社を結ぶの要があるならば靈的目的のためには更に會を立つるの要がある、何せなれば目的の高尚遠大なるほど之を達するに至難だからである、而して公教者の立てる目的は超性にして來世に永遠なる榮福を得んとするにあれば社會的世間的目的の比でないことは明かである、而して又人間は個々なるに於ては弱く脆く智は味み易く精は捩れ易い、故に是非とも之が頭領ありて案内者指導者となり、來世の方に眞直に導かなければ危險である、之を以て眞理の源なるイエズ、キリストは其眞理に依り、御昇天を以て世を去りたまふ前已の教のために會を設立したまふた、聖公教會はすなはち之である、

## 第二節　其制度

如何に之を立て給ふたか、先づ信者を指導、補助、司宰者すなはち司祭（日本に神父或は靈父と呼ぶ）を立て、又信者と司祭とを指導し補助し司配するものすなはち司教



を其上に立てゝ末章に陳ぶる所の品級といふ秘跡を以て是等聖職にあるものに入用の權利を與へ給ふた、教會はこれで略立たのである、が是のみでは未だ決して公教會は存立しない、世界各國に弘まり往きて至る所に散在せる多くの教會は未だ之を以て一致聯合することは出來ない、今日本公教會の實例を擧げて解むに、明治十年に至るまでは我日本公教會は尚至つて微々たるもので教會數も甚だ少かつた、けれども其各教會毎には司祭一人あつて其教會を監督し、又東京には一人の司教があつて日本全國の各教會を總轄した、近くいへば當時は日本が一教區であつたのである、然るに其後漸々各地に教會數が增加したから全國をば四教區に分畫して、函館、東京、大阪、長崎に司教座を設け、各一人の司教を置いた、後明治二十四年に至つて東京司教座を改めて大司教座となし大司教を置いた、されば一言に教會といふても所に因りて其意味を異にする、成地例へば函館管轄內の仙臺にある信者の團體は之を仙臺教會といひて一の小教區とし、其頭領は一人の司祭である、函館管轄內にある右の如き小教區の總ての團體を之を函館中教區といふて其頭領は在函館の司教である、故に東京、大阪、

長崎、函館の四は何れも右の中教區である、此日本の總ての中教區の團體の頭領は在東京の大司教である、故に換言れば日本全國は一の大教區である、之を以て日本全國の信者司祭司教は連合して一族一團になつたのである、雖然こは日本國のみの連合にして未だ之を以て世界各國の各教會は連合し得られぬ、故に之は只日本教會といふべくして決して公教會といふへからざるものである、されば信者司祭司教大司教のみでは未だ世界を連合するに足らぬ、公教會とするためには世界各國の各大中小教區を連合しなければならぬ、之を連合するためには又之を總管する一人の頭領を要するのである、

## 第三節　其頭領

耶蘇キリストは御自分の教會に誤謬缺點不足等のないために其御昇天前に確然たる規律を定め給ふた、全世界の教會の頭領すなはち公教會の頭領は勿論主なるイエズ、キリストである、然し其御昇天後は此世に在さずして見ること能はざるゆゑ、其代理者として見ゆる頭領すなはち人間なる頭領が一人なければならぬ之を教皇或は教父ともいふ、



イエズ、キリストは如何にして教皇を立てたまふたか、そは馬竇傳十六章に記してある、『十三イエズ、は其弟子等に問ていふ、人々は人の子を誰なると謂ふや。……十六シモン、ペトロ答て曰く汝はキリスト、活る神の子なり。十七イエズ、答へて彼に言けるは、ヨナの子シモンよ、汝は福なり、そはこれを汝に啓示せしは、血肉に非ず天に在す吾が父なれば也。十八また我なんぢに告ぐ、汝は磐石なり、我この磐の上に吾が教會を建てん、地獄の門は之に勝ざるべし。十九我なんぢに天國の鑰を與へん、凡そ汝が地にて繋ぐ所は天にても繋がれん、また凡そ汝が地にて釋く所は天にても釋れん』と、其他又イエズ、キリストが御復活後現はれて、『ペトロに對ていひたまはく、吾が羔を牧せよ、又彼にいひたまはく、吾が羊を牧せよ』（約翰傳二十一章十五ヨリ十七）と此羔とは信者を比へ、又司祭と司教をば子を生む羊に比へて此羔も羊をも牧するものとなれといふのである、之に依て見るとペトロと其承繼者は

凡ての信者司祭司教大司教を指導さ司配る權をイエズ、より直接に承けたのである、教皇或は教父と呼ぶのは此故である、而て指導といふことはイエズ、キリスト教が傳へられたまゝに保つといふこと、詳細へば信仰上道德上に變易がないやふに堅く守らせるの義務である、又司配といふは司教大司教を立て、之を各教區に配置し任命し、且其教區を支配するために必要の權を與へるなどのことである、司教大司教は又斯く教皇より直接に承けたる權を配下の司祭に頒つ、之に依て司祭は己の教會を支配するために必要の權は直接に之を司教より承けるが間接には教皇より承けたのである、斯の如くして全世界の如何に隔離せる各所に散在する教會も一つの孤立するものなく皆悉く一つの根元より信仰道德規律權利を分承して居ること例へば人體の各機關が一つの頭腦に因て導かれるに同じである、此故に凡ての教會が一つにして毫も異る所なく誠に公教會たるの實を在するのである、要するに公教會はイエズ、キリストの定めたまふた頭領なる教皇に從つて眞のイエズ、キリスト教を信仰し遵守する人々の團體である、



## 第四節　其存續

尙又第一の教皇になられたるペトロはイエズ、キリスト御降生より四十二年に布教のため以太利の都なる羅馬に來り、其六十五年ネロン帝治世の時に教の爲に磔刑に處せられ殺された、之より羅馬府は其後代々の教皇が住地となつて今日まで連綿として統いて居る、現今（明治三十九年）の教皇はピオ十世と稱せられてペトロより實に第二百六十四代目である、公教會の如く確固不動の會は地上決して他に見ることは出來ぬ、其規律制度や教皇の權利等は嚴然として治定せられあるから、絶えず迫害を受くるも凡千九百年前より泰然として嚴の如く毫も動かない、誠にイエズ、キリストが『吾この磐石の上に吾が教會を建ん』と宣ひたる聖言の如くである。

右陳べたる所を讀むで教外者なる日本人は、或は斯く外國に在る頭領に服從するは祖國を危ふするものではあるまいか、頭領たるもの、權力を得るほど祖國政府の權力が弱まるものではあるまいかなどゝいふ杞憂を抱くものがあるやも知れぬ、雖然毫も懸

念するに及ばぬ、如何となれば教皇の權力は靈的に屬することのみである、來世超自然の目的を達せしめむがためのみに存する權力である、而て世界孰れの國に於ても政府の權力は有形的物的のみに屬するものである、國家の安全、國家の保護、國家の隆昌等を期する所謂超自然ならざる目的のためのみに存するものである、尤も此靈的權利と物的權利の範圍其分界に至て紛議の種子となることもある、雖然日本及北米合衆國の如きは政府が眞理に從て全く信仰の自由を與へあれば決して兩者の間に衝突の餘地がない、イエズ、、キリストの聖言にも『然らばセザルのものはセザルに歸し神のものは神に歸せ』（馬竇傳廿二章廿一節）とある此セザルとは王或は政府を指したのである、使徒ポーロは之を釋いていふ『凡ての人々は權を有てるものに從ふべし、そは神より出ざる權なく、凡ある所の權は神の立てたまへる所なればなり、此故に權に逆ふものは神の定に背くなり、背くものは自ら其罪の罰を受くべし』（羅馬書十三章）と、以て教皇の有する靈的の權力は如何なるものか略知り得らるゝであらふ、（教皇と現社會、羅馬教皇等の書を參看せよ）



公教會は右にいふ如くイエズ、、キリスト教を信仰し遵守する人々の團體であつて『イエズ、の他別に摘救がない』（傳徒行傳四ノ十三）ならば公教會に入る人のみ救靈と決めねばならぬ。

## 第五節　其四の徵號

社會に於ては如何なるものにも摸造がある、眞のキリスト教會は唯一のみだが、僞キリスト教會は夥しくある、故に此眞僞を撿竅るに何か異徵がなければならぬ、其異徵は四つある。

第一、先眞のキリスト教會はイエズ、、キリストより直接に教えられ命ぜられたる使徒等によりて開かれたるものなることは欵ひない、即使徒より直傳の教會で、キリストより直接に傳來したと同じである、之を公教の使徒傳來といふ道理なる異徵である。

第二、使徒等より直傳の教會は決して多數でなく唯一でなければならぬならば、何時でも、何處でも同一の信仰、同一の道德、同一の秘跡、同一の祭式、同一の祈禱を有

し、又同一の頭領に從はねばならぬ、之を公教の一或は同といふ、キリスト教會が純一なる神の教會ならば此一或は同なる異徴はこれ又最も道理なるものである。

第三、使徒等よりの直傳はキリストより直傳に同じで、イエズ、キリストが全善なる神ならば其教會の教訓道徳規則秘跡祭式祈禱などは勿論聖なるものでなければならぬ、故に之を愼むで遵守する人は必ずや善人になる、若又之を完全に遵守すれば善人なるのみならず聖人になる、之を公教の聖といふてこれ又道理なる異徴である。

第四、イエズ、キリストは救世主である、當に或一國を限るでなく世界の救主である。故に其教會は決して或一國のみの教會でなく世界の教會でなければならぬ、尚又御降生當時の人々のみを救ふでなく、開闢より世の終末に至るまでの一切人類の救主である、故に或時代を限らず絶へず其教會が存在せねばならぬ、此の時と處に關せざるを教會の公といふてこれ又道理なる異徴である。

眞正のキリスト教會は以上四の異徴の中聖公教會と名づける、聖公教會の他に決して此四の異徴を有するものはない、然るに玆にキリスト教と稱する多くの新教派中最多數の信徒を有するアングリカン派即英國監督教會は吾が聖公教會の名に紛はしい聖公會といふ名を自ら僭稱して世人を惑はすがゆゑに一言注意して置く（詳論はリギヨル著教會を看よ）

## 第十三章　死後の事

### 第一節　死後の三所

如上陳べたる所に依て、現世は神が人間を試みたまふ所にして、人は現世に於けるときの心と行の如何に因り來相世當の報酬を得る、すなはち善なれば神に愛せられ神と合併して永遠の榮福を受ける、之を終りなき生命とも永遠の榮譽とも尚平俗いへば天國の賞ともいふのである、之に反して人が惡なれば神に勘當せられ、永遠なる不幸と苦痛を受ける、之を終りなき死とも或は永遠の火ともいふて俗に所謂地獄の罰である

而て至つて輕微な罪を犯したもの、或は大惡重罪人でも之を謝し既にイエズス、キリストの聖血に因りて赦され、只其罪の償を未だ全く果さぬといふやうなものは死後如何になるべきか、これ等のものは決して神より永遠に勘當せられべきものではない、さりとて輕罪或は赦されたる大罪の償を果さぬに因りて尙汚れある靈魂なれば、全き善、全く潔き神と合併し得べきものでもない、是等のものは是非とも神に合併する前に於て潔きものとならなければならぬ、故に是等の靈魂が罪の償を果し潔くせらるゝ爲に、暫く神に離れて苦痛を受ける、而も其苦痛は償を終るまでの間である、されば其期間の長短は償の多少に因るのである、而て既に其償を果せば天國に入り永遠に神と合併する、斯く苦痛を以て輕罪或は赦されたる大罪を償ふ所を煉獄といふ、之に依て死者の靈魂の行くべき所は三にして、天國地獄の二は終りなく煉獄のみに終りがある。

## 第二節　諸聖人の通功

今世に生存する吾人は既に地獄に墜ちて神より永遠に勘當せられたる惡人等の靈魂とは關係が全く截斷てしまつた、彼等は恰も萬物の渣滓の如きもので最早一顧の値もないが、然し今天國に在る善人等の靈魂及償ひのために煉獄にある善人等の靈魂と吾人の關係は何うであらふ、彼等と吾等とは全く同一なる超性的目的を以て造られ、既に天國に入りたる靈魂は其目的を全く達し、又煉獄にある靈魂は暫時の後其目的を達せむとしつゝあり。

又吾等は其目的を達せむとの決心を以て今現に社會に奮鬪しつゝあるものである、之に依て見ると彼等と吾等とは一族兄弟の如きものである、此大なる關係を諸聖人の通功といふ、即彼等と吾等とは經行を以て相互に佑け合ふて居る、詳言ば今天國にある諸聖人、就中吾等の親類朋友にして在天のものは吾等を忘れて今社會に居るものを願みぬといふことは決してない、却て吾等を同一に助るやふ種々に心配して神に希求し吾等を守護して居る、又煉獄に於て罪を償ふて居る靈魂は最早功を立つることが出來ないから唯苦痛に堪えて之を償ふの他道がない、然るに吾等は今試みの社會に居るか

ら日々如何なる功をも積み得られる、而て吾等自ら積みたる此功をば之を彼の煉獄にある靈魂に讓り、之を以て彼等の償の時期を短縮し或は全く赦し給むことを希願することが出來る、然し神は吾等の主であつて其願を嘉納たまふも嘉納たまはぬも御自由である、雖然斯く經行を以て吾等が煉獄にある靈魂を助け得るといふ有難い聖慮を啓示したまふたから其願を聽き給ふべきは確實である、此經行の中彼等靈魂のために最も大なる功得あるものは後章に陳ぶるミサといふ聖祭と葬式の時の祈禱である、故に公教の葬式は他教の如く唯人目を飾り或は自ら慰むるに過ぎない虛禮でなく全く死者の靈魂のためにする聖式である、吾人が來世に往た靈魂を助ける權力を神より與へられたといふことは實に感ずべき有難い嬉いことではあるまいか、神は善人等の眞實の父なれば善人は皆兄弟一族の如きものであるから右いふ所は誠に道理なことゝ思はれる、尙又其のみならず現世に活ける信者等は皆兄弟の如きものゆゑ同じく經行を以て相互に助けることが出來る、即冷淡不信にして其救靈の危ぶまれるものゝために改心するやふ、或は熱信になるやふ、神に願ひ、己の積みたる功を彼等のために神に献げ



或は特別な願ひ、苦行をわざ〳〵守る等のことを以て他人を助けるなど、これ皆諸聖人の通功の中である、斯の如く天國と煉獄と現世にある善人等が一なるほどに連合せしむる宗教は世に有難いもののみならず全く唯一單純なる神の考へたまへる高尙な道なること疑ひない、使徒約翰の第一書四章に『八神は卽愛なればなり』とある、斯く神の聖心は愛であるから其道も愛教なのである。

サテ右陳る如く人が死すれば其行に因りて靈魂は天國或は煉獄或は地獄に行くが、然し人間といふものは靈魂のみでなく肉體を有つて居る、靈魂肉體の合併したものである、此を哲學にも法律にも宗教にも人格といふ、而て右六十五頁に詳論せる如く人の行、其責任は全く人格の負ふべきもので靈のみにも肉のみにもない、此故に完き義に因て審判すれば人格の爲したる行なれば靈魂のみ受くる賞罰は完全なる適當なるものでない、靈肉共に受けねばならぬ、若し然らざれば其義は少しく公平を失するものである、然るに神は無限物にして完全義であるから苟も些少なりとも不公平な義を以て萬民を審くことは決して爲し得られざる所である、雖然アダム、エワが犯した源罪の

罰のために萬民は死すべく定められた、既に死すべく定められたからは、其死せる肉は如何にして罰し得らるべき、死とは靈魂と肉體の分離である、靈魂が生命の本元ならばこれと分離せる肉體は其能力も働きも消失して腐敗する、總ての有機體の如く其組立てられたる數多の元素に分解される、然し分解せられた元素は決して滅ずることはない、處が天啓に依れば天地に始ありたる如く終りがある、そは馬竇傳廿四章三十五節に『イエズ、曰く天地は廢らん』と記されてあるを視ても知らるゝ、又使徒ペトロ第二書三章に『十されど主の降臨の日の來ることは偷盜の夜來るが如くならん、其日には天に大なる響ありて去り、體質悉く焚毀れ、地と其中にあるものみな焚盡ん、……』……

されど吾儕は其約束に因りて新き天と、新き地を望み待てり」と、記されたるが如くである、而て此世界の終末に際ては開闢より死んだ人々は皆復活る、即腐敗したる肉體、分解したる元素が再び結合して肉體となり靈魂と合併して元の人となるのである、又此時に至れば再び死といふことがなく永遠に人で居る、而て斯く復活た肉體は靈魂と共に賞或は罰を受ける即肉體と靈魂と偕に天國或は地獄に行くのである。



## 第四節　私審判

道理より見れば賞罰するには先づ誰を賞し誰を罰するやを決めねばならぬ、此決めるといふことは其人の行爲を審判して後でなければならぬ、故に死後の審判はあるべきものである、然らば審判するものは誰なるや、いふまでもなく神である、然し無形なる神でなく、神なる人イエズ、キリストである、これは『天にても、地にても、凡ての權は我に賜はれり』（馬竇傳廿八ノ十八）といふイエズの聖言に從ひ其神性のみならず人性をも以て世界萬民を審判するのである、而て人が死するや否直に各自がイエズより審判される、之に因て其靈魂は天國或は地獄或は煉獄に行く、之を私審判といふ、これは人が各自個々に受けるからの意である。

## 第五節　公審判

私審判を以て人は各其爲したる善惡に相應なる賞罰を定められる、斯く人々の永遠の狀態が決まつたならばそれで可からふが、決して可くない、私審判を以てのみでは人の受くべき賞罰は完全でない、是非肉體も共に賞罰されねばならぬことは前いふ通りである、其他又私審判わるのみでは神の完全義其人類に對する無限の憐、猶特に救世主なるイエズ、キリストの光榮が全く現はれぬ、神人なる救世主は世界萬物の要でありながら公然打擲苛責など多くの恥辱を受け二人の盜賊の間に十字架に釘けられるほどに侮蔑され嫌はれ棄てられた、而も千數百年前の昔のみならず、今に於ても昔の惡人等と同じく、心を以てイエズ、キリストを侮り嫌ひ棄てるものが澤山ある、之を信じ敬ひ拜し愛するものは却て少い、世の終末まで斯くの如くであらふ、何せなれば始終善に抵抗するといふことが惡の性質だからである、されば何うしても最後には世界萬民に對してのみならず、諸の天使諸の惡魔に對しても神人なるイエズ、キリストが其無限なる權力、勢威、光榮を明に現はさなければならぬといふは道理である、此故にイエズ、キリストは天と地とが焚毀れざる前現はれて復活た世界萬民を



悉く集めて公けに審判するのである、斯く各人同時に審判せらるゝゆゑ之を公審判といふ、又斯くイエズ、キリストが世の終末に現はれたまふことは之をイエズ、キリストの第二の降臨といふ。

神人なるイエズ、キリストは凡千九百年前人を救ふため其模範となるため謙遜清貧と人性の弱いことを有つて御降誕せられた、之は憐みの御降誕である、之に反して世の終末に萬民を審判するためには大なる權威と光榮を以て天降りたまふ、其時は憐みでなく神の正義を行ふといふ恐るべき聖慮を以てせられるのである、此公審判は吾人には到底想像出來ぬほどな恐しい審判であらふ、如何となれば其時審判せられべきものは世界萬民のみならず、彼等を惡に誘ひたる衆諸の惡魔も亦與に審判されるであらうからである、即使徒ペトロ第二の書に記て『神は曩に罪を犯せし天使を赦さず、彼等を地獄に投入れ、彼等をして審判の時を待たしめたまへり』（二章四節）とあるを見て知られる。

以上陳べたる世の終末のこと、イエズ、キリスト第二の降臨のこと、及公審判のこ

とは明瞭なる言を以て啓示されてある、路加傳廿一章にイエズ、種々のことを告げて後いひたまふに『廿六節て日と月と星とに兆現はるべし、海と波との溯洚に因りて、地上には諸國民狼狽へ亂れて、艱難熾なるべし。廿六人々は全世界に將に來らんとする處の事どもを懼れ且期するに因て相悴憔ん、天上の權能震搖さるれば也。廿七時に人子が大なる權能と威光を以て雲に乘りて來るを見ん。廿八但し此等の事の起り始めたる時には、汝等仰ぎて首を翹よ、汝等の救贖ること近ければ也』と、又馬竇傳廿五章にイエズ、いひたまふに『廿一人子は己の威光を以て諸多の天使と共に來るとき、其威光の座に坐したまはん、廿二然して萬民其前に集るや、牧者が羊と山羊を分つ如く、彼等を相分ち、廿三羊を其右に山羊（惡人等）を其左に置かむ、廿四時に王其右にあるものにいはむ、吾が父に祝せらるゝものよ、來りて、世の始より汝等のために供へられたる國を得よ、……四十一斯くて左にあるものにもいはむ、咒はるゝものよ、吾を離れて退け、惡魔と其使共のために供へられたる永遠の火に入れよ、……四十六彼等は永遠の苦痛に入り、義人は永遠の生命に入らん』と吾人が各其永遠の幸福或は永遠の不幸の定まるべき社會の感動し易き實驗は全く此時を以て終局とする。（死、審判、天獄、地獄、永界等の書參看）



右は大略に過ぎないが皆是れ天啓に依りて分つたことであれば公教者は確く信ずべき所である、唯物論者や唯理主義者、萬有神教家などが之を讀むだならば定めて嘲笑を以て迎へるであらふ、心を金錢物質にのみ奪はれたる無宗教家或は遊嬉淫樂に耽る放蕩家ならば斯る說は最も其忌む所であるから全く棄てゝ顧みないであらふ、唯ポーロの言の如く未だ心の肉に化せず多少高尙の說を考へるほどの人のみが幾何か感ずるであらふ、如何となれば右の說は義に背く所、理に合はぬ點は一もないからである、只其說は總ての學問の奧義に於けると同じく餘りに深くして人智に超越ることが多いといふのみである、而て首章に論じたる天啓と超性の二のことを能く了解せぬならば斯る深いことは決して會得し得られないにあるとすれば公教のいふ如くに神と人間との關係が近い理由はない、例へば人間の造られた目的が單に自然界のみ之に反して人間存在の目的が全く超自然にあるとすれば、神の托身、救世、死後等のことは、たと

ひ玄義で解し兼ぬるといふても此高尚なる
如く此超性的目的を知るの道は唯一條にし
深き謙遜を以て其聖い光と力を祈求する道のみである。

●避くべき事と守るべき事

## 第十四章　善と惡

人間は單に智を以て思考するといふ働きのみならず情を以て愛し嫌ひ、肉體を以て實行するものである、されば人は其智に因りて神の言　卽　天啓敎を信ずるといふとのみでは足らない、其上に情と　行　とを以て神に遵はなければならぬ、すなはち神の立てたまへる規則を守らねばならぬ、其總ての規則を約すれば舊約の詩篇に記せる如く『惡を避けて善を爲せ』（三十三ノ十五）といふに止る、神が全智全善であるから其命じたまへる總てのことは道理と善のみである、又其誡しめたまふ所は不道理と惡のみである、故に神の命令を守ることが善行にして之に背くことが惡行である、尙一步進



めていへば全善なる神の性質に合ふ所爲が善で合はぬ所爲が惡である、斯く善惡の論は極めて解り易い、其別は全く無限物の性質より出るのである、此故に社會の習慣より出るとか或は人の立てたる法律より出るなどいふ種々なる妄說があつても其差別は古來確焉として變更せぬのである、斯く神の性質に合はぬ所爲すなはち神の規則に背くことが惡或は罪である、而して罪には二種がある、一は開闢に於てアダム、エワの犯した罪が人類一般に傳はり、自ら犯したものでなくも此罪の傳はりによりて吾人は潰れた、之を源罪といふ、二は吾人が各自犯すの罪、詳言ば思、望、言、行を以て犯すの罪、之を自罪といふ、而して如何なる國に於ても其法律に罪の輕重を別けて刑に死刑の重きより罰金の輕きまで種々なる階級がある如く、又親子の間に於て單に叱責だけに止まる小なる不孝、或は勤當せられるほどの大なる不孝のある如く、神と人間の關係に就ても大事に就て知りつゝ神に背くの大罪もあり又小事に就て神に背き或は大事に就ても小事と思ひ誤りて背くなどの小罪もある、而して大罪の罰は神に勤當される、故に大罪は其赦を受けずして死ぬると永遠に被棄人となつて地獄に墜る、

又小罪の罰は現世に於て何か苦痛を受けるか或は死後煉獄に於て苦痛を受ける、（倫理の實行參看）

## 第十五章　十誡

來世の救靈を受ける爲に是非とも守らなければならぬ規則は十であつて之を神の十誡といふ、十誡は神がアラビア國のシナイ山に於てモイゼといふ聖人を介して猶太人に親しく授けたまふた規則である、前にも委しく陳べたがイエズ、キリストの御降生に當て此モイゼ敎は廢されたが、十誡のみは公敎に遺された、此十誡は要するに一は神を愛し、二は神を愛せむがために他人をも愛さねばならぬといふ二の誡に歸する、今之を一誡つゝ擧げむに其第一より第三までは神に直接關係するものである、

第一、主なる吾は汝の神なり、我の外汝に神あるべからず、

此意は一體なる無限物を除くの外禮拜すべきものはない、故に何物にもせよ被造物を拜するは取りも直さず數多の神があるといふ意にして一體なる神を無みするに同じである、

直接に神の無限德に背くものであるから如何なる罪にも比べられぬ重罪である、故に如何なる尊貴のものでも神の他決して禮拜してはならぬ只深く尊敬するに止めばならぬといふのである、尤も茲に禮拜といふは宗敎的意味にして拜むことをいふのである、世間的敬拜といふことゝ全然意味が違ふことを承知せねばならぬ、故に例へば諸多の天使聖人は勿論聖母マリアに至るまでも神より大なる恩寵と權力と光榮とを與へられたるもので唯深く尊敬すべきものであるので決して禮拜してはならないのである、

第二、汝主なる汝の神の名を濫りに呼ぶ勿れ、

此意は神が一週間に一日を安息日と定めたまふた、此日は勞働を休みて神を禮拜する理由なく尊敬なく之を用ひてはならぬ、又其御名によりて惡き誓約、咒詛其他すべて瀆れたることを爲すを禁ずるといふのである、

第三、汝安息日を聖日とすべきことを記憶ゆべし、

此意は神が一週間に一日を安息日と定めたまふた、此日は勞働を休みて神を禮拜する日なるがため聖日といふ、聖日は舊約時代には土曜日であつたが、新約以來日曜日に

定めた、それはイエズ、キリストの御復活と聖靈降臨とが日曜日であつたからである、（對神の義務參看）

以下第四誡より第十誡までの七は直接人に關係するもので卽ち

第四、汝父母を尊敬べし、

此意は極めて廣く、凡て恩義と權力ある尊屬に順ふことを命ずるのである、故に父母のみならず親族政府敎師主君など皆其中に包含されてある、而して是等の中最も恩の深いは父母なるがゆゑに其最も重い父母を擧げたのである、又此誡の命ずる所は獨り尊屬に對してのみならず卑屬に對して守るべき義務をも含むで居る、例へば父母ならば其子女を愛養し、分に應じて敎育し、自らは言行を愼で其鑑となるなどのことを命じ、又望まざるを强て結婚せしむるを禁ずるなどである、（理想の家庭、余の家庭觀等を參看せよ）

第五、汝殺す勿れ、

此意も亦た汎くして、凡て他人の靈魂と肉體に害ある爲を禁ずるのである、故に喧嘩、



口論、惡口、返報などは勿論凡て他人又は己に對しても理由なくして怒り傷け殺す等は禁ずるのである、勿論理由あれば奴僕も殺傷も敢て妄げない、例へば神父母國王又は戰爭に敵を殺すなどは理由あるのみならず國などの辱めを受けたるを怒り、又は職務上當然すべき貴き務である、

第六、汝姦淫する勿れ、

神が人間に生殖作用あらしむるのは其類を繁殖せしむるためである、而て人間は最も色情に耽り易いから神は夫婦なる確い規則を立て、其繁殖方に定め給ふた、これは道理なるのみならず自然界すなはち神の攝理の秩序である、故に凡ての此道理と秩序に適はざる思望行は不道理不秩序にして姦淫である、此罪は極めて犯し易いからすべて姦淫に流れ易いことは悉く禁じられる、例へば卑猥なる繪畫を視、淫靡なる歌を聽き、汚穢なる小說を讀み、不潔なる演劇を視ることは可くない、これ等のことまでも愼まぬならば信仰を貞潔に保つことは出來ない、何うしても姦淫の不潔に瀆され

る、（婚姻と離緣（リギヨル著）を看よ）

第七、汝盜む勿れ、

偷盜とは凡て他人の金錢財寶に損害を與へることである、故に盜賊は勿論不正の商業、高利に金を貸す、借りたるものを返さゞることは皆此誡の禁ずる所である、

第八、汝僞證する勿れ、

此誡は總て口を以て他人に損害を掛けることを禁ずる、故に詐欺は勿論讒言、誹謗邪推、及故なく他人の缺點、過失を吹聽するなどのことを禁ずるのである、

第九、汝人の夫妻を戀る勿れ

姦淫に關することは第六誡に禁じられてあるが、此誡は特に姦淫の思望を故意と起し、或は之を娯むなどのことを禁ずるのである、何故なればイエズ、の聖言に『十八口より出る者は心より出れば、是人を汚すなり、十九心より出る者は惡念、殺害、姦淫、野合、偷盜、僞證、竊是なり、二十斯等は人を汚す者なり』……（馬竇傳五章）とあり又『十八されど我汝等に告ぐ、凡そ慾念を懷きて婦を視る者は心の中にて既に之と姦淫したるなり』とある、（同傳五章）要するに凡ての惡は心より出るから心は凡ての惡の根である、故に善を行ひたいならば此惡の根まで抑へなければならぬ、

第十、汝人の所有物を貪る勿れ、

此誡も右と同じく第七誡に禁じられたる惡すなはち他人の財產に損害を掛けるの根本なる貪る心を抑へねばならぬといふことを示したのである、（對人の義務リギヨル著參看）

以上十誡は神の直接に立てられたる性法的倫理的誡命であるから人々は愼むで遵奉しなければならぬ、之を背いて可い理由は厘毛も無い、貧富貴賤に關せず、健康病身に係らず、如何なる時如何なる處でも守らなければならぬ誡である、此點に就ては次に陳べる聖會の誡とは大に異る所がある、

## 第十六章　聖公會の六誡

右の如く十誡は人たるもの、罪たるべきことの大綱を擧げたもので細密な意味にまで

は及ばぬ、分けても第三誡の汝安息日を聖日とすべしといふ信者の守るべき誡に於て何日が安息日であるか、其日には如何なる行をなし如何なる勤を以て聖日とすべきやなどの細密なことが分らない、これ等のことが明かでなければ信者は安全に教を守ることが出來ない、此故に信者を指導し支配する權をイエズ、キリストより承けたる聖ペトロの後繼者なる教皇は昔時より其細かなことを規定せられた、それは六にして聖公會の誡と名づける、即ち

第一誡に於てはイエズ、キリスト諸聖人の歷史に於て有難い貴い日がある、例へばイエズ、の御誕生、御死去、御復活などの如きで此日は全く定まつて居つて之を祝すべきものとした、斯く定まつた祝日を守ることは日曜日の如くせねばならぬといふのである、

第二誡は凡ての日曜日と又右の如き祝日に當りてはミサといふ聖祭を拜聽せねばならぬといふのである、

第三誡及第四誡は悔悛と聖體といふ二の秘跡を領けるに就ての規定で即信者は少くとも毎年一回此秘跡を領けねばならぬといふのである、

第五誡と第六誡とは小齋と大齋といふ勤を守るべき規定で、小齋とは食事に鳥獸の肉を忌むこと、大齋とは鳥獸の肉を忌むの他一日に一食の外せぬことである、何故信者が斯る勤を守るべきかといふに、先第一は吾人の主なる聖き模範龜鑑なるイエズ、キリストの行爲に倣ふのである、新約全書に依ればイエズ、キリストは自ら斷食の大齋を守られたことがある、尙又人の邪慾は多く肉體の血氣映盛なるより強く起るのである、故に時々苦行を以て肉體を責めねばならぬ、斯くして肉體と五官とを抑制せねならば決して邪慾を抑へることが出來ぬ、これ大齋小齋の必要なる所以である、

以上六誡は神の十誡と大に異つて、重大なる理由の存する時と場合に因りては之を守らなくとも可い、例へば幼童、病人は大小齋共に守るべき理由がない、又日曜日祝日などに當りても教會のない地、或はミサ聖祭のあらざる處に住む信者、或は又教會がありミサ聖祭が行はれる所に於ても、病氣に罹りたるとき、或は留守居をなすなどの信者はミサ聖祭を拜することが出來ない、斯る當然の理由ある信者は六誡を守らず

も可いのである。之に反して神の十誡は之を守らずとも可いといふ理由は如何なる人にも如何なる場合にも決して無い、偽神を拜み、不孝をする、偸む、姦淫する、詐欺するなどのことの可いといふ理由は時處に關せずあるべからざることである、知りつつ十誡を背かむよりは寧ろ殺さるゝ方の勝ること萬々である、

## 第十七章　超自然の恩寵

上來陳べたる所に於て公教者の信ずべきこと、避くべきこと、守るべきことの大要は之を盡した、然るに斯くも確固不動に定立されたる宗教道徳を吾人は果して完全に守り得らるゝであらふか、

社會の有様を一般に觀察するときは數十年前より日を追てます〳〵人間が我儘勝手[illegible]成り、何物をも己の自由に研究し何物をも疑ふやふになつた、唯理主義、唯心主義[illegible]懷疑主義、唯物主義、進化主義等は人間自然の驕慢心に投ずるの説なるがゆゑに、[illegible]めて迅速に流布易い、斯る説の流行に伴ふて學説らしき假面を被ぶれる理窟を生じ[illegible]



天啓或は超性的宗教をば論難攻撃することは甚だ少くない、故に能く〳〵理解し會[illegible]したる堅固な信仰を有する人でなければ愈無宗教或は無神教に滑り易くなつて來た[illegible]其他尙是等の主義が流布に從つて、善惡の差別は漸次曖昧に流れ、社會に行はる[illegible]德は益振れるに至る、今世界各國に日々刊行せらるゝ新聞、雜誌、書籍、及演劇[illegible]繪畫等はあらゆる方面より社會を腐敗せしむるといふことは、最も明白顯著なる事[illegible]である、斯くまで智の振れて情の腐りたる社會に捿む人が公教の如き嚴格なる宗教をば終生顚かずに奉じ得らるゝであらふか、斯くも堅固な貴重な潔白な超性教を信ずること及守ることは如何なる英傑でも人力を以ては及ばぬことである、超自然教を守る爲には何うしても超自然の恩寵を神より受けねばならぬ、若しも神が超自然の恩寵を與へ給はぬならば吾人に超自然の目的たる終りなき救靈を得るものは一人もないであらふ、而て神の憐は無限であつて善人は勿論惡人までをも救贖むとの有難い聖慮で吾人々間に超自然の恩寵を賜はるのである、其超自然の恩寵に二種ある、

## 第二節　時有の恩寵

一を時有の恩寵といふ、之は人が必要ある時のみに受くる恩寵である、（公敎要理に所謂助力の聖寵）例へば人が誘惑を退げ迷妄謬説に抵抗し、惡を避け善を行ふべき時に當りて神より受くる恩寵である、故に此恩寵は迷はざるためには智を照すの光となり、躓かざる爲には情を強むる力となるのである、又此恩寵は場合に由りて智と情に直接に與へ、或は又間接に他人の忠言を以て訓誨説敎等を以て、或は信心的書籍を以て、他人の善行を以てなど與へらるゝこともある、此時有の恩寵は凡そ人たる上は善惡に關らず、信者未信者に係らず皆悉く受ける恩寵である、未信者が僞敎を棄て眞宗敎に歸するのも、惡人が罪を悔悛するのも皆此時有の恩寵を受くるに因るのである、此必要なる恩寵を受ける道は先以て祈禱である、人類の親たる神に謙遜を以て請らば必ずしも此恩寵を受け得られる、



## 第二節　恒有の恩寵

二は恒有の恩寵といふ、これは人を聖にし神に特に愛され、神の親友神の愛子とせられて終りなき救靈を得しむる超自然の恩寵で、心の現狀すなはち靈魂が常に有する、の狀態であるから之を恒有の恩寵といふのである、此恩寵は人を聖ならしめるか成聖の恩寵ともいふ、（公敎要理に成聖の聖寵といふ、）此深い恩寵の直接の結果は神の愛子神の親友たるほど神に愛せらるゝことである、此恒有或は成聖の恩寵を受くるものは善人のみである、ずなはち先づアダム、エワより傳來せる源罪の汚れを洗はれたるもの、又其汚れを洗はれた後に自らの大罪を以て汚れないもの、或は汚れても赦されたる人々のみである、之に依て見ると人が此恩寵を受けて後若しも故意に神を棄てる所爲、すなはち一度でも大罪を犯したならば之を失はなければならぬ、例へば親に從順なる子は其親に深く愛せられる其ほど父子の間の關係が近いが、若しも大不孝を爲たならば親より勘當される其ほど父子の關係か斷たれる、人の神に於ける恰も其如

くで大罪を以て恒有の恩寵を失ふは勘當せられて神との愛の關係が截れるものである、猶又子が親に對して孝順なるの深淺に因りて親の愛情に深淺のある如く、善人の有する恒有の恩寵も行に依りて增減がある、之に依て重からざることに就て神の誡に背くの小罪は成聖の恩寵を失ふほどには至らぬが之を減すことは疑ひない。

右いふ如く恒有或は成聖の恩寵が人を神の子とし親友として終りなき救靈を得させる超性の恩寵ならば死後救靈を得る人は其死に際して此恩寵を有つて居た人のみに限ること是亦疑ひない、されば此恩寵の直接の結果は天國に永遠なる福と榮を與へるといふことである、之を以て幾何なりとも信仰ある公敎者は其死に際つて此成聖の恩寵を有つやうに何よりも心配せねばならぬ、斯く言に盡せぬほど聖い有難い恩寵を與へくは增すの方法を秘跡といふ。

## 第十八章　秘跡

右陳べたる所に依りて成聖の恩寵は神が與へ給ふ靈性的恩惠であるといふことは解



であらふ、從つて神と靈魂が無形にして視へざる如く此恩寵も同じく視ることの出ないものであることも解るであらふ、尤も此恩寵を受けた人自は其心を以て往々感得することはある、雖然五官を以て之を感ずることは決して出來ぬ、然るに吾等人間は靈魂と肉體の結合物であるから、哀哉五官に觸るゝの徵がなければ果して其恩寵を受け得たか否を確く感ずることが出來ない、成程心を以て感ずることは無いではないが、然しながら吾人は心の感じといふことほど迷ひ易い謬り易いものはない、且は又既に其恩寵を受け居るにも係らず心內に毫も感じないことも是亦往々ある、殊に又未だ智の進まぬ感應の鈍い幼童の如きは此恩寵を受けたか否、源罪の汚濱を洗はれたか否といふことを決して知ることが出來ない、此故に神は此恩寵を與へたまふことを充分感受するやう五官に觸るべき表號を云さねばならぬ、若し左もないならば人は常に不安で居るであらふ、信者に斯く不安ならしむるやふな道は不完全な道である、さやうな道は人間の親なる神の立てたまふべき道でない、此故に御主イエズ、キリストは猶太國に於て其御死去前と又其御復活より御昇天に至る四十日間に此表號たるべき

式を七つ定めたまふて、之を使徒等に授けたまふた、其七の表號が前にもいふ秘跡である、之に依て秘跡とは何であるかといへば、人に五官を以て感受する能はざる恒有或は成聖の恩寵を被らしむるためにイエズ、キリストの定立したまへる目に視ゆる聖式である、

此恩寵に就て世界萬民を見るに、未だ一回も被らないものが多くある、總ての未信者は、卽之である、又或は之を被むつても自ら犯せる大罪に因りて失つたものもある、惡人なる總ての基督敎者はすなはち之である、又或は之を受けて後は失はずして現に保有して居るものもある、善人なる總ての基督敎者がすなはち之である、之に因て成聖の恩寵は人に因りて異る、或ものは新たに受け、或ものは既に受けたるを增すとふことでなければならぬ、それで七の秘跡も亦た之に應じて恩寵を與へるものと增すものとの二種に分たれる、而て與へるの秘跡は二にして之を洗禮、悔悛といひ、增すの秘跡は五にして之を堅信、聖體、婚姻、終油、品級といふ、左に七秘跡を順次略解せむ、

## 第一節　洗禮



本書第七章人間のことを陳べたる所に於て、凡そ此世に生れ來る人は皆アダム、エワの子孫なるがゆゑに源罪の汚濱を遺傳するといふた通り、人に此源罪の汚れがあるから神の子でも親友でもない、此汚れは超自然的目的すなはち永遠の救靈を得るために一大障礙である、此障礙を除くために汚れを洗ふの洗禮といふ秘跡に依るのである、若し又生れてより公敎に入るときまで永い年月があるなちば其間には自ら犯したる種々な罪の濱れもある、此自罪も亦た救靈の大障礙である、此汚を除くも亦た洗禮の秘跡に依らねばならぬ、之に依て洗禮は源罪の汚れを洗ひ、又洗禮前に犯した自罪の汚れをも全く洗つて其罪と償までを赦され玆に始めて成聖の恩寵を受けしむるの秘跡である、すなはち人を神の子神の親友とさせる秘跡である、而て斯く源罪の汚れを洗は れ自罪を赦されるといふても此二には大なる相違の點がある、源罪は本と自ら犯した罪でない、故に之を謝することも悔むことも無論出來ない、唯元祖が斯か、る罪を犯し

たといふを殘念に思ふの他はない、然し自罪は之に反して己の犯したる罪である、神は完全なる善完全なる義に在ますものであれば此自罪を謝せず、悔みもせぬならば決して赦を與へられない、故に公教に入らむと欲するものは洗禮を受ける前に於て、又既に入りたるものは洗禮後に於て各犯したる罪を大小に係らず本心より後悔せねば決して赦されぬといふは一般の規則である、これ神は全善にして其道は人を聖ならしむるものだからである、洗禮を授くる方法は領洗者の額に水を灌ぎながら『吾聖父と聖子と聖靈の御名に依りて汝を洗ふ』といふ言を唱へるのである、故に洗禮の秘跡の五官に感ずる表號は水と言とである、而て此二の表號は此聖式の意味に最も好く適ふものである、すなはち其目的は靈魂の汚れを洗ふのであるが水ほどに洗ふの意味を表すものはない、

終りなき生命即ち救靈を得るために是非とも洗禮が必要であるといふはイエズ、リストの定めたまふた規則である、約翰福音書にイエズ、答へたまはく、誠に吾汝に告ぐ、人は水（洗禮）と聖靈（成聖の恩寵）とに因りて新たに生るゝにあらざれば、神の國に入る能はざるなり』（三章五節）と、記されてある、故に之を授けることの出來るものは司教司祭のみには限らぬ、危急な場合には誰にても授け得られる、禮は斯く誰れにも授けることが出來且つ其要する物は至る所に得易き水と又極めて記臆し易き簡短なる言である、故に救贖たいものは何の手間暇も要せず得られる、これ畢竟萬民の親なる造物主が成るべく多數の人を救贖得させたいといふ御憐みからのことである、洗禮は同一の人が二度領ることは出來ぬ、生涯一度のみに限るといふことは說明するまでもない明かなことである、

## 第一節　悔悛

右の如き神の深い恩惠なる洗禮を以て人は源罪自罪を赦され成聖の恩寵を受けて神の子神の親友となつた、人間が若しも始終合理的精神を有ち自家撞着のないものならば既に斯く成聖の恩寵を得たる以上は之に因て道を守り善を行ひ決して洗禮前の如く再

び罪を犯さないであらふが、惜哉源罪に因りて智は昧み情は涙れて惡心邪欲が強くなり、加ふるに世間と魔惡の誘勸が多く洗禮を領けて後も屢小罪大罪を犯す、極めて少數なる大聖人を除くの他は洗禮後罪を犯さぬといふものは決して無い、而て犯した る罪が小罪のみならず受けたる成聖の恩寵を失ふまでには至らぬが追々滔くなる、若し又大罪を犯したならば立所に恩寵を失つて神に勘當されたる不孝の罪子とならねばならぬ、されば若しも自らの罪に因りて失つた成聖の恩寵を再び受け得られる方法が無いならば人間は九分九厘まで助るものはなく終りなく被棄人となつてしまふであらふ、然しながら神は人の罪惡に負け易い情を能く御承知である、其無限の憐はさやふに嚴重になしたまはぬ、世界萬民を救贖ために十字架に釘けられたまふほどに御憂慮なされた神は、私欲や世間や惡魔などに負けて蹟いたものを深く憐み、洗禮後犯した る罪を赦す所の感ずべき方法を定め給ふた。之を悔悛の秘跡といふ、

此秘蹟は人の救靈のために極めて緊要であるから、人々が疑はないためイエズ、キリストより承けたる權を以て信者の洗禮後犯したる罪を赦すの聖式である。

リストは最も明晰な聖言を以てお定めなされた、そは約翰傳二十章二十三節にある使徒に對するの聖言である、『汝等誰の罪を赦すとも其罪赦されむ、汝等誰の罪を止とも其罪止まらん』と、之に依て悔悛の秘跡は使徒等の承繼者なる司祭がイエズ、キリストより承けたる權を以て信者の洗禮後犯したる罪を赦すの聖式である。

されば司祭はイエズ、キリストの代理者として罪を赦すのである、例へば彼の裁判官が陛下の代理者として罪を斷ずるやふなものである、然し是と彼とは略類するのみのことで實は其間に大なる徑庭がある、すなはち社會の裁判には如何なる場合に於ても原被の兩造が同一人ではない、罪人なる被告に對しては檢事が國家の代表者として原告の地に居る、之に反して悔悛に於ては被告と原告とが同一人である、此秘蹟を領ける信者は司祭に對して己の罪を自ら訴へる、すなはち大罪は悉く之を司祭に告白し、是我誤なりといひつゝ神に謝し後悔し以後決して再び犯すまじと決心して其赦を願ふのである、たといイエズ、キリストの代理者なりとするも、己に等しき人間なる司祭に對して斯く最も恥かしい罪までも隱さず明かに告白するといふことは誠に謙遜なる行ひである、而て舊約全書に『凡ての罪の源は傲慢なり』(會衆書十章十

五節）とあるを見れば善の源は傲慢の反對なる謙遜である、故に傲慢より出でたる罪の赦を蒙むるために道理なる仕方は謙遜を以てせねばならぬ、されば洗禮後犯したる罪が如何ほど重大でも赦されるといふことは決して理由なきことでもないといふは明かである、而して罪の赦を受けるためには何如やふに謙遜すべきや、第一は罪を本心より悔まねばならぬ、次ぎには人間なる司祭に之を告白するといふ恥辱を自ら被らねばならぬ、此恥辱や即も直さず罪人自から己に制裁を加ふる罰である、イエズ、キリストは斯く謙遜して態々恥かしい罰を受けるならば其罪は赦さるべしと約束せられた、然し左樣な恥辱を態々被ることは忍び得られないと思ふものは先左のことを考へねばならぬ、

第一、本心より後悔するならば之を恥辱に感ずるの情は餘ほど薄らいで苦痛とはいひながら心中獄を以て之を忍ぶでおらふ、此恥辱を被むるを厭ふの念あるは畢竟未だ罪を眞實に後悔せぬといふ徵である、斯く傲慢な心に覊られて未だ罪に執着して居るのは決して全善なる神より赦さるべき筈がない、



第二、一の大罪でも之に對する罰は終りなき地獄の恐しき苦みである、この永遠なる罰と、罪を告白する恥辱といふ暫時の罰とは迚も比べられぬほど輕い、されば幾千に就ても信仰があり、來世のことを知つたならば神が斯る輕微な罰で地獄より赦したまふことの如何に有難いかを感ずべき筈である、

第三、告白を聽くものは司祭といふても成程人間である、然し人間なる司祭はイエズ、キリストの代理者である、而て司祭は斯く權力の大なる代りには其義務も亦た重い、分けても悔悛の秘跡を授けるに就て司祭の守るべき責務は何より嚴重である、悔悛に於て聽いたる告白は決して他言することが出來ぬ、たとひ己の生命を喪はるゝも秘密を守らねばならぬ、司祭が告白にて聽いたる罪を告白の時にあらざる場合に其信者に話さんとするにさへも其信者自身の許を受けねばならぬ、近くいへば告白を聽くのは人でなく司祭である、故に人は之を知る筈がないからである、

悔悛の秘跡は神の無限なる憐を明かに現はすもので驚くほど有難い神恩である、眞實にいへば洗禮を受けて死したる人の中少なくも百分の九十九までは悔悛の秘跡

に因つて救靈たものである、終りに猶一つのことを考へねばならぬ、悔悛の秘跡の直接の理由は洗禮後犯したる罪を赦すにある、けれども其のみでなく尙其上に人を聖ならしめ善を行ひ易くさせる因由もある、公敎に於ては悔悛を以て犯罪の度を追々減じ、惡き癖を矯め不良の習慣を正して善人に成つた信者は數知れぬほど夥しくある、信仰あるものに對しての悔悛の道德的效果は奇なるほどである、悔悛は例へば靈魂の病を癒す聖藥の如きものである、此秘跡を屢〻領ける信者は疑ひなく邪慾惡心が薄らぎ善を行ひ易くなるであらふ、此故に悔悛の秘跡の道理なること、其人情に適すること、又其社會に對する道德的效果の著しいことを考へて嘆稱した社會學者文學者は如何ほどあつたか知れぬ、

前に陳べたる所を再び繰返していはむ、洗禮と悔悛の二の秘跡は恒有或は成聖の恩寵を新たに與ふるもので之より陳べんとする他の五の秘跡は其恩寵を增すのみである、故に他の五の秘跡を領けんとするものは人によりて洗禮或は悔悛の秘跡を以て先づ成聖の恩寵を受けねばならぬ、成聖の恩寵を受けずして五の秘跡の何れを領ける



も聖式を瀆すの至大なる罪である、

## 第三節　堅信

使徒ポーロがコリント人に贈る前書に記してあるに『吾れ今まで汝等に乳汁を飮ましめて、未だ滋食を與へざりし、そは汝等之を食すること能はざりし故なり』（三章五節）と、此比喩の如く稚兒は乳汁を以て養はれるが追々成長すれば食物を以てせねばならぬ、稚い信者には特別なる保護は要らぬが成年になれば私慾が盛になり社會のことに引き込まれる危險が多くなる、故に一層堅固な保護を要する、すなはち其信仰を

ます〳〵堅くさせねばならぬ、これが爲に領ける秘蹟が堅信である、イエズ、キリストの御昇天より十日目に使徒等が聖靈と其賜を受けたるが如く、堅信といふ聖式が洗禮を領けたる人に聖靈と其賜を招致すの秘跡である、委しくいへば之に固りて洗禮で受けたる恒有或は成聖の恩寵を增すから聖靈の降す特別な恩惠に因り智が拓け敎旨を曉り、眞僞を判じ易く、信仰が固まり、情を強くし、神を敬ひ畏れ、熱信の度

を增すなどである。

堅信は死後の救靈を得るためには洗禮の如く必要ではない、之なくも救靈は得られる、然しながら堅信を領けない信者は恰も不充分の兵器を以て戰場に赴く兵の如くで、罪惡といふ敵に敗られ易く凱歌を擧げて來世に往くことは餘程困難である、此秘蹟を授けるものは常に司敎である、けれども特に敎皇の許可ある司祭は危急な場合に授け得られる、此秘蹟も亦た洗禮と同じく生涯一度のみに限り領け得られるものである。

## 第四節　聖體

此秘跡は公敎に於て最も聖い最も意味深いもので超性の恩寵を有たない敎外者には番解り難い所であるが其大要を陳べやふ、

無形なる靈魂と有形なる肉體とは全然違ふものであるが、然し肉體が健全に生を保つために屢〻食物を取らねばならぬ如く、靈魂を健全にするために、すなはち堅い信仰



を有ち善を行ふために靈魂に適當なる食物を取らねばならぬ、此適當なる聖食が聖體の秘蹟である、聖體の秘跡を定立せられた實際の哲理を曉るためには前第六章に論じたる公敎は超自然敎であるといふことを以て考へねばならぬ、超自然卽超性敎の目的は人が來世に神らしいものに成るほど神と連合するといふにあることは旣に陳べ通りである、此目的は約翰傳十七章に記されたイエズ、キリストの聖言に明かである『廿一父よ、汝の吾れに於ける、吾れの汝に於けるが如く、彼等皆一にならんためなり、彼等も亦吾等にありて一にならんためなり、廿二汝が吾れに賜はる榮をば吾は彼等に與へたり、こは吾等の一なるが如く彼等をも一ならしめんがためなり、廿三吾れは彼等に、汝は吾れにあるは、これ彼等をして一に全からしめんためなり』と、るといふ超性の目的で造られたのである、然るに來世神と一になるために現世に於て毎度いふ如く來世に於て永遠に人が神と一になすでに一になりはじめねばならぬ、すなはち智は信仰に因りて神と冥合し、情は愛德に因りて神と連合し、體は善行に因りて神に一致するのである、而も此連合一致は不完

全にして未だ一といふほどに至らぬ、イエズ、キリストは是等のものよりも更に完全に連合せしめたいといふ聖慮であつた、而て現世に於て一番完全に連合するものは何であるかといへば食物である、飲食物は變化して肉と血になるほど人體に結合する、イエズ、キリストは此の完全なる飲食的連合法を以て現世に於ける人と一になるといふ深い聖慮であつた、勿論イエズ、キリストは人間に成りたまへる全能者であるから如何なる奥妙なことも爲し得られる、

## 第一項　聖體の秘跡

イエズ、キリストは如何にして右の如き奥妙なる聖慮を達したまひしか、そは左の聖言を以て知らるゝ、『四十七誠に、眞に吾汝等に告ぐ、吾れを信ずるものは永生を有す、四十八吾は生命のパンなり、……五十彼の天より下るパンたるものは、人若し之を食はゞ死せじ、五十一吾は天より下りし生けるパンなり、五十二人若し此のパンを食はゞ、永遠に生きん、吾が與へんとするパンは世を生かさんためにする吾が肉なり、



五十三猶太人相互に爭ひて曰く、此人如何にしてか其肉を吾等に與へて食はしむるを得ん、五十四かるがゆゑにイエズ、彼等にいひまたはく、汝等人子の肉を食ひ、且其血を飲むにあらざれば、汝等生命を有たじ、五十五吾が肉を食ひ、且吾が血を飲むものは永生を有す、而て吾は之を末の日に復活すへし、五十六吾肉は眞に食物なり、吾血を飲むものは眞に飲物なり、五十七吾肉を食ひ、吾血を飲むものは吾れに在り、吾れ又彼にある、……六十一此に於て其弟子の中數多のものは之を聽いて曰く、難い哉、此言誰れかよく之を聽かむ、……六十七此後其弟子の中數多のものは退き去りつ、重ねてイエズ、と倶には歩かずなりぬ、六十八此に於てイエズ、十二の使徒にいひたまはく、汝等も去らんと欲するか、、六十九シモンペトロ、イエズに答へけらく、主、吾等將た誰にか行かん、汝こそは永生の言を有ちたまへり、七十汝は神の子キリストなりと吾等は信じ、且曉れり』（約翰傳六章）とこれは實に奇異なる聖言ではあるまいか、弟子等が其眞意を曉るやふイエズ、は幾度も同じ言を以て吾が肉は眞の食物である之を食せぬ人は助からぬ、吾が血は眞の飲物である之を飲まぬものは助からぬと堅く仰せられ

た、斯く人の肉を食ひ其血を飲むといふことは餘りに酷いといふて主を棄て、退いた弟子は多くあつた、されどもイエズ、は斯く弟子の去るにも係らず、飽くまでも其いふ所の事實にして死後の救靈を得るためには是非とも吾が肉を食はねばならぬと仰せられた、尚もイエズ、、キリストを信ずるならば、斯くまで確い聖言、其明かなる意味を決して疑ふ理由はない、吾人は主と神なる救世主と連合するために、是非とも其肉を食せねばならぬ、さりながら其食すること飲むことは『難い哉』といひつゝ退いた弟子等の思へる如きものではない、食するといふは肉體のみでなく靈魂にも食するのである、故に肉體と靈魂とに適當なる飲食でなければならぬ、斯ることは如何にして行はれべきか、全能なる神には如何なることも爲し能はざることはないから決して疑ふべきでない、馬竇傳二十六章に『十六晩餐するに方てイエズ、麵餅を取り、祝して擘き、其弟子たちに與へて曰く、取て食へ、是わが肉軀なり。十七また爵杯を取り、彼等に與へて曰く、汝等みな此より飲め。是は罪を赦すべく衆の爲に流さんとする新約の吾血なり。』と記してある、是れと同一のことは馬爾谷傳十四章二十二より二



十四まで、路加傳二十二章十九より二十まで、使徒ポーロ、コリント人に贈る前書十一章二十三より二十五までに記してある、此意は何かといふに、麵餅は變じてイエズ、の肉軀となり、葡萄酒は變じて血となり、遺るは唯麵餅と葡萄酒の形色味のみである、されば聖體とは麵餅と葡萄酒の形色中にイエズ、キリストが全く在すのである、其御肉體御血御靈魂と其神性とが含まれるといふ秘跡である、斯く奇異なる變化は如何にして爲し能ふか、それは神の全能に因りてゐる、神なるイエズ、キリストの聖言、聖旨に因りて成る變化である、これは公教會の初代すなはち凡千九百年前より今日まで基督教者の信じ來つたことである、獨り公教會のみならず、希臘教會も羅西亞教會も同一に信じ來つて居る所である、之を信じない基督教は日本に新教と呼ばるゝプロテスタン教のみである、西暦千五百二十年今より三百八十六年前に當てルーテルといふ獨逸の公教司祭が右の信仰を棄てたのが初めである、故に凡千五百年間は總ての基督教者が之に就て疑はなかつたのである、斯の如く麪餅と葡萄酒の性質が變じて其形色だけ殘り其中にイエズ、キリストが全く在すといふ變化は餘りに不可